

岳 山

年 六 十 第
號 二 第



山 岳

第十六年第二號

大正十年十二月發行

目 次

スキー登山術

六 鹿 一 彦……………一頁

白髮山登山記

吉 永 虎 馬……………三二

冬の赤城山へ

黒 田 孝 雄……………三七

圖 版

○中山峠への道にて……………對頁 八

○黒橋より中山への道○中山峠傍近……………二四

○高見石より西北望……………四〇

○高見石より白駒ノ池○新雪の賽ノ河原……………五六

雜錄

○玉川溪谷の案内者に就て(沼井)○美ヶ原(木暮)○日本百富士考(中村直男)○十和田湖に遊びける時に(田口虎之助)○高見石と白駒ノ池(武田久吉)○甲斐駒ヶ岳の新登路(丘・T)

雜報

○淺間山爆發○樽前山の大噴火○里漁山爆發○越中山岳會成る

新刊圖書紹介

○大和アルプス大臺ヶ原山○山の幸

○會員通信

會報

○第十五回小集會記事○第十六回小集會記事○會務報告○本會規則改訂○交換及寄贈圖書○會員名簿○本會規則○投稿規定

英文欄

卷末附録として英文欄を添えたり

ス キ ー 登 山 術

六 鹿 一 彦

一

本邦各地の山岳が次第に次から次へと踏破されて、詳細なる記事が順々に發表されると云ふ客觀的事實と、多くの山岳を登攀した結果、山岳美に對する感受性が鈍くなり、尙一層強烈で且新しい刺激を求めたいと云ふ主觀的欲求とが、近頃一の新しい傾向を日本の登山家の間に擡頭させて來た。其れは雪中登山の流行、就中スキーに依る冬季高山躋攀の流行である。新奇なもののみを追ふのは餘り感心した事ではないが、最近著しく人の視聽を惹くやうになつた此の事實は、決して輕佻浮薄な一時の流行とのみ輕視すべきものではないと思ふ。生物學者や地質學者には冬季の登山は夏季程重要でないかも知れぬが、それでも夏季では求められぬ材料を蒐集し得る事と思ふ。日本の植物學者にして寒氣に依る樹木の凍割を眞に觀察し研究した人が果して幾人あるであらうか。雷鳥の冬季生棲状態を本當に研究した動物學者が何人あらうか。又寒氣や雪崩がどれ程地層を破壊するか、或は積雪が岩石の風化を防ぐ效果如何等を探るのも、冬の仕事として面白くない事はあるまい。氣象學者に至つては全く必須の事柄であらう。

しかし私はそんな意味でなく、唯單に登山其の物に興味を覺えて、山懷深く入り込む事を悦ぶ登山家達は、近來流行の徵候ある冬季登山を大いに意義あり將來ある事であると思惟して戴きたいと希望するのである。登山其の物に幸福と悅樂とを感ずる私には、登山の意義や目的は少しも判らない。大

變に難しいものであるのかも知らぬが、私としては唯登らねば堪らぬから登るのである。理窟は如何にてもつくが、要するに私等は登ればよいのだ。そして喜ばばよいのだ。此の幸福を味ひ得る機會と場所とが、雪中登山によつて更に一つ増加したと思へば、大いに祝賀してよからう。そして將來益其の發達を希つて宜からう。

二

冬季の登山は別に大して新しい事でもなく又珍らしい事でもない。けれども登山用具としてスキーを利用する事は本邦に於ては最近の事である。従つて一般にスキー登山に關する知識と經驗とに於て不十分な所が多い。此の無知に災されて、不慮の災害を蒙つた者が、スキー登山開始後年數の少い割合に、可成り多い様に思はれる。最も世人の耳目を驚かしたのは高田スキー隊員の富士山に於ける遭難であらう。其後各地に於てちよいとスキーに依る遭難を耳にする。越後赤倉の大田切川に於ける凍死や、山形の或る谿谷中に於けるスキーランナーの雪崩に壓殺された事や、或は又スキーではないが藏王山に於て仙臺中學生の凍死等、犠牲者の數は夏季登山に比較して驚く可き歩合を以て發生しつゝある。最近澁温泉の奥で札幌中學生がスキーで草津へ出様として凍死した如き、今正に發展せんとするスキー登山の進歩を妨害する恐があるかとまで思はれる。何よりも犠牲者を出すのが悲しい。スキー登山は夏の登山に比しては幾分危険の機會が多いかも知れぬが、現在の犠牲は多くはスキー登山に關する正確なる知識と、周到なる準備とを缺いて居る爲に生ずるのであつて、犠牲者其の人に對しても、甚遺憾千萬な次第である上に、若し是が爲に漸く萌して來たスキー登山の發展普及上に有害な影響を與へる様であつては、甚だ残念なところと思ふ。私はスキーを穿いて六年間の經驗を持つて居る。そしてスキー登山も北海道帝國大學スキー部員となつて可成り行つた事があり、貧弱ながらも

少しは此方面の事なら話し得るので、スキー登山に關する事柄を詳述して諸君の御批評を乞ひたいと思ふ。此の文の爲に幾分でもスキー登山術が進歩して犠牲者の數が減じ、同時に益々スキー登山が普及發達すれば望外の喜悅である。

三

優秀なるスキーランナーは必ずしも良好なるスキー登山家ではないと云ふ事を先づ第一に述べておかねばならぬ。スキー術が巧であつたとてスキー登山が安全に且平易に出来るかと云ふものではない。スキー登山家は矢張りアルピニストでなければならぬ。如何程巧妙にテレマルクやクリスチャニアが出来、如何程キャンプに於て優秀なるレコードを作つたとて、一般の登山術に長じて居らねば何にもならぬ。だから登山家がスキーを練習して冬季の登山を行ふのであつたならば、技術の進歩次第で、何んな山へなりと登れるけれども、スキー術に長じて居るから一つ山へ登つてやれ、と云ふのでは駄目だ。否寧ろ斯様な人が冬季の登山で一番危険な状態に在る人である。スキーを練習した結果登山に志したならば、先づ極めて平易な山から登山の練習を始めねばならぬ。山岳に於て行ふスキー術は練習場に於けるスキー術とは大いに趣を異にするものである。スキー練習場のスキー術は滑降が主要なものであるが、山岳に於ては寧ろ登攀の方が主要であると云ひ度い位である。

兎に角、明言しておく。優秀なるスキーランナー必ずしも良好なるスキー登山家でない。そして最危険性を帯びて居るのは、スキー術の拙劣な登山家ではなくて、登山術に無知なスキーランナーであると云ふ事を。

四 登山用具

スキー登山術を説述するに當つて、先づスキー登山の用具や服装に就いて述べて置き度い。しかし登山に關する用具や服装、及びスキー術に必要な用具や服装の一般に互つては、各々其の方面に於て詳しく述べられてあるから、一般の事項に就て知りたいたいと希望せらるゝ人は、夫に關する著書を一讀されてから此文を讀んで戴けば誠に結構である。それで茲には唯スキー登山に於て特に必要と思はれるもののみを記して見やう。

スキー アルペンスキー（アルペンシー又アルバインスキー）即ち奥國式スキーと稱する型の金具のついたのが最もよい。革を主としたウキッドフェルド式やエレフゼン式等の所謂ノールウエー式縮具のスキーは感心せぬ。又近來アルペンスキーの金具を改良（改悪と云ふのだらう）した簡易式なんかと云ふ發條のない安價な物があるが、此等ではどうしても都合が悪い。矢張少々重くてもアルペンスキーに優るものはない。そして登山の時は平地滑走の時よりも幾分強く發條を握ちておけば登行時に樂である。

臺木は輕くて強靱な、雪の附着し難いものが宜い。だから形は成る可く小さくして五尺三寸の身長の人で六尺位の物がよい。長いのは操縦が困難で苦しい。中央部の反りは可成り強く附け、一般に巖丈に作りたいたい。材は矢張りトネリコだと思ふ。少しは重いが強靱で良い。ケヤキは輕いが折れ易い上に、よく雪が粘着するから、南斜面の登行には却つてトネリコよりも附着した雪の爲に重くなる。塗蠟で防ぐ時には變に滑り易くて登行角度を大きくする事が出来ぬ。其他にはサクラなどが良い。何れも油煮とか亞麻仁油塗りとかにしてはならぬ。あんな事はグチャ／＼雪の平地での窮策である。登山用には不適である。

臺木の型はテレマルク型が良いと思ふ。即ちアルペンスキーの様に底面の平なものではなくて、中央に一本の縦溝が彫つてあるものである。アルペンスキーを創製したズダルスキー氏は此のテレマル

ク型を山地に適する様に改良したのであるが、今になつて見れば、金具の方には全く感嘆し敬服するが、臺木の方は却つて元の儘の方が良いと思はれる。縦溝の必要は、山地の粉雪（サラ／＼して握つても固らぬ乾燥した雪）上で滑走する時に感じる。こんな雪の上ではよくスキーが横へ滑る。之は縦溝によつて完全に防ぐ事が出来る。縦溝は廻轉滑降の邪魔になると云ふ人もあるが、恐ろしく長大なスキーへ深い溝を彫つた者には幾分そんな感じがあるが、六尺内外の物では決してそんな事は無い、縦溝を彫る事は必ず今後の山地スキー、特に冬季の粉雪を滑る山地スキーには實行されねばならぬ。

杖 信濃飛驒國境山脈附近の山岳へスキーで登つた人達の中では、どうかすると此んな山地では單杖でなければ不都合だと云つて居るのを聞く事がある。私は此の方面の冬季登山には無經驗であるから、あまり斷定的に話すのは獨斷の弊に陥るかも知れぬが、此邊の山岳、特に山嶺近くに於ての堅雪や硬雪が、單杖の必要な事を覺らしめたと云ふのであるならば、甚意を得ぬ事だと思ふ。スキーを穿いた儘で居られる様な雪質や傾斜では、單杖とて復杖とて杖其物に優劣はない。復杖では不都合を感ずると云ふのは、使用法が悪い爲なので平地や粉雪地での復杖使用法を、其の儘山地や堅硬雪地で應用し様とするからである。單杖は山地で使ひ易いと云ふのは、元來が山岳地方で使ふ爲に考案された物なのだから當然の事である。しかし復杖とて決して山岳地方で使用する出來ぬものではない、現今一般のスキランナーが平地や低い丘陵のみで練習した爲に、復杖の使用法を此の範圍内でのみ知つて居るに過ぎぬから、前述の様な言も出る。そして偶々平地用でない單杖を持つて「山地では單杖に限る」など、得意がつて居る。復杖が山地で役に立たぬと云ふのは、少し大袈裟にいへば私は復杖の使用法を知らぬ未熟者ですと云ふのと同様であるともいへやう。尤も實際山地で復杖の始末に困る事もあるのであるから、前述の言は此の事に對して云はれたのかも知れない。夫は灌木の茂みの中を突切つて制動滑走をやる時だ。此の時こそあの雪輪が小枝に引懸つて、後へ引き倒される事が屢々あり、

單杖がよいなと思ふのである。しかし所謂日本アルプスの山巔近くではそんな灌木が出て居る事はあ
るまいから、複杖の不適は云へぬものだと言ふ。

平地滑走の時は單複杖の優劣は申す迄もない事だ。登行時とても後滑りて苦しむのは單杖の所有者
だ。單杖を持つて後滑り留の海豹皮シカを附けたスキーを穿くのと、シルスキンシルクを附けずに複杖を持つ
のとは、能率に於て大差がない。前者は少し登行角を大にして登れるが脚部が疲勞するも大であり、
後者は比較的肩から腕に疲勞を覺える代りに脚は大丈夫だ。結局滑降時には後者が勝つてしまふ。深
雪の急斜面では、谷手の杖は其の上端を握り、山手は革紐から離して下方の握頃の所を持って至極使
ひ易い。急斜面でしかも硬雪の時には、谷側の杖は谷手の腕に革紐で下げてしまひ、山側の杖を單杖
同様に使へば少しも不自由はない。長さも斜面が急だから丁度使ひ頃である。此の時にピルゲリー
(Pilger) 氏が 'Der Alpine Schilau' の中に示し居る様な複杖の使用法(單杖の様に一本の杖を持ち、
谷手は他の杖を垂直に持ち添えて、此の谷側の垂直に持つた杖を谷足スキーの下方に突き立て、ス
キーの滑り落ちるのを防ぐ)はあまりに技巧を弄し過ぎて、實用的價値は危ぶまれるが、一步／＼谷
側の杖を谷足スキーの下側に突き立て、滑落を防ぎつゝ進むのは、短距離の危険地通過には實際有効
である。此んな時には單杖では、唯單に斜面にしがみついて却つて滑落する位が落ちではないか。又
急斜面の方向變換(Kick turn)では複杖の時には最初から杖を各々體の兩側に突いて行ふから、單杖
の時の様に杖を突き替へる時の姿勢の不安定を免れて、危険の度が少い。

或人は複杖は弱いからと云ふかも知れぬが、それは何處かで用ひてゐる鼠の尻尾の様な細い竹を使
ふからの話で、竹さへ吟味すれば決して弱くない。丈夫な竹では二本も持つと重いなど云ふなら
ば、そんな力無しは始めからスキーをやつたり登山に志したりなどせぬがよいと云つておかふ。

制動滑降や廻轉滑降として二本杖を一緒に束ねて持つか、一方の杖を革紐で腕に下げて居れば少しも

不自由を感じない。それが出来ぬ間は技術未熟と思つて専心練習が肝心であらう。

單複兩杖を折衷したつもりか、二本合はすと一本の丸い杖になる様に作つた木製でアルミニウムの雪輪が附いた杖があるが、恐ろしく重くて其上値段が高い。握り工合も横断面が丸くないので變であるし、山の都合によつては合したり離したり到底其の煩に堪えぬ場合があり、あんまり感心したものではない。

氷斧の下部へ複杖同様の雪輪を附けたものは、各國の高山地方で冬季用ひられて居るが、之はなかなか有効なものだ。複杖の一本を此のアルペンストックで代用すると、少々重いのを辛抱さへすれば山嶺近くの堅硬雪地では大いに役に立つものである。特に金櫛でも持つて行く時には、是非無くしてはならぬ利器である。氷斧の廣刃の方を握つて歩けば、平地滑走を行ふ際にも邪魔になる處か、却つて複杖よりも取扱ひ易い位である。急斜面では之を單杖の使用法に準じて使へば少しも不自由はない。

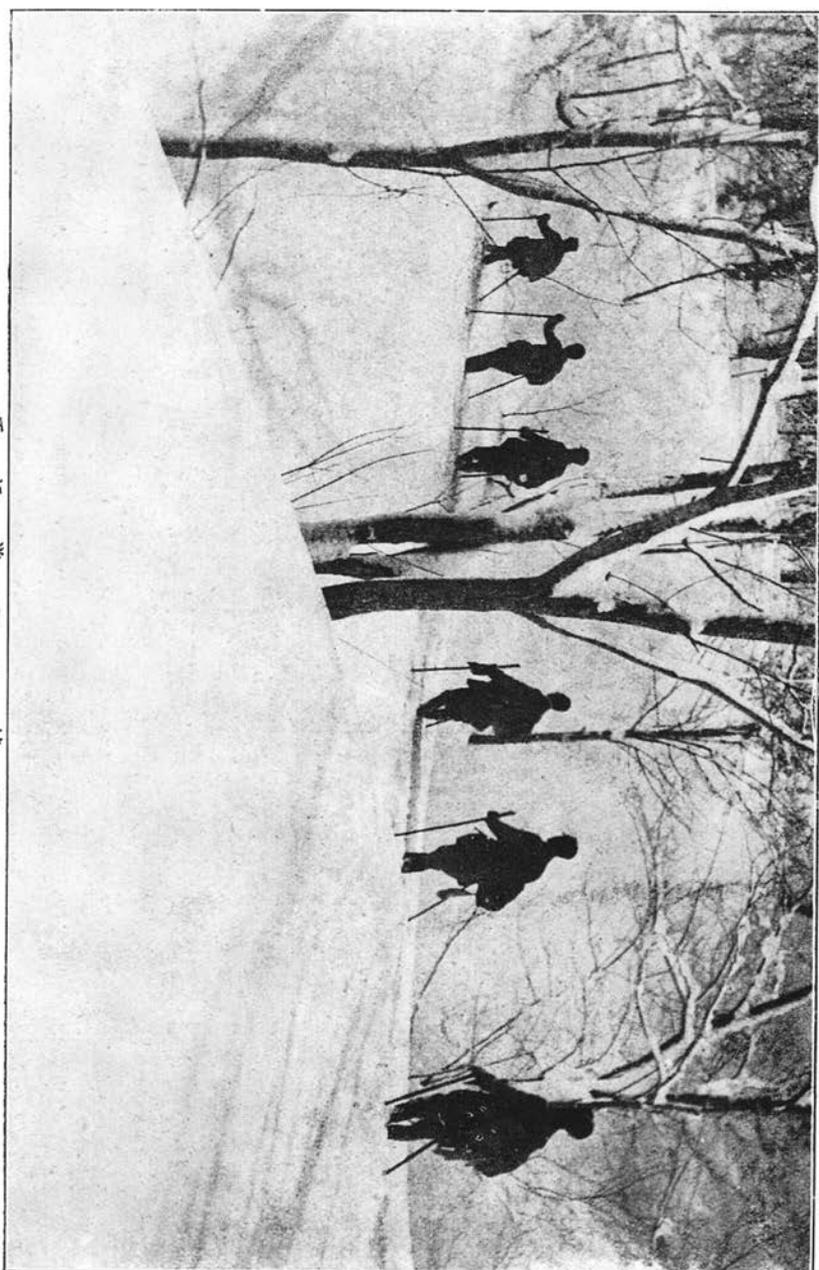
海豹皮 登山の時間を短縮するには出来るだけ登行角を大にせねばならぬ。従つて後滑りを防ぐ海豹皮を附ける必要が生じて来る。だがズダルスキー氏も述べて居る様に、粉雪地でも適當なる歩行法を行へば最大十二度までは直登行が利くものであるから、登山に慣れてスキー術に熟達した人には餘り必要がない。海豹皮を附けると登行角度が極端に大となり、二十二度にも及んで足首が酷く曲げられて疲労が早いから、特に短時間で登るのを必要とする時以外には、滑降時に疲労の爲轉倒し易くて却つて不利である。其他に皮とスキーとの間に雪が挟つたり、斜面を横に辿る時には横へ脱れ易く、重量を増加さす等の缺點を考へると、技術の進歩した者には普通の場合に於ては用ひるには及ばない。けれども粉雪に慣れぬ人や技術の十分でない人は是非携帶使用せねばならぬ用具である。

登行鐵 裸出した山頂等によく存在する硬雪や堅雪の地(堅雪とは氷化し又は半氷化した、雪と稱し難い種類の雪で、硬雪とは粉雪が強風の爲叩きつけられて極めて密に且硬く固つた雪)を横切る時に、

スキーの側面に附して横滑りを防ぐ金具である。之には二種の型があつて、ビルグリー式は締具の部分に装置する様になつて居り、ソーム式は締具の前後二ヶ所へ装置する様になつて居る。此の登行鐵 (Hartmann) なるものは、私の經驗によれば全然無効なものと信じて居る。否寧ろ有害なものともて斷言する。元來スキーの稜附だけでは危険で登れぬ様な場所と云へば、常に強風の吹きつける高山の急斜面である。こんな所の雪は其の表面が決して平ではなく、必ず風の爲に凹凸不齊を極めて居る。こんな状態の下で登行鐵をスキーに取りつけて、其の刃を雪の中へ打ち込もうとした處で、スキー稜がうまく雪面と接觸せぬ爲、登行鐵は雪の中へ入らない。ビルグリー式では大抵の場合、スキーの前後が雪面で支へられ、肝心の登行鐵のある中央部は宙に浮いて居る。又ソーム式では前後の二ヶ所に取り付けてあるので、斜面が平滑ならば完全に横滑りを防ぐだらうが、波形の甚しい所だから、一方より雪に入らぬ場合が屢々ある。之ではスキーの前後どちらかへ滑り落ちて、寧ろ無い方が安全だ。何れにしても不完全な上、此んな登行鐵が打ち込める位の硬雪ならば、單に強く稜付をする事によつて熟達者は通過し得られる。高山の高所に於て見る氷化した堅雪上では登行鐵は何等の力をも有しない。だから金樫を持つて居るとすれば、スキーを脱いだ方がよいので、登行鐵の價値は實際の處認める事が出来ぬ。寧ろ此の物の効果を過信して却つて危険に陥る事があるから、有害なものとも斷言しておく。

金樫 少くとも灌木帯に入つた山岳の山頂を、雪質の如何に係らず、即ち假令スキー使用の範圍外にあつても是非共窮めたい時、或はこんな危険地の山稜を横断したい時等には金樫が必要になる。堅硬雪上を歩くには歐米の登山家の使用する登山靴 (Tailed boots) が必要だが、日本では良い品がなく、且冬季の堅硬雪上では、あれのみでは不安心で矢張り金樫なしでは危険だ。金樫には種々の型があるが、夏季に雪齧て使ふ草鞋用の物は冬季の靴に附けるには感心せぬ。冬季金樫を用ひる時には急傾斜

中 山 峠 へ の 道 に て



面が多いから、登路には爪先、降路には踵に丈夫で有效な爪のある金標でなければならぬ。且、シツクリと靴に密着して動かぬ物でなければならぬ。其れだから現在の處では、美滿津で (Tooreper) と稱して賣つて居る中央が蝶番になつた五本爪の物の型が良い。此れをシツクリと自分の靴に適合さして動かぬ様に作つておく必要がある。靴に附ける爲の紐は十分ワセリンに浸して二三條準備せねばならぬ。随分よく擦り切れるものであるから。

登山繩 登山にロープの必要な事は如何なる人でも御承知の事だから贅言を連ねる必要もない。金標を穿く位の所では必ずロープは使つて貰ひ度い。スキーを穿いて居る間にロープを使用する事は唯登路には或は用心の爲によいかも知れぬが、降路は寧ろ有害の様に思はれる。ロープを使用せねばならぬ程の所では金標に代へたがよい。スキーを穿いて居られる程度の場所ならば、ロープを使ふまでの事はない。之がアルプスの氷河の上を降る時の様に、Snow-Bridge の上に乗つた爲、それが崩落して氷河のクレヴァスへでも墜落する危険のある時には、ロープの必要もあるが、日本の冬季登山ではそんな心配はない。返つて滑降の自由が利かず轉倒を多くするだけ不利な位である。

輪標 スキー登山に輪標を持つなどは實は馬鹿げた事だ。都大路を自動車で走るのに草鞋穿て居る様なものだ。しかし道路が壞れて居たり、自働車に故障の起つた時には草鞋穿きが便利な事がある様に、スキー登山でも輪標の方がよいと思ふ事がないではない。即ち、急斜面の密林中で、雪がザラメ雪である爲、スキーでは適當な登路を發見し得ぬ時や、應急修理さへ不可能である様なスキーの破損時には、輪標が大いに役立つ。しかし全員が輪標を持つて登る等は努力上馬鹿氣て居る上に、密林で苦しむならば登路を變更するのがよいので、小距離の密林なら、何とでも手段はとれる。だからスキー折損の用意として、一對の輪標を持つ事は遠距離又は大規模の登山には必要である。

赤旗 山中で目標を作つて置き度い場合は可成澤山ある。例へば歸路を明にしたい時、(スキー條痕

を頼りにするのは不可能である。硬雪では條痕が残らぬし、粉雪でも風が一吹すれば全く吹き消されてしまふ。或はスキーから金標に穿き代へた時に、スキーの置場を示したい時、後續部隊に進路を教示しておきたい時、或は又紀念としたり後日の參考に資する爲或は特定地點を残しておきたい時等には、是非何かの記號標が必要である。最便利で有效なのは此の赤旗であらう。勿論耐久性には缺けて居るが、登山紀念なんかはどうでもよい事なのだ。それより他の事柄が大切だ。之には赤木綿で旗を作り、十分長い紐を付けておいて、各自が風呂敷代用として持つのがよい。特に徽章を白く抜いた物を作りておけば甚氣の利いた物であらう。

呼子笛 救助信號としては、日本の様な登山者も無く他にも人間の入らない冬季山中では効果もなく、且必要もないが、隊員相互間の信號用としては是非なければならぬ。即ち先導者が此の吹鳴によつて一行を指揮するのである。滑降中に後續者が故障を生じて先登に進行を停止させ、連絡の途切れぬ様にする時には最必要である。吹鳴法を制定しておけば完全に其の目的が達せられる。例へば、

一、進行、二、信號聴取の位置に停止 三、發信者の位置に集合 四、危険救助 五、應答

右の様な規定を作つておけば、先登を待たず時は二、停止した先登を進行さすには一、救助を求めらるには四、危険ではなくて、何事かを隊員に依頼したい時等に自分の許へ來て貰ひ度い時は三を鳴らし、總べての信號の應答に五を鳴らして承諾の意を傳へれば、隊員が分散して連絡のとれぬ様になる恐は全くない。

呼子笛は角やセルロイド製の巖丈で音の太いのがよい。金屬製の物なれば、唇の觸れる部分には紙か布を捲いて、唇に冷却した金屬が凍りついて皮膚を傷けるのを防禦する必要がある。何れにせよ、紐をつけてポケットから引き出し易く且落さぬ様にしておかねばならぬ。

修理具 各自が必ず持たねばならぬのは、發條、締革、蠟、ワセリン、針金の類であるが、其他の

本當の修理具は團體として誰か々持つのである。最必要なのは臺木の折損を應急修理する材料で、種々の物があるが、最有效だと思はれるのは、鐵板をスキ一の幅で長さ一尺位に切り、豫め釘の孔を開けて携帶して居るのである。折れた時にはスキ一の折損ヶ所の表裏に鐵板を當て、小釘で留めれば滑走に差支はない。金具の破損は針金で大丈夫修繕される。器具の事は一般のスキ一の著書に詳細に記してあるから駄辯を差し控へる。

雪眼鏡 一般にスキーランナーに必要なから特説するにも及ばぬが、黒色の濃度は懸けた人の眼が外部から透視されぬ程度でなければ効果がない。近來流行する茶色の塵除眼鏡は、曇天で積雪面の高低起伏の判別し難い時には、大いに役に立つものである。だから普通は此物を用ひた方が得策であらう。眼鏡の縁は金屬よりもセルロイド製が寒氣の關係上からして好ましい。飛行機用の眼鏡の様に、覆ひのある物は、發汗する爲硝子が曇つて駄目である。吹雪にでもなつた時は、色眼鏡の必要もないから尙更覆の必要はない。それに吹雪では眼鏡に雪が吹きつけられて積るから脱すより外仕方がない。

天幕 天幕を持つ事になれば、それだけでも重いのに食糧も大いに増加するので、勢ひ人夫を多く要する事になる。けれども現在の人夫は輪樑より穿けぬから、自轉車とゐざり車と同行する様なもので、どちらも苦しい。そして眞のスキーに適する雪では輪樑で荷物を荷つては到底歩けない。だからスキー登山に天幕を持つ事は現在では先づ難しい。尤輪樑でも大して苦痛でない時期になつてから降路を利用する考だけでスキーを用ひるか、或は輪樑の利く雪の部分にだけ人夫を使つて其處で露營して登山する事恰も白馬山の如くにするならば問題は別だ。冬季のスキー登山に最適した時期に於ては輪樑の人夫の行程に従つてスキーの眞價を發揮しないならば天幕も使へるが、そうでないとすれば天幕は駄目である、けれども夏と違つて、雨の心配がないから、丈夫な紙又は防水絹地等で作れば、體力の優良なる人が居れば絶望ではない。又樺太で使つた事のある幅一尺位の長い巻ゲートルに似た布を、

スキーと杖とで三角形に組んだ框へ巻きつけて、一人だけ入れる小形の小屋を作るも一法である。しかし寒氣は随分厳しいから固形アルコールで暖をとつても睡眠の點は難しい。スキー登山旅行の露營は人夫の關係上、どうしても限定された地域で、限定された時期にだけ行はれる事になつて来る。

寢袋 人夫を賃して天幕を持たずとすれば此の寢袋 (Sleeping bag) を持つて行くがよい。犬か山羊の鞣皮で身體全部スッポリと首まで入る袋を作つて、其の中で寝るのである。シャツを四五枚澤山持つて行つても雪の上で寝る時には何にもならぬ。其の重量で此の袋を持つては、樂々と眠る事が出来る。毛のある方を外部に出して作る事は一般の毛皮の衣類と同様である。之をリュックサックの代用にすれば大分重いが便利なものである。

毛皮でなくてズックでも仙臺製の紙でも、袋に入れば餘程暖である。

五 服 装

スキー登山の際の服装は、一般のスキー術練習の時に用ひるものであれば大略はよいのであるが、北陸や東北の軟雪地方での練習時に着て居るものでは、甚不用心である。それで念の爲に無駄ではあるかも知れぬが略説して見たい。

衣服 洋服である事は云ふまでもない。其布地に就て一言せねばならぬのであるが、唯無闇に暖い物と思つて地質の厚い物を選ぶのは愚策である。上衣を地の厚い羅沙等で作るのは第一重量の點で困る上に、經費の點でも考へ物である。登路は著しく暑さを感じるもので、特に快晴の日には雪からの反射熱が随分烈しいから寒氣に對する心配はない。スキー登山で寒氣に對して考へねばならぬのは吹雪に遭遇した時である。こんな時には餘程地の緻密な物でなければ、織目を透して吹き入るので、唯地の厚いのみでは何にもならぬ。毛絲のジャケツ等は何枚重ねても何の効果もない。此の吹雪に對し

て十分防寒の効果を有し、輕量で且つ登路に於ては熱くない様な上衣が欲しい。其上雪が融けた時の用心に、防水性でありたい。だからレーンコート地が一番良い其中でも廉價を要求するから、亞麻製の防水布が最適當して居る。價格は一ヤール二圓以内だから十三四圓で出來上るであらう。此の布地で登山服を作れば先づ上等の服裝が整ふのである。ヒダは成る可く雪の溜らぬ様な形にせぬと、吹雪で吹き込んだ雪が融る恐がある。袖口は是非細く溢れる様にしておかねば、長手套を穿める時に甚不便である。襟は折襟にして襟卷を上衣の下にしたのが一番都合がよい。ズボンに地質の厚くて密な羅沙で作り、其上へ更に亞麻のズボンを穿くとよいが、此の亞麻ズボンは左程迄重要とは思はない。

帽子 毛絲製の目だけ出る様な防寒帽は用ひる價値がない、晴天の時には頭を蒸して熱過ぎるし、強風や吹雪の時には編目を透して吹き込む風が帽子のないと同様に冷たく皮膚に當り、毛の間に溜つた雪が體温で融けて次第に濡れて來る。そして遂には再び凍結して氷の帽子になつてしまふ。眼の中へ吹き込むのを防ぐ目庇はほんの申譯的の物であり、頭の方へ吹き込む風には全く開放してある。風の吹かぬ低温の時に、耳だけを覆ふより他に使途がない。登山には服地同様、目の詰んだ物を用ひねばならぬ。目庇を長く廣くして吹雪と同時に目映い日光をも遮り、後頭部から耳や頤をシッカリと包む様にせねばならぬ。型は種々考へられるが、現在美滿津でスキー帽として出して居る羅沙製の物を、も少し頤の方を十分に包める様に修正した物等は一番無難である。寒氣の激しい地で用ひるからあまり手數のかゝる複雑な防寒装置は不便である。

靴 防寒を主要なる目的とし、防水を主要とするのでない事を頭に入れて置きたい。軟雪地方で練習した人々は得て此の間違がある。之はスキー材に就いても同様で、水の浸まぬ様に努力して却つて後滑りて弱ると同様、防水の方ばかり氣を取られると困るから附言しておく。理想的な靴としては完全な防寒性であつて従つて體温を外部に傳へて雪を融かし靴を濡らす様な事はなく、しかも足の發

する汗を悉く靴の外部に出してしまふ様なものである。其の點から云ふと絨製の物であらうが、アルパイン式金具には適しない。そこで靴としては二重皮にして十分脂油を塗布し、近寒時には毛皮の爪掛や、羅沙製の上靴を用ひるがよい。但し春の凍雪上では爪掛や上靴は濡れるので却つて有害である。靴底の全周に齒形の大釘を打ちつけるのは必要があるまい。第一日本ではよい釘がなく、打ち方がまづいと靴底の革を傷めて湿つたり腐つたりするから、金標を持つて行く方が完全でよい。又スキー金具の都合がよく滑つて脱れるから無い方がよいと思ふ。

靴の手入は最丁寧にせねばならぬ。凍傷の原因は靴の内部が湿つて居た爲である事が多い。爐や、ストーブの周圍に列べて乾燥すると、表面は乾いても、湿氣を悉く靴の内部に送り込んで、却つて悪い。其上往々こがしてしまふ恐がある。だから火氣で乾燥するにしても、室内の空氣の乾燥によつて乾く位が好ましい。藁を靴の内部に入れておくと醗酵熱でうまく乾く。其の上へ脂油を塗り込んでおけば先づ間違はない。湿つた靴を登山の疲勞で手入れもせずに打ち棄て、おくと、翌朝は全く石の様に凍つて穿く事も出來ず、こんな靴を穿いては忽ち凍傷の恐がある。いくら二重皮で間へゴムを入れておいても、發汗した時は内部が湿つて居て最危険だから常に手入れを怠つてはならぬ。

手袋 純毛製の分指手套一枚と、スキー用長手袋一枚で先づ十分である。近寒時は長手袋を今一枚穿めるもよいが、敏活な指の運動を妨げぬ様にせぬと杖を使ふのに困る。防水布製の上手袋は風の透過を防いでよいが、ゴワつくのと杖が滑り易いのが缺點である上に、直に防水が利かなくなつて却つて濡れる恐がある。普通の場合には餘り必要とも思はぬ。強風又は吹雪の時で風が透つて凍傷の恐のある時には紙で包むがよい。紙は此んな目的には非常に優れた性質を持つて居てシャツや耳覆にも代用して大效がある。其他手足や顔にはワセリン其他の脂油を塗る事を附記しておく。

其他のゲートルや靴下、シャツを始め毛皮製の耳輪、襟卷等は特説するまでもあるまい。唯何れも

豫備品を必要とし、特に手袋に於て然る事を切言する。

六 食 糧

食糧は登山では大問題である。兎に角輕量でしかも栄養價の多い物でなければならぬから大いに考へねばならぬ。けれども此の問題は既に幾度も論ぜられ研究された事柄であるから、スキー登山の場合に當つても今更事新しく述べるまでもない。然しながら寒氣が甚しい時季の事であるから其の點より見て、多少夏季の登山とは趣を異にする點もあるのので、極めて簡單に述べて見たい。尤も食糧や炊事具の選定には經濟問題と嗜好問題とからして、大いに趣を異にするので甚だ取り扱ひ悪い。それで簡單に述べて置く。

食物は絶えず少量に食する事が總べての登山に於て必要な方法であるが、スキー登山の際は特に然りである。しかも寒氣の爲に永く停止し難いのと、手袋を脱し難いのとで食物は常にポケットへ出して置いて隨時口にされるものでなければならぬ。従つて水分を多く含んだ食物は凍結して役に立たぬ。握飯等はポケットへ入れておけず、又手に持つて居て嚙りつゝ歩く譯にも行かず、最悪い事は凍結して眞白の石英砂の塊の様になり、不味くて咽喉へ通らぬ。パンの類、特に糖分を含んだパンが一番口にも美味く、凍結も少い。又少々凍結しても食べて不味くない。之に氷砂糖、乾葡萄、乾杏を添へるのがよい。ビスケットや堅パンも悪くはない。サンドウイッチもよいが豚肉が凍つて不味い。飲料は是非魔法瓶でなければならぬが、ウキスキーの空瓶に詰めて肌近く持つて居ると案外良結果を得る。砂糖を多量に加へた濃い紅茶へウキスキーを加へたのが一番好ましい。之は凍結をも大いに防ぐものである。雪を食するのはエネルギーの損だし幾ら食べても、飽く事がなくて消化器を損ふから避けねばならぬ。

數日のスキ―登山では別に夏と大差なくともよいが、矢張り出来るならばバンの方がよい。燃料が面倒だし、水も大變だ。固形アルコホルで食料を作る程度でなければ無理である。

七 登山術

愈主眼とするスキ―による登山方法を述べるのであるが、先づ冬季スキ―登山隊の組織に當つて注意すべき諸點は次の様である。

- 一、團體は必ず三人以上なる事。
- 二、一人は必ず山岳や登山術に對して智識と經驗とのある事。
- 三、各人の技倆が大略相匹敵する事。

以上の諸點を考慮に入れて登山隊を組織したならば、愈山に入るのであるが、行程は總べて隊員中の最劣等者（體力にも技術にも）を標準として作られなければならぬ。此の點に於て前の第三項が非常に大切な譯である。

登山に用ふるスキ―術としては奥國式スキ―術があるが、私は之に次の事柄を加へて一般スキ―術以外に登山に際しては知るべき事の多いのを示したいと思ふ。

イ、登行法 第一に登行法である。先づ一人の先登を定めて他のものは先登が全責任を負つて選んだ登路を踏襲する。先登の條痕から離れるのは、先登のした新雪を分ける苦痛を再び繰替すので大いに損であるのみならず、又假りに先登の登路が迂路であつたとしても、他の者が新しい捷路を作る事は、全責任を帯びて居る先登の不信任を表示するもので快い感じを與へる事ではない。先登の進む速度は自らが發汗しない程度にし、著しく強健な人が先登に立つた時には團體中の最弱者（體力にも技術にも）に好適な速度でなければならぬ。登行角も團體中で最滑り易いスキ―の執り得る最大角に於て

定むべきものであるが、普通は略々一定して居るもので八度から十二度までの間である。此の角度の選定は全く無意識的に足首と膝關節との感じて行はれるもので、全く練習の結果である。

先登は特に登りつゝある目的地の方向を確實に知つて居て、其れに達するまでの峰や谷の様子をハッキリと前以て心に刻みつけておき、之を基礎として時々刻々現れ来る斜面や森林に對して適當な處置を施さねばならぬ。確實な方位認識力を有する事は如何なる登山者にも必要な事であるが、スキー登山の時は進路が絶えず變轉するから、餘程完全な使鳩や蜜蜂の様な、本能に近い力を持つ事が必要である。之も練習によつて發達せしめ得るので、團體中に一人のアルピニストを要するのは此の點である。スキーランナー必ずしも良好なる登山者たらずとは、畑地で練習して居る人にはこんな力がないからだ。

スキーの登行法には種々の型があるが、登山に使ふのは一種であつて、電光形を形成して進む直登行のみである。斜横登行及び横登行は特殊の事情の下に於てのみ用ひ、開脚登行は全く使用せぬ。登行も無立木裸地へ出てからは全く楽なものであるが、森林中に於ては仲々先登の努力を要し、しかも熟練せねば適當な進路を發見する事が出来ぬものである。樹木が立ち列んで居る間を縫つて登るに際し、樹木に觸れぬ様にと木に目をつけて之を避けるのでは決して森林中を登れるものではない。樹木に注意を奪はれず、眞白に見える空所ばかりを探して登路を作るのである。樹間の空隙が適當な角度で長く連なつて居るのを狙つては、其所へ進むのである。しかも常に方向を逆轉して進む時に執るべき登路を探求しつゝ進まねばならぬ。どうしても進路を樹木が邪魔する時には、餘程手前から漸次登行角度を急にして、其の樹木の上部を通る様にせねばならぬ。樹木に衝突してしまつてから急に横登りをして之を避けるのは疲勞を増す上に、深雪傾斜の時は、スキーを側上方に持ち上げるのが困難であつて、先登が苦しみ、後續者は足場の雪が踏み落されるので登り得ぬ時が屢々ある。こんな状態の時

は寧ろ下方へ低く降りて避けた方が勞力上有利である。

廻れ右 (Kick turn) は出来るだけ數を小さくした方が時間の點で有利のみならず、特殊の姿勢から来る疲勞と、急斜面では特に滑落の危険機會とを少くする事が出来る。此の方向變換を急傾斜面上で行ふ時には餘程足場を確實に踏み固めてからでないといふ危険である。特に少し雪が堅い時や、強風の時には十分の注意を要する。全く谷を向いた姿勢の時には下を見ぬが安全である。實際目が眩む恐がある。複杖を體の兩側に突いて之に頼るのが最安全である。ビルグリー氏は山側の方を向いて方向變換を行ふのが安全であると云ふが、足場が確實に作られないので雪の固い時には如何と思ふ。だが著しい急傾斜でない山腹、即ち三十度位までは確に方向變換は山側の足から始めるビルグリー式が樂でもあり、又時間や勞力の點からも利する處が多い。

此の方法は熟達するまではスキーの後端を以て他のスキーを踏みつけたり、後退したり、又はスキーを雪中に突きさしたりするものであるが、慣れて來ると非常に樂で急斜面でも苦痛を感じない。唯注意すべきはスキーを廻轉さすのに極めて敏捷に且スキー先端を高く上げる爲に其の方の足の膝を曲げる點である。

先登になつた者の尙注意を要するのは、左と右とによつて登行角度の差異がある事である。一方は極めて急角度にして後續者が後滑りて苦しみ、他方は反對に至つて緩い傾斜にする爲に、登行距離と時間とで不利を招き、同時に角度が著しく異なる爲に却つて疲勞を増す結果になる。此の點は平常の練習が大切であるけれども、此んな傾向がある事に注意して其の弊に陥らぬ心懸も大切な事である。

先登の歩き方は森林帯の様な雪の深い所では特殊の方法によらねばならぬ。普通の平地滑走の方法では疲勞が多くて役に立たぬ。其の歩行法と云ふのは次の様なものである。

體量を全く一方の足に托して、他の足を十分に股を開いて大きく一步雪面上を滑らしつゝ踏み出

し、次に此の踏み出した前足を眞上から垂直に押し下げて之に全體重を移す、其故平地滑走の様に滑り出すのではない。雪面上を滑り出すのではない。雪面上を滑らして踏み出した場所で留つてしまふ。此の様に大股で踏み出して、眞上から全體重を移して押し下げるのが要領である。

深雪地の登りであるから、踏み出した前足は高く上つて膝が曲がつた儘になり、平地滑走とは全く異つた姿勢である爲に、踏み出すのと押し下げるのが別の動作に分れ得るのである。之を平地滑走の様にやれば、深い雪を押し分けて踏み出し、前方へ滑らさうと體重を懸けるので恐ろしく疲れてしまふ。踏み出す足には抵抗が少いので疲れず、體重を移しつゝ押し下げるので極めて自然である。しかも大股であるから案外速度は早いのである。此の條痕は上下に凹凸の烈しいものとなる。先登は必ず此の歩行法で急かすわがず悠々とやつて行かねばならぬ。

先登は十分乃至十五分で交代するがよい。列の少し下方に出て第二番目の者が其位置をとり、先登をすました者は殿りに入るのである。斯くの如くして各自が最苦しい先登を務めるので六七人の登山隊では決して苦しいものではない、一時間位休める爲に、易々として行進を續ける事が出来る。

第二番目の者は先登によつて作られた多少波形をした條痕の底部を平にする様に歩み、又方向變換の場所では足場を整理して後細者を歩き易くし、進路を妨害して居る樹枝を折り曲げる等の役目がある。特に路上を横切つた樹枝は十分に踏みつけて雪中に埋没せしめるか、又は踏み折らねば後續者が此の爲に横滑りして轉落する危険がある。先登は進路を定めるのみで、次の者が進路を作りあげるのである。先登は時によつては自分の進んだ路が都合の悪い事を發見する場合に引返へす事があるから、二番目の者があまり接近して進むのは不便である。五六間の間隔を置く方がよい。其他の者はスキー長の三倍即ち三間位の間隔でよい。あまり接近して居ると前の者のスキー後端を踏む事屢々あるが、此の事は踏まれた者が後に牽かれて蹉き、危険でもあるし疲勞をも覺え、第一非常に不快である

から、間隔は是非とらねばならぬ。其れに方向變換の時には必ず待ち合はさねばならぬので、間隔を保たぬのは何の利益もない。

先登以外の者の歩行法は足を持ちあげる事なしに、スキーを押し滑らして歩くので、平地滑走の様に滑らうとする必要はない。もし後滑りをする虞のある時には、スキー先端をあげて雪上に叩きつけつゝ登るのである。後滑りのするスキーは最初に思切つてスキー底面の塗蠟を小刀で削りとるがよい。姑息な手段をとらずに、材部が少し削れる程度までやるがよい。そして尙無効の時は水を少しつけて雪を附着さすのがよい。水がなければ雪を口で融かして塗る。油煮だとか、亞麻仁油を塗つたスキーだとか云ふスキーでは仕方がないから海豹皮をつけるがよい。もと／＼こんなスキーは登山に使用すべきものではない。萬一こんなスキーで海豹皮もない時には、止むを得ぬから姑息な手段であるけれど手拭を金具の部分で捲きつけるより何とも仕方がない。或はゲートルを一つ棄てる考で捲くのも一策である。

登行距離及び登行高度は夏の山と違つて何んな山でも登行角が一定して居るので、一の標準を知つて居れば直に測定される。即ち之によつて或る登るべき山の標高さへ知れて居れば、所要時間が大約概算されるのである。ズダルスキー氏（奥國式スキー術創始者）の測定によれば、十二度の登行角では普通八十糎の歩幅で一分間四十八歩乃至五十歩であると云ふ。即ち約四十米であると云ふ。此れから推算すると次の様な結果を得る。

一分間四十米を歩くとして

一基米を歩くには 二十五分

十二度の傾斜を登るとすれば一千米歩いて二百米の高さに達する事になるが種々の故障で

一基米の山路を歩くに 三十分

百米の高さを登るに 十五分

となるのである。其故全行程が正しい登山法を行つたとすれば、歩行した山路の距離は登つた高さの五倍となる。故に之を種々の點から見ると、

一 基米登るには五基米を歩行して二時間半を要し、

一時間登れば二基米の距離を歩いて四百米の高さに達する。

以上の測定は大略信用し得るものである事を斷言する。北海道札幌附近の手稻山（一〇二四米）に登るには先登さへ熟達して居ると何時も二時間半と少して十分であつた。尤も雪が粉雪である事が條件であつて、粘りつく軟雪や後滑りばかりする硬凍雪では問題にならぬ。

登山及び滑降を山の如何なる方向から爲すべきかに就いては、南側から登つて北側から降れと一般に教示してあるが、私は之には感心出來ぬ之を決定するには次の諸項を考慮に入れねばならぬ。

一、地形。二、森林の存否。三、風位。四、時期。五、最近の降雪。六、積雪量。七、宿泊地。

スキーは一定の登山角をとるから急斜面を登るのは不利である。まして雪崩の危険が加はるからどうしても其の山岳の緩斜面を選ぶがよい。

森林内を登降何れの時にも利用するのは最大切である。裸地は日光及び風によつて雪が融けたり固つたりして良い雪である事は少い。こんな雪は降路には勿論不適當だが、登路とても粘りついたり後滑りばかりして、勢力を要し且つ行程上深い粉雪には及ぶ事が出來ない。加之林地では雪崩の危険が無い。

風上から登れば頂上附近の裸地では雪が吹き飛ばされて居るか、或は全く硬化して居てスキーに適せず、風下では屋根に雪庇が出て居て登る事が出來ぬ上に雪庇が墜落したり雪崩が起つたりする危険がある。だから風位と直角の方向を選ぶのが最安全で樂な方法である。

極寒の時には南面から登つても割合に雪の悪化して居る事は少い。そして春近くなれば雪は悪化し其上雪崩の危険がある。そしてスキーが濡れて山頂近くで粉雪に遭ふと忽ち粘着して歩けなくなる。尙春には雪崩が多く南から西の斜面に起る事も考へねばならぬ。北面は眞冬に於ては雪が深過ぎ且吹雪に直接面する恐がある。春近くには南面の雪よりも餘程長く粉雪で残つて居る。

數日前に降雪があつて、其後雪の表面を損ねる様な事柄がない時には、風雪崩の恐の少い方を選ばねばならぬ。急斜面で舊雪の表面が固まつて居る様な斜面の方は危険だから避けねばならぬ。

降雪量が少くて風力の強い山では、風上からの登降は雪が飛んで居て無理である。積雪量の多い方を選ばねばならぬ。山腹の兩側で降雪量の異なる山とか、融雪時期の著しく兩山腹で差異のある山も同様である。

以上の諸點から考案すると、日本の山岳は主として西北風が強いから、地形の許す限り東又は東北面から登降するのが最安全で平易である。雪質、雪量、雪庇等の點からは一番良い方向であらう。

最後には宿泊地及び根據地の問題で登路が決定せられる譯である、

□、金襪使用法　スキー登山で問題になる第二の事柄は、如何なる程度の堅硬雪までスキーを穿き得るかと云ふ點である。之はスキー滑走を目的とする登山の時と、登山の手段にスキーを用ひた時とは多少趣を異にするのである。前者の時にはスキー滑走に適しない地形や雪質の所へ來たならば、もう其れ以上進む必要がないから問題はないが、後者の時は金襪を如何なる所から使ふ可きかと云ふ問題になるので之がなか／＼難しい。今少し上まで行けば再び粉雪の深い風當りの少い地に出る見込があるとか、金襪には少し雪が軟かすぎると云ふ時には其の境界がむつかしい。けれどもスキー登山はスキーばかりでやらねば興味が少いとか、恥になるとか云ふのは全然問題外である。こんな考を持つ事の間違つてゐることは前にも述べた。登山に最も安全で平易な手段をとる爲に使ふスキーである事

を忘れてはならぬ。之は繰替へして注意する。

此のスキーを脱ぐ問題はなか／＼困難で、其の時其の場所に於て決定するもので、抽象的には述べられぬが、先づ概略を云へば、三十度以上のスキー條痕が残らぬ程度の堅硬雪斜面では脱いだ方がよい。無理をすれば登れるが、歸途が大變である。此んな雪では滑降時に必ず過失が出来る。どんな滑降法を取つても必ず足を滑らして轉落する。寧ろ最初から滑り落ちつゝ降るのが安全である（滑落制止の姿勢で）。其故こんな地へ来た時にはスキーを脱げ。スキー條痕の残る硬雪では未だスキーを穿いて居るがよい。スキーは出来るだけ離さぬのが安全な方法なのである。特に天候の危い時に然りてある。

愈金襴を穿くと云ふには次の諸點に氣を付けねばならぬ。

(1) 天候に十分注意し、山頂が遠距離の時には特に歸着する迄の間に、吹雪又雲霧の襲來する恐のない事を確める事。萬一こんな天候の時に、山頂に達すると云ふ虚名に囚はれて、冬期山中での生命の親であるスキーを脱ぎ、吹雪や雪の谷に歸途を迷ふて、スキーを失ひてもすれば大事である。

(2) スキーで危険を感じる堅硬雪地點其の場所に於て、金襴を穿くな。必だ一度降つて、スキーでも安全な粉雪地に於て穿き代へよ。堅硬雪地では操作が困難危険であるのみならず、脱いだスキーの置場に苦しむ。

(3) 脱ぎ棄てたスキーは附近に在る丈夫な樹木へ綱で縛りつけておくがよい。樹木のない地では、雪を掘つてスキーを深く突き刺し、山中の突風で吹き飛ばされぬ用心をせよ。

(4) スキーを置いた場所へは赤旗を附して遠方から望見し得る様にしておくがよい。場合によつては不用になつた復杖の一方を途中で赤旗をつけて所々に残しておき、目標にするのも一策である。

(5) スキーを背にして登るのは止したがよい。金襴を穿く程度の所ではあんな長い厄介物を背にして

は危険である。

金標の穿き方は其の型によつて違ふから概言し難いが、要は靴にピッタリ密着して動かぬ事である、特に前後に動くのが最悪い。動く爲に紐がすり切れる恐がある。そして大切の場所て紐が切れ様ものならば生命に關係する。

金標を穿いてからの足の踏み方は、足先を開き足底全面を斜面に下すので、開脚登行（魚骨登行）の要領でやればよい。四十度以上の傾斜ではもう氷斧で足場を作つて登らねばならぬ。此時は足先のみより雪に觸れぬから十分に深く雪へ蹴込んで登らねばならぬ。金標で歩く時には、真直に一直線に登らねば標の爪が雪にうまく立たぬ。斜面を横にカラム事は一足毎に足場を切らねばならぬので面倒である。

登山繩を二十米の長にして各人を連絡する必要がある。日本の山岳では左程迄にする必要もないと思はれるが、山上の突風の時が恐ろしい。ウツカリ腰を高くして居る時には吹き倒されてしまふ。氷斧をシツカリ雪に突き立て、身體をピッタリ斜面に腹這はしつゝ風の過ぎ去るのを待たねばならぬ。それで萬一の用心に金標を穿いたならば必ず登山繩を使用する事にしたものである。

ハ、滑落制止法 森林帯を出離れてしまへば冬季は全く無立木裸地となる。そして愈高山地帯の興味と危険とが現れて来る。雪は硬くなつて屢々スキーを滑らして滑落する危険が迫つて来る。金標に代えてからは一步誤れば忽ち豁谷へ滑落してしまふ。此んな場合に墜落を阻止する處置を知つて居る事は最大切な事である。冬季の登山で從來種々の事故があつたのは此の處置を知らなかつたり又は誤つたりした爲である。

其の制止法と云ふのは、氷斧を持つて居る時には、足を滑らすや否や直に斜面に腹這ひとなり、斧の尖嘴の方を雪面に向け、兩手でシツカリ握つて之を雪面に押しつけるのである。兩腕は伸びて頭上



道 の へ 山 中 り よ 橋 黒



近 傍 峠 山 中

て斧杖の尖嘴を雪に壓下するのである。又スキーを穿いて居て、スキー杖を持つて居る時には、斧杖の時と同様斜面に腹這つて兩手で杖の雪輪の上方を握り、山側へ石突を十分壓しつけて居るのである。少し滑落する間に其の體重の落下が杖の壓下と相伴つて雪中に尖嘴なり石突なりが穿入して自然に制止を行ふのである。此の時にはあはて込んで、斧杖や杖を振りあげ、山側へ打ち込みなんかすれば、落下する勢で忽ち山側から杖がはね返へされてしまひ、假令打ち込めても落下の勢で杖が手から滑つてしまふ。そして次の瞬間には毬の様に又は頭を下方にして滑り出すので、こんな姿勢になつては、既に何とも手段の施し様がない。

杖を壓下するだけ位で身體が停止するかどうかとの疑は起るが、倒れるや否や一二間滑り出す間に以上の處置を行ふので、其後二三間も滑る間に安全に留つてしまふ。倒れるや直に腹這となつて杖を使ふので、急傾斜面を登る時は絶えず危険に遭遇する用意と心懸とが肝要である。兎に角あの杖を振りあげて打ち込むのだけは決してやつてはならぬ。はね飛ばされる事は確實なものだ。

以上の登山時に於けるスキー術を心得た上、愈登山にかゝつたならば、一般の登山に關する注意の外、左に掲げるスキー登山に關する一般の注意事項を嚴守せねばならぬ。

- 一、先導者を選択して必ず其の指揮に従ふ事。
- 二、隊員は必ず纏つた行動を取り、單獨行動をせぬ事。
- 三、一行の目的地の方向及び現在の位置を絶えず知悉して居る事。
- 四、先登は疲労を覺えぬ程度に於て交代せしめる事。
- 五、歩調を變へずに緩く歩き、發汗せぬ範圍で登る事。
- 六、スキー通路を亂し又は壞さぬ事。

七、森林内や日光の照射する地では休憩しておき、風當の強い場所へ出る前に食事をすます事。

八、絶えず雪庇や雪崩に注意する事。

九、危険地では早い内にスキーを脱ぐ事。

一〇、豫定の時間が来れば如何なる事情があつても引き返へす事。

一一、降路は必ず先登の滑走條痕に従ふ事。後續者を迷はす様な條痕をつけぬ事。

一二、滑降時は十分着實な滑降法をとつて倒れぬ事。

(轉倒はスキーの折損、精力の消耗、時間の損失、負傷の危険性を有して居るから絶対に避けねばならぬ。)

一三、出来るだけ尾根を滑降し、未知の谿谷へは下らぬ事。(溪流が凍結して居なかつたり、斷崖が連續して居たりすると、冬季のスキー姿では進退に窮する事がある)。

一四、危険に遭遇し、又はスキーに故障の生じた場合は必ず一行に信號し、一人だけ離れる様な事のない様にする事。

八 登山時の危険

スキー登山に於ける危険の主要なものは次の如きものであらう。

イ、吹雪 著しい寒氣と展望の途絶、及びスキー條痕の埋没が最著しい脅威である。吹雪に際しては直に退却せねばならぬ。特に山頂近くの無立木地に出て居る時は直に引き返へして森林中に逃げ込み、登路の條痕が消えぬ間に地形の確實な點まで戻らねばならぬ。吹雪を冒して山頂へ進む等は死地へ進むのである。森林内の安全地帯へ引上げるのが肝要な事である。同時に寒氣に對する準備をなさねばならぬ。其内に止むだらう等と山頂近くの無立木裸地でばんやり待つのは嚴禁である。歸途を失

ふか、其れでなくても凍傷にやられるのは明な事である。

□、雪庇 尾根の風下に出来る雪の張出して、春近くには崩落する恐があるから下方を通る事は危い。又此が原因となつて雪崩を起す事があるから、雪庇には接近せぬがよい。

ハ、雪崩 此れには底雪崩と風雪崩と雪皮雪崩との三種がある。危険なのは前の二種である。底雪崩は春に周期的に起り、風雪崩は冬季突發的に起るもので、スキー登山には後者の方が危険である。

一般に雪崩に對する注意としては、次の各項に對する考慮である。

- (1) 三十度以上の急傾斜面で無立木地の時。
- (2) 積雪下の斜面が岩壁や草地である時。
- (3) 積雪が著しく水分を含み又は赤色に變化して居る時（底雪崩）。
- (4) 硬雪層の上に多量の新しい粉雪層がある時（風雪崩）。
- (5) 斜面の上方に雪庇があり、特に其の雪庇が崩落しそうな時及び雪庇の下に隙間のある時。
- (6) 斜面を歩く時に雪の表面へ割目が走る時。（殊に春季の雪上に於て）。
- (7) 以前に雪崩の起つた徴候や痕跡のある時。
- (8) 春の溫暖な午後に於ける南斜面（底雪崩）。
- (9) 轉落する雪が次第に大きな塊となつて落下する時。

以上の點を注意して居て、雪崩の徴候を認めた時にはこんな斜面は避けて迂廻する必要がある。止むを得ず通る時には一人づゝ歩いて他の者は雪崩の起るか否かを注視し、危険と見れば直に通過しつゝある者に知らせてやる。

第一雪崩が起つたならば、狼狽せず直に斜下へ滑り降れば、底雪崩の場合には逃れられる。けれども風雪崩は落下速度が早いから餘程敏捷でなければ危い。又雪崩の中へ入つたならば直にスキーを

脱いで、雪崩の上に居る様にせねばならぬ。故に金具の後革は手取早く脱れる爲、遊革へはめておく事は禁物である。

尙埋められてしまつた時の用心に、赤い登山繩を二三十米も腰につけて居れば、掘り出し得る望がある。數時間や一日位までは埋められて居ても助かるものだと思つて居る。

二、灰明 空一面に薄い雲がかゝつて總ての物が黄色く見え、雪の表面の高低起伏が全く見えぬ様な時を灰明と云ふ。此んな時には斜面の起伏が見えぬので滑降の時に十分注意せぬとスキーを折損したり、急斜面から轉落したりする。極めて緩く滑降する必要がある。又眼を傷める事が甚しいから色眼鏡が必要である。茶色の眼鏡が一番有効の様である。これを用ひると多少の高低起伏は判別し得られる。

ホ、霧 萬事休すである、引き返すより仕方がない。少しの登路は吹雪と異つて條痕が消えぬから續けても差支がないが、新しい生地へ降る時は磁石と地圖とを正しく使ひ、緩々と滑つて脱するより方法がない。

へ、凍傷 普通は犯されるのは手足の指先と耳や鼻である。濡れた物を肌につけて居るのが、薄着よりも危険である。最初寒氣を感じ、次に痛み出して最後には無感覺になる。痛み時までは未だよいが、感覺を失へば立派に凍傷になつて居る。指の時には絶えず動かして血派の循環を助け、手の指などでは杖を叩いて暖さを恢復するに努めるがよい。耳などは紙で包むがよい。

愈犯された時には黄色い蠟の様で冷たくて固いものになつて居る。之を恢復さすには、最初から火で温めるのは大禁物で、先づ十分雪で摩擦し、其次が水、次に湯と漸次に摩擦しつゝ温めて行き、温味と柔さが戻つて來てから火にあてるのである。兎に角十分摩擦して戻すのが肝要な事で、恢復すれば後で甚しく痛むものである。どうしても感覺が戻らぬ時は危いもので、悪くすると春になつて腐

る事がある。恢復しても皮膚は一重剝けるものである。

ト、夜間 極めて沈着に徐々に地形を探りつゝ降るのだが、未知の山中では寧ろ露營するに如くはない。大火を燃やして雪を孔狀に融かし其中へ針葉樹の樹枝葉を敷きつめれば一夜は過ごし得る。燃料のない地ではビルグリー氏の説いて居る雪の小舎を作つて入る。即ち幅五尺、長さ一間で深さ五尺の孔を雪中に掘り、天井はスキーと杖とを併立して雪を戴せ、腰掛をスキー一臺分、向ひ合つて作る。丁度電車内の様にして腰をかけた儘一夜を明かす譯である。

其他、墜石や雪隙の事もあるが、スキー登山に特説するまでもないから省略する。

以上種々の山中に於ける危険は、此等に對する完全な理解を持つ事によつて、又慎重なる注意を拂つて危険を自覺した時に無謀な舉に出でぬ自制力を持つ事によつて、避け得られるものである。

智識と注意と自制力、此の三者を持っては山中の危険は危険でなくなるものである。

九 時期及び登山に於けるスキーの價値

スキー登山に適する時期は二様に考へられる。一は積雪期の山岳を知りたい爲にスキーを使用する際に考ふ可き時期で、他はスキーの價値を十分高山地方に於ても發揮せしめ、同時にスキー滑走の快感を味ひたいと思ふ時に選ぶ可き時期である。前者は積雪期に於て山頂に達する事や、山稜を横斷し、縦斷する事が重要な意義を持つ。後者は出來得可くんば山頂にも達し、縦走横斷もやりたいが、スキーは棄て度くないと云ふ立場である。

第一の場合には山中の露營が加はるので、成る可く晝間の時間が長く、天候の激變の無い、氣温も著しく低くない事が肝心で、尙其上に入夫が輪櫛で隨行し得る事が大切である。夫にはどうしても春近くなつた或は春になつてしまつて雪が全部凍雪に變つた頃でなければならなくなつて來る。此の時

には雪崩の危険が加はるが、却つて其れに興味を持つのがこんな計畫を立てる人の常であるから危険な方がよいのであらう。眞冬の日の短い、吹雪が屢々襲來して雪が深い時には好ましくない。

第二の場合には何と云つても眞冬である。しかも冬の初めて、雪が大略積り切つた頃、即ち十二月末から一月初めが良い。尤も信州邊では二月にならねば眞の積雪を見ぬから其れ迄待たねばならぬが、東北地方以北は一月初が良い。此時には雪の質もよし、第一山頂附近の裸地が假令強風に吹かれて硬雪に變つて居様とも、未だ氷化した堅雪にはなり切つて居らぬからスキー使用の限界が廣くなるわけである。其の代りに天候の激變と吹雪の襲來とで山頂近くに出る事は困難でもあり、又危険である。且富士山の様な南方の山岳では早くから降つた雪が氷化するのて一月初めでもスキーの使用範圍は極めて少い。日の短いのと嚴寒とで眞冬は却つて損である。

要するにスキーを使つての登山と云ふものは、北海道の様な粉雪地帯で、しかも夏季の登山が土地の未開状態である爲著しく困難である地方に於て、熊笹や溪流の中を押し分け、蚊や蚋やの襲來を恐れつゝ登る苦痛を避ける事が出来る爲に、意義のある事であつて、所謂日本アルプス地方の様な山地へは、何を苦してスキーを持ち出すのかと云ひ度くなる、こう云ふと、スキー登山の發達を喜んだ私の最初の言と矛盾する様であるが、日本アルプスのスキー踏破なんかと云ふ事をした人等の行動を見るに、輪樫の方が樂である所をわざ／＼荷厄介なスキーと云ふ物を穿いて御苦勞千萬な歩き方をしたと云ふ有様であつて、人夫とスキーランナーとが雪質の點で利害を異にして居る現在ではスキーが却つて邪魔である。實際、凍雪地の登りと來てはスキー程悲惨なものはない。汗ダク／＼で電光形に登るのは見られたものではない、人夫が上の方で笑つて居る。要は凍雪の時には輪樫の方がよいと云ふのだ。スキーは粉雪上で使用するものであると云ふ事が云ひたいのだ。

それだからスキー登山の今後の問題は、人夫にもスキーを穿かせる様にし、露營の方法と準備とを

大いに研究して、眞冬の粉雪時期に登山を行ふ様にする事である。これが難事であるとすればスキー登山の範圍は一日で往復し得る山岳のみに限定せられるより仕方がない。尙其の他のスキーを背負つて登ると云ふ事は、私は絶対に反對したい。突風を受けた時にはどうしてあんなヒョロ長い物を背にして居て避けられ様か。山側にピツタリと伏した處であの邪魔物で吹き飛ばされてしまふ。だから金標を穿かねばならぬ斜面を持つ山の横断は不可能となる譯で、益々範圍が狹隘になつて来る。

スキーによる登山からは餘り大なるものを期待してはならぬ。唯眞冬の深粉雪時に、他の登山具では到底登られぬ時期に於てもスキーがあれば登山が出来ると云ふ事のみで満足せねばならぬ。春季凍雪時にスキーを穿いて山を走り廻つて得意になつて居る人の背後から七八貫の荷物を持つた人夫が輪標で従つて居る姿を見るのは、實に皮肉な光景ではないか。飛行機は地上も走るからとて、自動車の代用にしたならば、人は何と云ふだらう。凍雪の上でも歩けはするが、輪標の適する處でスキーを用ひるのは一種の物好と云ふより他に評し様がない。況んや途中で背に擔ぐに至つては呆れるより他に言葉がない。

春季に信飛國境山脈へ人夫と共に入るならば、行動の一致を尊ぶ點から見ても、スキーなんかは穿かぬがよい。人夫がスキーを穿く様になるまでは、人夫同様輪標で行け。凍雪時は決して輪標で苦しくはない。登山が目的でスキーを登山用具に使ふ此種の人等が、スキー踏破の虚名に驅られて、輪標を穿かぬのは大笑だ。現にこんな登山をした人等は殆んどスキーランナーの上手な人等ばかりである事を注意したい。スキーを滑るが目的で、之に一種の賣名的虚榮心が加はつてやつた事であると云つたとて大して誇張した言ではなからうと思ふ。

スキー登山は眞冬に行へ。其の時に始めて登山用具としてのスキーが價值を發揮するのである。スキーランナーであると同時にアルピニストである人がスキー登山を行へ。其の時に始めてスキー

による登山が安全に發達するのである。

スキー登山術に關する卑見は大略上述の如きものである。若し幸にしてスキー登山に志ある人の參考の一助ともならば之に過ぎたる喜はなす。

白髮山登山記

吉 永 虎 馬

今年の夏休の大部分は、幡多郡(高知縣)の西南部に點在する諸島に渡つて島の生活を試みましたので、餘日も最早少くなりましたから、何處か三四日間に亙つた旅行に適切な山もがと探して、白髮山登山を思ひ立ち、八月廿六日午前七時高知市發、香美郡上菲生村(ニラフ)へ向ひました。夕方同村字久保部落の沼井(ヌルキ)へ着いて見ると意外にも當てにして居た宿屋に泊るのを斷られ、餘儀なく佐々木校長の好意によりて同校の教員住宅の一部に留めて戴くことになり、愉快に起臥することを得ました。

廿七日。夜來の雨に到底登山は出來ぬらしく思はれたので、遺憾ながら寧ろ此度は斷念して歸宅せんかとも考へましたが、午前四時頃起き出て空合を見ると、依然雲多く尙時々小雨を降らして居ましたけれども、雲の飛び行く方向よろしく、且つ追々晴れる模様であつたから漸く安心して身仕度に取りました。佐々木君も同行されるとの事に諸準備を整へ、午前八時に出發して白髮山へと向ひました。白髮山は上菲生村溪谷の行詰り徳島縣との境に聳立した形狀秀麗なる高山で、諸方より目標となり、特に當縣香長平野などからは眞正面に其雄姿を仰ぐとが出來ます。冬期になれば早く山頂に雪を戴き目に着き易い山なのです、私共同人の内では菲生富士と呼んで居ます。高さは一千七百七十米に達し、我四國では可なり高い山なのです、四百米位から下は大深林を以て蔽はれて居るのですが、山

頂は隣の天狗塚(テングヅカ)(一八一三米)、三嶺(ミウネ)(一八九四米)などと同様に短い笹と美しい高山植物とに飾られて居るであらうと思つて居たのです、それは先年此の附近の山脈を縦走した時に、此の山の東北方の尾根を通過しましたが、其の際附近の状態から推して左様判断したのですが、これが抑もの誤りて、今回大變危険な破目に陥つたその原因の一つはこゝに基くのです。同山は大深林以上は全くスズメケの深き密叢より成り、時に往々岩石が露出して居るのみであります。而して山頂の邊は高さが二尺位しかないが、下るに従つて漸次高くなるので、森林帯に入る邊からは四、五尺より七、八尺を超え、全く身體を埋没されてしまひます。

路は久保の影(カガ)、大前(オホマエ)、坂本などと稱する小部落を経て漸次爪先上りとなり、伐り畑の多い急斜面を過ぎて大森林に入るので割合によいのです。これは劍山參詣道又近來祖谷山(イサキ)の名頃谷(ナゴロ)の伐木場などへ通ふ路となつて居るからであります。此の邊路傍にはユクノキ、エゾエノキ、ミツバウツギ等の樹木を見るべく、又ハガクレツリフネ、マツモトセンノウ、シシウド等が盛に開花して居ました。森林帯は實に見事で自ら大深山の趣を具へて居ます、樅(主)に裏白モミの木や、カヘデ、シデの高い枝からはサルノヲガセが白髪昆布を吊るした様に真白く下つて居ます、又木蔭は薄暗く蘚苔が深く蒸して居ます、路の最も急峻な部分は溪に沿ふて登るのですが、水の清く冷いことは驚く許りて、暫く足を浸して居ると痛みを感じる程でした。林底にはテンニンサウ、フジテンニンサウ、ヤマトリカブト、ヤマゼリ、レイジンサウ、メタカラカウ、オホヤマフスマ、ムカゴイラクサ、ホンバイラクサ等の高山性植物が深い叢を成して居ます。こゝを登り抜けて一つの尾根の笹原へ出ると、笹に混つてヤマブドウ、ハスノハイチゴ、オホカメノキ、ミヤマモミヂイチゴ等が現れて來ました。此の邊から韭生溪谷(ニラフ)を隔て、香長平野、太平洋を見通したる風景は實に佳絶でした。又東南の方は横山大深林(マキヤマ)を見下すのです、其の極めてしも知れぬ溪谷の折り重つた大深林は、壯嚴ともいはんか寧ろ恐怖の感に打たるゝ程で

す、其の右方に屹立して特異の山貌を露してゐるのは石立山イシタテヤマ（一七〇八米）で、又遙に此の溪谷を見越してジロンギュー（一九二五米）、劍山（一九五五米）などが其の雄姿を示して居ます。これから真直に山頂に向ふには急斜面の篠を分けねばならぬので、初めから困難と思はれましたから尙横道を辿りました。此時佐々木君の連れた獵犬が直ぐ路傍に倒れた大木の下の岩穴で『ノイ』と稱する狸の兒を咬み殺しました。又時々山鶏を狩り出しました。これ等の餘興を樂みつゝ、漸く午後一時過に東北の尾根に出ました。これから西南に向つて山頂までは七八町もありませう、極めて緩慢なる傾斜をなして居るので、頗る愉快に小笹を踏み分けつゝ、行けるものと想つたことは裏切られて、二三尺もある笹原の道もなき處を無理遣りに抜けるので頗る困りました。尾根附近の笹のない場處にはマヒヅルサウ、マンネンスギ、ホンバノヤマハ、コ等がアキノキリンサウ、タカネオトギリ等の濃黄な美しい花と混つて居ました。尾根に出た時分迄は北方の大山脈を望見することが出来て、天狗塚テングツツカや三嶺ミウネなど曾遊の地點をよく指示することを得たのですが、山頂に近づくに従つて漸次濃厚なる霧が土佐方面の溪谷から濛々として風に吹き上げられ、瞬く間に四方を包んで仕舞つたので、我々は全く白糝糊中の人となつて仕舞つたのであります。折角山頂に達しながら大觀を縦にすることの出来ぬのは遺憾極りなことです。併し是は登山には有勝の事であるから深く悔む事もないのです。唯豫期に反して可憐なる高山植物の美觀を呈した花畑を見ることが出来ないものでそれが残念至極でありました。暫く休憩して晴れるのを待つて居ましたが、次第に濃度を増す許りて到底目的は達せられぬ者と見切りをつけました。そして降路はもと來た方へ引返すのが容易い方法でありましたけれども、時間を空費する事を許さないのので、直に笹原を真直に下り下ることに決めました。併し此際大に注意すべきは西南方に向ふべからざる事であります。若し誤つて西南に向へば路なき大溪谷に陥る危険があるので、成るべく早く前に通つた横道に向つて少時間に降つて見やうと、二時四十五分磁石を頼りに其方向と思ふ方

へ降りかけましたが、非常に急勾配の山なので面白く降れるのです。私は昨年夏阿蘇の烏帽子岳エボシダケの急斜面の草原を草に腹をつけつゝ後退りに少時間に迂り下つた愉快なる経験が有るので、今回も稍それに似た方法を取つて後退りしつゝ迂つたのですが、三百米位は誠に工合能く僅少の時間に降れたのです。併し下るに従ひ次第に笹原が深くなつて漸く森林帯に達した頃は高さ四尺位が普通となり、其密生して居る度合は、一人が掻き分けて抜けた跡は直ぐ塞つて、三四間過ぎると全く元の如くになつて見分けが付かぬので、互に相失はざる様に特に注意しました。最早時間が横道へ出られる頃と思はれるのに向それらしきものは見當らず唯笹の深さが増すのと霧の濃度が加はるのみで、見渡す限り全の笹の海となつたのです。時にうすれた霧の中に縦などの梢が夢の様に浮み出るのを見て、僅に森林の續くのを知る計りでありました。こゝに於てか大に不安を感じて來たのです。日は追々暮に近づき、雨さへポツ／＼落ちはじめ樹下は餘程暗くなりかけたのです。兩人共言はず語らず聊か恐怖の念を起しました。いくら笹を押し分けても唯深みへ陥るのみで、脱出の目的は達せられさうにもなく、時としては篠の中に没して枯れ果てた倒れ木に行き當り、思はず枝を踏み折つて篠の底に陥ることもあり、急げば急ぐ程抄取らず、進退全く谷つたのです。この密生した篠の中は流石獵犬も通過するのが困難と見えて、何時も私等の押し分けた後へ廻りながら、時々苦しい聲を發するので、これ等も實に心細さを増す一つであります。愈々時間も迫つて來ました、是非とも早く何とか活路を見出さなければ由々敷大事に至るかも知れぬとは、次第に兩人の胸裡に湧き起つた感なので、成るべく左方へと志して努力するけれども、悲い事には二時間餘りも奮闘を續けた爲に心身とも大に疲労して到底高みへ登り得るだけの氣力が盡きたので最早唯斜に下方に向つて空谷を爪先下りに降れば降り得る爲に、遙に溪間に聞ゆる水聲を追ふて下るの已むなきに至りました。然るに暫くして左方の稍高き地點に達し、勇を奮つて八九尺にも近い篠を漸く押し分けて抜け出ることを得ました。そしてこゝに小溪流に

沿ふて小徑を認めましたのです。それが登る時に通過した深林中の急坂の路であつて、目的の横道よりは遙に西南方に當つて三百米程も下つた處であつたのです。これでホッと息を吐いて互に幸運を祝したのであります。時に午後五時過。時間は遅いが既に此降路を得たる以上は夜路を踏んでなりとも安全に歸れるとの確信を得たので、兩人共に殆んど言ひ表はし難き喜悅の情に充されたのです。從來私は常に山坂を駆廻り又は海岸を縫ひつゝ歩いたりしましたが、未だ嘗て生命の安危を考慮するが如き場合に遭遇しなかつたのです。それが今回初めて此の苦境に陥つて得難い經驗したことは私には反て幸であつたかも知れません。佐々木君は實に稀な温厚篤實なる教育家で、思慮周密常に附近の山岳を跋涉して大に經驗を有して居らるゝにも拘らず、今回に限りて天候山勢等の關係上、準備に聊か缺くる所があり、又私も單に輕装のみを専らにした爲に何等の用意する所がなかつたから、若し不幸にして尙一時間も路を探り得ず、空しく篠の中に彷徨してゐたならば、暮色と共に飢寒は迫り來り、特に續いて降り出した大雨の爲めに如何なる運命に陥りしやも測られずと、今にして思へば眞に寒心に堪へざるものがあつたのです。實は追々篠の中を脱出することがむつかしさうなので多少期する所があつて、其の方法を取らねばならぬかと考へました。それは後になつて二人の笑ひ話の種になりましたが、其の當時は戯談どころではなかつたのです。路に出ると直に降路に就き漸次暗くなつて行く深林の中を辿り、伐り畑のある所に出ました。此頃から天候益々悪く、低い山も皆霧に鎖され、山麓に近づくとや果して大雨沛然として到り、全身濡鼠の如くなつたが、先の不安を一掃した身には左程の苦しみも感ぜず、互に笑語を交へながら若しあの儘路に出られなかつたならばなど、想像しつゝ、午後七時二十分學校に歸着しました。

廿八日は又雨。朝早く學校を辭して半里程も物部の流れに沿ふて下りますと、登山姿の二人連れに追及しました。話して見ると高知市の森萬樹園主の一行で、祖谷の西山から天狗塚に登り、壁の禿を

越えて、昨夜は私の隣の宿に止まつて居たとの事でした。氏等は天狗塚附近の御花畑の美觀を激賞して居ました。登山園藝等に談話は盡きず、上野尻^{カミノヅリ}迄歩行を續け、それから自動車に乗つて午後四時半に歸宅しました。(了)

冬 の 赤 城 山 へ

黒 田 孝 雄

赤城山の紀行は、今迄數々「山岳」に書かれたことがあるのに、自分のやうな山には比較的經驗の淺いものが重ねて大同小異な稿を起すのは、この貴重な紙面を徒に塞ぐのみで如何かとは思ふが、私は今度初めてスキーで此山に登つたので、後遊の同志諸君の御參考までに簡單な記事を書くことにした。今度の登山はスキーが目的であつたからスキーは出来る限り穿いて見たが、雪量の少かつたため登降共に中途からスキーを穿いたり脱いだりしたので、スキー登山と云ふのも大袈裟であるから單に冬の赤城山へと置いて置いた。要するに自分は唯だ冬の赤城が見たかつたのである。

一

自分はこれまで赤城には數度登つたが何れも夏とか秋とかで、まだ冬出掛けたことはなかつた。いつかこの欲望を満足させ様と思つて、赤城に關する今迄の紀事を種々見たが、その中で最も自分を惹き付けたのは、會員關口氏の文で、これを讀んでからは常にこの冬の赤城が念頭を去らないのみか一層登攀の念が強くなつた。今年越後の關からスキーの歸りに高崎邊で夕日に映ゆる雪の赤城を眺めて

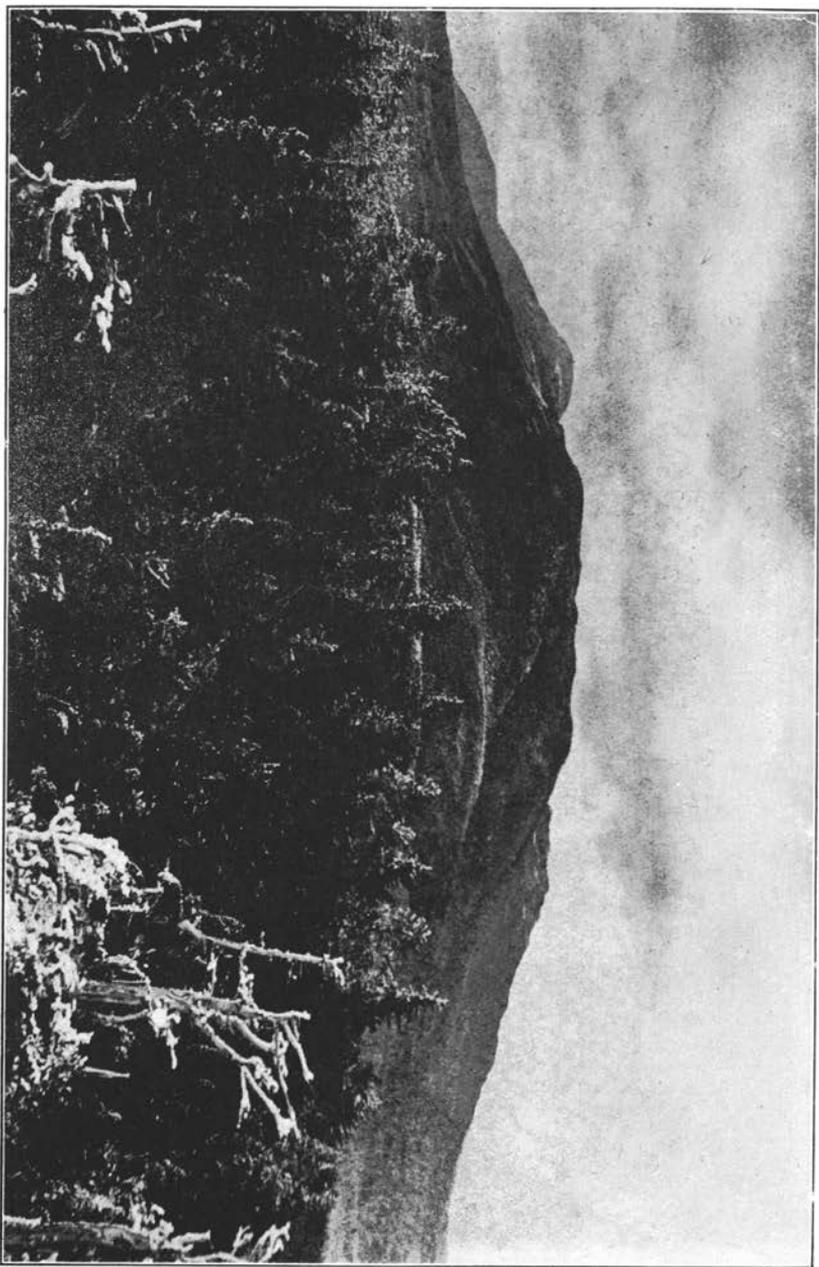
から愈々堪へられなくなつた。是非近い内に決行しやうと考へた。それで紀元節の休を利用することゝし、同行を約した田中君と種々相談した結果、水沼口から登ることに決め、思ひ浮んだものは片端からリュックサックに詰込み、スキーを携へて上野驛に至り、十日の午後五時三十分發の汽車で同所を出發した。桐生に着いたのは十時頃であつたらう。其夜は驛前の田ノ川屋といふに一泊した。

一

翌十一日の朝は四時半に叩き起された。今度は足尾線の間藤行きに汽車に乗る。列車はステイム
の備へがないので各車毎に中央の椅子を取拂つてストーヴが置いてあつた。餘り暑いので氣持が悪くなる。その内に發車した。夜は明けたがどうも空模様が面白くない。大間々邊から北の山の蔭に少しづつ白いものが見えて來たので思はず勇み立つた。上神梅を過ぎて水沼に着いたのは午前六時半頃であつた。空は依然どんよりとして然も風がない。驛で小荷物として預けたスキーを受取り、前の赤城閣を叩き起して休む。この土地の人はスキーをよく知らない。消防ポンプだとかスケートだとか云ふ。スキーにスキーを穿かない人夫は自由な行動を妨げられるとは知つてゐたが、リュックサックが可成り重いのと、雪のある處までスキーをかつがねばならぬのとで、不本意ながら雪のある所まで強力を頼むことにした。去夏こゝで狡猾な人夫にだまされてから、其人夫を使はない決心であつたが、外に人が居ないので、不本意序にまたその者を傭ふ事にしたが、幸に今日は用事の爲に行かれないのとこ
とで、其弟を傭ふことにした。町田商店とか書いた法被を着てゐるので、その強さの程を疑つたが、見た所兄貴より大きく頑丈相なので先づ安心してリュックサックをかつがせ、スキーだけ各自携帯することにした。七時半發足。夏覺えた近道をとつた。即ち宿を出て十間ばかり本道を南に進み、右側の梨の木畑の中を登り、間もなく去年崩れた澤を登るのである。二三丁行くと小さな杉の木を植えて

ある道になる。そして非常にバツトしてゐる。夏は草いさかれて苦しむ所だが、今日は樂に登れる。路面は霜の爲凹凸して歩き悪いが今日は幸に曇つてゐるので、霜解けの難に會はなかつた。此邊の雜木林には近頃炭焼が入込んで盛に伐採してゐる。此谷を登り切つて柏山カシヤマの道と分れ畑の中を通つて水沼の正道と合した。路傍には相當に雪が残つてゐた。杖で雪を突いて見たが非常にかはいた雪でうれしかつた。清水の一ノ鳥居についた。時に八時廿分。鳥居の側の茶店に寄つて少憩、大洞へ行く吾々を見て驚いてゐた。十分ばかりして發足。冬枯れの裾野の景色を味ひながら行くと、後から馬子が二三人各自馬を追ひながらやつて來たが、是も吾々の大洞行に驚く。スキーが好い加減重く感じて來た。空らの馬の脊をかりたくなつた。馬子と分れて吾々は左へ行く。柏山への道と合してしばらくすると御料林の野火に注意すべしと書いた柱が立つてゐる。左手の面は墨で三字字が消してある。多分一昨年禁獵を解いたと聞いたが禁獵地の三字が消されてゐるのであらう。しかしこの邊はずつと昔とらに獸などはとり盡してしまつたといふことであれば、今更折角禁獵にしたものを又解禁するにも及ばない様に思はれる。此邊はまだ雪は少い。通稱見晴しについたのはそれから十五分後であつた。こゝは一寸した峠見た様になつてゐて、従つて景色は非常によく、赤城はすつかり見渡せる。空は相變らずであるが雲は高いので山はよく見える。長七郎山の邊から小地藏にかけて雪が白く光つてゐる。鳥居峠の左の斜面にはかなり雪がある。そぞろに足を躍らす。黒檜及び駒ヶ嶽には雪はなく變にどす黒い膚をして地藏の白い頭に對抗してゐる。田中君はこゝでしきりに撮影に苦心してゐた。やがてそれも成功したらしいので出發した。此處から二ノ鳥居の杉の森、開墾地の村落が一目に見え、吾々の進む路も下り氣味に山の中腹を平らに出入してゐるのがよく見える。又開墾地の水だめもよく光つて見える。凍つてゐるらしいので一同元氣を出してかけ下りた。雪の少いのに氣を悪くした兩人は、豫期してゐなかつたこの氷を見逃がす譯には行かない。万一の爲にと用意して來たスケートを出して一寸と

滑らうと一決して池の番人に交渉したが、初めは今日は天氣が暖いから氷がゆるるといつて、なか／＼許して呉れなかつたが、それでは隅の厚相な處でと無理に許して貰つた。三十分許遊んで出發。雪の量は依然として増さない。閉口して進んで行くと杉の森に入つてすぐ二ノ鳥居になつた。こゝで水沼で焼いて來た餅の固くなつたのを焚火で軟くし、朝食兼晝食をなした。これから鳥居峠迄はもう近い。二十分位にして出發。時に十時十五分頃。氷のついた丸木橋を渡つて川を左にして進む。少しづつ登りとなり雪も少しは多くなつて來た。右手には立石タテイシの斷崖が迫つて來る。左手には志す鳥居峠が所々雪に彩られて、スキーでは登れ相もない様に見える。暫くして急に雪が一面に擴つて居る平らな所に出る。こゝで自分はスキーを穿いた。田中君はまだ雪のない所があるといつて穿かない。自分は遂ひに負けてしまつた。小さい川を渡つて川の右岸に出る。こゝから雪の量もぐつと増加したので、兩人ともスキーを穿いた。田中君のは滑りすぎて登るに非常な困難をした。それから少し行つたが丁度氷を運搬する鐵索と道路との交叉點の所で雪が消えてゐたので又スキーをぬいてかついだ。一層の事峠の上までスキーを穿かずに登らうと兩人とも夏の道を登つたが、木立が多い爲か雪が少い。それでも石像のある澤の所まで來ると雪が増加して來たので、又スキーを穿いて登り始めたが、今度は何處までも雪が續いてゐるので安心して登ることが出來た。しかし田中君はスキーの滑りがよいので非常に遅れて了つたので、峠もすぐだから強力をささへやつて、自分は田中君と一所に登つた。強力は雪が多いので登るに非常な困難をしてゐた。そして頻りにスキーの有効をほめてくれた。田中君はとう／＼スキーをぬいてかついで登つた。自分は左手のガレに雪の澤山あるのを幸に、それを登つて右に折れて峠に出るつもりであつたが、途中熊笹のためにどうしても前進不可能になつたので、止むなくスキーをぬいて峠に向つた。峠はもう目の前にあつた。こゝは南向きのため雪は少しもなく、笹が夏同様に生えてゐる。先きにスキーをぬいて登つた田中君はもう峠の上に出て寫眞をとつてゐた。強力



影攝氏吉久田武 (科立端左・白茶・枯嶽中央・岳大端右) 望北西より石見高

も焚火して休んで居た。峠の上についたのは午後一時十五分であつた。地藏岳の方は一面に白いが黒槍や駒ヶ岳の方は夏同様であつた。沼向ふの陣笠、薬師等も少ししか雪を被つてゐなかつた。大沼は眞白でその中に小鳥ヶ島が黒く盆栽の中の島のやうな形をしてゐる。枯れた白樺や檜の林の向ふにコンモリと見える杉の森が赤城神社である。強力はこゝから返して重いリュックサックを脊負つて大洞に向つた。さっきの登りに足を酷使したのでスキーを穿いて降ると足がフラ／＼する。其上午後になつたので雪がゆるんでスキーに附著するので不愉快である。少し降るとスキーの跡らしい二本の線が長七郎山からカクマンブチの方に向つて付いてゐる。これは誰かに先鞭をつけられたかと思ひながら白樺の林をぬけ、見慣れた其枝振を思出しながら行く。夏ならば氷の事務所に行く道と大洞の猪谷へ行く道との分れ道が判然するのに雪があるので分らない。大體見當をつけて進むと、左手の樹立の中から猪谷の屋根が見透された。宿に着いたのは一時三十分であつた。此邊は一二尺の積雪がある。戸口に立つと主人の六合雄氏が怪訝な顔をして迎へて呉れた。

三

宿は夏の賑かさに引かへてヒソソリとしてゐた。奥の方の客間は戸が締切つてあつた。今年は例年より雪がずつと少量で、普通は軒まで達する相である。沼は十二月と一月の始めは降雪が少い爲よい氷が張つて、スケートには好都合であつたが、其後は度々の降雪によつて、雪氷になつたので、スケートには不適當であるといふ。スケートの方は當が外れても左程失望はしない。今から外へ出ても雪の表面が融けて居てスキーには適しないから、夕方雪の凍る時分に附近を散歩しやうといふ事にして、濡れた靴下等を乾しながら尙色々な話を聞いた。今朝山頂では攝氏四度で今年始めての暖さであつた相だ。今は華氏四十度を少し下つてゐる。日中は一體に暖いといふ。こんな曇りは屹度明日は雪に

なると云はれて嬉しかつた。其中に三時半頃になつて少し寒くなつたので、スキーを穿いて外へ出て見る。雪は稍固まつた様でスキーには少しも着かない。宿の前のスロープで復習をやつて見た。すっかり忘れかけて居た要領を思出して落葉松の林を縫つたり、潜越なジャンプをやつたりした。六合雄氏もスキーを穿いて出て來た。一所に少し滑つて、我々二人は氏と別れ、沼を横切つて小鳥ヶ島に行つて見た。沼の上の雪は一層締つて滑りがよい。三分もかゝらないで島につく。七年前學校の連中とこゝに遊んだ時の紀念に刻り付けて置いた文字も明瞭に残つて居たので、なつかしく思はれた。これが抑も自分を山岳宗に歸依せしめた初めての山旅であつた。六合雄氏が南洋に行かれたのもその年であつたと記憶する。沼の中央に出て暮れ行く雪の赤城を熟視した。田中君は寫眞を撮るに忙しい。聞くともう二本寫したといふ。鳥居峠の方から霧が卷いて來て沼も半分ばかり覆はれて了つた。雪に閉された赤城神社を左手に見て猪谷に歸ると六時を過ぎてゐた。夕食後又爐邊で六合雄氏と雑談にふける。今年になつて東京からの客は自分達が始めてある相だ。二三日前土地の獵師がやつて來たが獲物は餘りなかつたといふ。この邊では兎がとれる位なものだといふが、自分も今日登つて來た時に足跡は可成り認めた。少し疲れて眠いので早く就眠した。寒いので蒲團を出來得る丈けかけて貰つた。今夜は又非常に静かだ、多分雪になるだらう。

四

目を醒ますと餘り戸外が静かなので窓を開けて見た、果して雪が降つてゐる、もう五寸は積つたらしい。風はない。朝食後前のスロープでスキーの復習をした。雪はまだ降つてゐるので遠望がない。その中に北風が湖面をかすめて吹いて來た。六合雄氏は風が吹けば晴れるといふ。二時間程練習して引上げると、風は益々強くなつて積つた綿雪を吹き上げて家のかげや谷間に吹き溜まりが出来る。赤

城へ来て小沼も見ないで歸るのは残念であるから、晝食後吹雪を冒して出掛けることにした。午後一時少し風が風ぎたのを幸に六合雄氏、田中君と三人で出掛けた。

宿の前のスロープを登り切つて夏の湯澤道に出た。今日積つた雪が軟いのでスキーでも膝位までぐるんで歩き悪い。然し軽い雪だから力は要らない。吹雪はかなりひどいが雪は最う大方止んで、積つた綿雪を吹き散らすのが吹雪になつて見えるのだ。風は寒くて強い。宿の附近は餘り風當りが強くないので左程ひどいとも感じなかつたが、少し登ると急に強い風に當る。目出帽は持つて來なかつたので、顔殊に耳がひどく冷くて痛い。始めは自分が先頭だつたが六合雄氏田中君と順々に代つて先頭する事にした。楯の大きな林に入つた。此邊でも雪は四尺はあつた。林をぬけて一面に開けた場所に出る。此處からは風が真ともに吹きつけるので非常に寒い。吹雪の間から左手に駒、それから右に續いて小地藏、長七郎がかすかに見える。駒の南斜面にはもう岩の外には黒いものは一つも出てゐない。雪は小さな躑躅の頭が少し出てゐる位に積つてゐた。風當りが強過ぎるのでこれを避ける爲に入丁坂を登り切らずに、左下の方へ向つて中山の澤へ下つてから中山の上に出る考へて、其澤に出て小さな林の間を幾回となくキック・ターンを行つて漸く樹の少い中山の尾根に着いた。此間は風當りも少く従つて吹溜りて雪が深く、可なり奮闘したので暖くなつた。尤も尾根に出ると樹が無いので風が強くて寒くなる。其上新雪は飛ばされて古いのが固く凍つてゐたのでスキーは少しももぐらず、且つ滑りがよい。中山の頂上に着いたが、風の爲に長く止まる事が出来ず、すぐ小沼に向つて下つた。此時程吹雪のひどかつた事はなかつた。三間先を滑る人が殆んど見えない。小沼は猶更見えないので大體の見當をつけて下つた。少し風が鎮ると小沼の全景が顯はれた。大沼同様すっかり雪に閉されてゐる。冷いので少しも止まらず、直ぐ夏の八丁坂へ向つた。荒山は吹雪にかすかに白い膚を見せるのみであつた。脚下の血の池も一面の白さにそれと判然しない。始めはこれから地藏に廻る筈であつた

が、寒いのに閉口して八丁坂を下つて宿に歸るとにした。夏の道と同じ道を降るのだが新雪にスキートの滑り思はしからず、先頭は歩く外はなかつた。後から行くものは先頭の跡を面白く下ることが出来た。少し風が小止みになつて、雪の黒檜がすぐ眼の前に又大沼は小鳥ヶ島を浮べて眼の下に見える。檜林を抜けて宿に着いたのは二時半であつた。スキートの滑りは悪かつたが五分位で下つて來た。爐にあたりながら無感覺になつた手足や耳を暖ためてゐると、風は次第に止み青空が出て薄日がさして來た。もう晴れる見込は充分ある。夕方にはすつかり霽れて新しい雪の駒岳が赤く夕日に映えた姿は實に綺麗であつた。夜はまた昨夜の様に寒かつた。少し風が出たらしく、建てつけの悪い戸の隙間から時ならぬ雪を吹き込む。神社の杉の杜を掠める風の音を聞きつゝ、夢路を辿つた。然し首の邊が寒いので時々眼を醒され、安眠することは思ひも寄らなかつた。

五

寒さに眼が醒めると外はもう明るかつたが、昨夜の睡眠不足を取返す爲に、今度は各自工夫して暖たかに寝たが、一度覺ると寝付かれぬ癖のある自分は仕方なく飛び起きた。田中君はまだ氣持よさうに眠つてゐた。風は相當にあるが、梢や風當の強い場所の雪は大抵吹飛されて了つたので、吹雪はもう起らなくなつたが、仰ぐと地藏の頂上邊は未だ時々ひどい吹雪に霞んで見えた。宿の前に出ると眞白に化粧した黒檜の姿が目に入る。頂上に近い小さな木立は寒さの爲か一面に木花が咲いて、それが朝日に輝く有様は實に綺麗であつた。猫岩邊の岩が黒く雪から出てゐるのみで他は全く純白だ。少し沼の方に行くとも沼向ふの陣笠や薬師も同じく眞白である。午前八時頃朝食を済して新坂の方へ名残の雪見に出掛けた。雪は可成り締つてゐるので昨日よりはスキートが入らないで樂に愉快に滑る。先づ神社の前から沼に出た。神社には人は居ない。沼の上は相變らず北風を正面に受けて進むので、耳は

裂ける程に冷い。前を向くことも容易でない。スキーを運ぶ度に、それから起る雪のしぶきが顔に當つて眼を開いてゐられない。漸く沼を横切つて昔の水倉の邊から登つて新坂道に出たが、何分にも雪が深く風が寒いので、とうとう我を折つてその道で大洞に歸つた。この道から見た黒檜は一番立派であつた。宿に着いたのは十一時である。それから急に午後三時水沼發の汽車で歸京することになつて、支度もそこ／＼に十二時宿を出發した。歩いて二時間半あれば下れる。況してスキーであるから充分三時には間に合ふことゝ早合點して鳥居峠に向つた。午を過ぎて、その割に雪は乾いてゐるのでスキーの滑りは實によい。一昨日は出てゐた丈の低い躑躅は大抵雪に埋もれてカクマンブチの平は眞白である。その中を一直線に鮮かな痕を印して進むのは實に愉快だ。午後十二時十五分には峠の上に出た。下りの雪の様子が心配であるから覗いて見ると何處までも白いので安心する。スキーだから早いと思つても油断はならない。十五分程休んで峠を下り始めた。下り口は夏の雪溪の上端の様に雪が段をなしてゐる。それを斜に下りたが雪は申分がない。少し降るとそろ／＼筐が出て來た。迂闊に下ると雪が落ちてスキーを筐の中に突込み、抜くのになにに困難する。のみならず、南斜面であるから雪が思はしくない。餘儀なく狭い夏の道を一々キック・ターンして下つたので時間のかゝる事夥しい。夫から右の方に寄つて雪崩れの跡を横滑りに下り、漸く石像の側の飲料水の札の建てゝある流に來た時は二時過ぎてしまつた。案外時間が懸つたのに驚いて先を急いだ。これからは道も廣く雪も可なり多いのでどん／＼下れた。暫くして道が急に山腹を通るやうになる。自分は谷に下つた方が一層雪が多いかと思つて谷に沿ふて下つた。これが過ちで少し下ると雪の薄い草の斜面に出た。躊躇すると雪がこけて三間ばかり下の谷に落ちる處があるので、用心しながら進むと前に急に小さなガレが現れた。雪がないので進むことは出來ない。下は谷であるから下へも廻れない。スキーを脱いで上に廻らうと考へて、それをかきいで一歩踏み出すと、枯草に積つた薄雪に足が滑つてアツと云ふ間もなく

三間ばかり落ちて下の岩に腰をひどく打付けて止まつた。漸く立ち上れたのに安心して途中で手放したスキーと杖とを田中君に受取つて貰ひ、兎も角も上に登ることは出来たが、夫からは少し腰が痛むので思ふ様に滑れない。田中君が愉快相に先へ滑つて行くのが怨めしくも思はれた。次第に雪量は減ずるが来る時よりは遙に多いので、二ノ鳥居迄は難なく來られたが、其時既に三時であつた。飛んだ災難に時間を空費したので、豫定の三時の汽車には間に合はず、六時のものに乗ることにした。二ノ鳥居から下方は雪が急に減じて傍に少しづつ消え残つてゐるといふ有様に過ぎない。見かへしからはスキーは殆んど用をなさないといふてよい。時々泥の上を滑つたりする。一ノ鳥居に着いたのは五時。小憩の後スキーをかついで五時五十五分に水沼驛に着いた。下りの汽車が待つて居る。急いで切符を買ふと二分位過ぎて汽車が來た。辛くも間に合つた次第で、若しこれに乗り遅れると今日中には東京に歸れなくなる。桐生と小山とで乗換へ、上野着は十時を過ぐることに三十分であつた。これで多年の欲望も満足された譯であるが、唯スキーが餘り有効でなかつたことは遺憾であつた。これは雪量の少い關東地方の山岳に有りがちな事であるから止むを得ない次第である。ともあれ自分はスキー登山によい經驗を得たことを喜んでゐると同時にこの文が若し後遊の士に何等かの參考ともならば甚だ幸である。

(大正十年二月)

雜 錄

○玉川溪谷の案内者に就て

茲に玉川と稱するは盛岡方面より望みて岩手山背後即ち北西面に連亘する奥羽分水山脈の一部、八幡平(ハチワン)(一六一四米)南方大深嶽(オホコ)(一五四一米)に源を發し、澁黒川(シブクロ)の毒水を合して田澤湖(タザウ)の東側を流れ、神宮寺町附近に於て雄物川に注ぐ延長約二十里の河谷をいふ。此近傍の大體に就ては別に記述する機會あらんが、大正九年八月東北地方旅行の途、余は圖らずも同好の士に紹介するに足る一案内者を發見したるを以て、豫め一言陳べんと欲するもの也。

案内者姓名は田中豊之助、住所は秋田縣仙北郡田澤村字玉川なれども、積雪時は獵師、其他は釣師の職なるが故に、寧ろ玉川上流湯田又川(タマダ)と大深澤の落合附近に建てられたる又口小屋(マクグチ)に在る事多き

が如し。同人の年齢は當時ノートに明記し置かざりし爲確言し能はざる所なるが、五十歳を少しく超過したる様記憶す。彼れ、身長は小とすべきも、未だ頗る元氣にして、積を飛び雪上を走る事街道を歩むより易しと成す程山間の生活に親しめり。荷も平地ならざれば七八貫は擔ひ得る由也。常時沈黙の内にある彼が酒に對すれば、幼兒の慈母に倚るが如く、其量一升に及ぶと聞く。彼に文字無く漸く自己の姓名を判じ得るのみ。其性要領を得ざる東北人の内にありては可及的吾人の求むる氣風に近く、又一旦承諾したる上は確かなものなりとは、玉川小學校分教場受持、中島民五郎氏の談也。

同人の經驗は主として溪谷の内にあまねく、山上は積雪時にのみ涉獵するは一般山民の常也。但陸地測量部三角測量の際、傳左衛門澤より畚嶽(モツツメ)(一五七八米)に標石を運び上げたる事あり。尙又數年前縣吏(?)某氏に伴はれて鹿角郡熊澤の溫泉より八幡平に登り、其より以南大深嶽に到り、更に其北東なる曲崎山(マガリサキ)(一三三四米)迄國境を傳ひ

し事あり。此等は夏季に行ひし由なれば、相當に東道たり得るものと云ふを得べし。溪谷は玉川部落より上流一圓、小和瀬川、湯田又川等の地理に明るきが、就中最も得意とするは大深澤にして、是亦彼が釣師として活躍の地なり。

同人日當に就ては余は生憎天候不良なりし爲、凡三日間又口小屋に滞在せるも終に雇用の機會無かりしが、前記中島氏の言によれば、玉川部落附近は人夫として一日一圓五六十錢（大正九年八月に於て）なるより、之に相應して餘り高値ならず契約するを得んと云ふ。

尙、同人を知り得たるは實に中島民五郎氏の盡力によるものにして、同氏亦頗る闊達の風あり、好く余の趣味を理解し便宜を與へられたる點は、不便にして未聞なる東北地方を歩きたる間に最も感謝する次第也。同好者にして萬一此方面に向はるゝ場合には先づ同氏に依らるゝを便とす。又、田澤湖畔春山部落の所謂雪の白濱なる湖邊に存する旅舎湖心亭の主人は中島氏と知己の間柄なりと云へば、同方面より入る場合、是亦好都合なるべ

く信ず。

八幡平以南國境の連山は標高千四百乃至千六百米餘の間にありて、未だ草本帯の域にも達せず、従つて東北地方固有の灌木のヤブは甚だ猛烈なる事、縦走の折如何にすとも押し分けられざりし筈ありしと云ふ豊之助の言に徴するも瞭然たり。加之、同地方山岳は殆ど全部高原性にして、山稜と稱すべきもの曖昧なる地形極めて大規模に發達せる爲、案内者に一任し、夏時機上の豫定を遂行せんとするが如きは、先づ以て無謀の計畫たる事を斷言して憚らざる也。（沼井鐵太郎）

○美ヶ原

筑摩山脈の武石峠が日本アルプス殊に北アルプスの好展望地であることは、本誌五年三號の附録中村清太郎氏筆の「冬季信州武石峠より望める日本アルプス略圖」に依つて世に紹介されてから、山岳の展望に興味を持つ程の人で知らぬ者は無い位有名になつた。實際此山脈の山で千七八百米突の高さがあれば、孰れも眺望がよさ相に思へる。

中にも美ヶ原は山脈の中央部に位し、且つ其西方に連嶺の最高點二千三十四米突の一隆起を控へてゐるから、これに登つたならば更に廣闊なる眺望が得られるであらうと、昨年(大正九年)の十月末に出掛けて見た。時間が遅くなつたので原迄しか行かれなかつたが、豫期の大觀に接することは出来たので、其時のことを少し書いて見ることにした。尤も今では春秋の氣候の好い時節には、松本市の中學や女學校で生徒の遠足地としてよく登山するさうであるから、或は遼東の豕たる譏を免かれないかも知れぬ。

東京を出る時の豫定では、和田峠から尾根傳ひに美ヶ原に行き、物見石山を経て和田に下りて一泊。翌日は男女倉道を八島ヶ池に出て、鎌ヶ池に廻り、車山に登りて尾根傳ひに大門峠に下り、附近の都合よき場所に野營。三日目に蓼科山に登つて其日の中に歸京しやうといふ、例の慾張りすぎた計畫であつたが、二日目に雨に降られたので和田峠を蹠えて歸京してしまつた。

午後十一時飯田町發の汽車に乗つて下諏訪驛で

下車したのは、十月卅一日の午前八時を少し過ぎた頃であつた。直に出發して和田峠に向ふ。暫く見ない中に附近の様子が大部變つてゐるのに驚いた、殊に目立つのは落葉松の植林の多いことである。西餅屋に著いたのが十時十分。途中振り返ると木曾駒や御岳が孱顔を現してゐる。此道から御岳の見えることは初めて氣が著いた。此處から近道をしやうと左手の祠の前の舊道を辿つて行く。新道が山の鼻を大曲りに迂廻しやうとする角の所に出る、舊道は其處から谷の窪に沿ふて、今の峠と峯一つ隔つた西の鞍部に出たと記憶して居るが、最早殆んど道の形も存して居ないから、左手の小尾根を北に向つて上り始め、稍や笹の深い所を通過して和田峠に續く尾根まで登ると、意外にも小土手を中央にして二條の防火線が造られてあるのを見た。霜解の爲に滑る所もあつたが、笹の中を歩くよりは遙に樂である。丁度十二時に最初の千七百二十米突の圈を有する地點に達した。土手から一寸首を出して向ふを見ると、西北の冷い風が汗ばんだ顔にひやりと當つて。危峭天を刺す

槍穂高の連峯が、新雪に輝く白冷の姿を眼の前に屏風だちに立ちばだからせる。其瞬間息がつまるやうに感じた、こんなに奇麗でそして雄勁な山の膚や輪廓を見た事がない、餘り奇麗なので持へた物ではないかと、不圖そんな考が浮んだ程である。然し晴れ渡つた日の午下の太陽に隈なく照り映へて、寒水の如く澄み切つた晶冽な大氣の中に水が滴るかと思はれる位冴えに冴えた藍靨の肌を睨と見てゐると、矢張一の大藝術品といふやうな感じが起る。何となく名刀の焼刃の匂と似通つてゐるやうな気がした。乗鞍岳にも可なり雪はあつたが、御岳は割合に少なかつた。笹の中に腰を卸して寒風を防ぎながら、用意の晝食を濟し、再び防火線について三峯山に向つた。千八百米突の標高線の附近で尾根が左に折れてゐるが、防火線も此處で終つてゐるので、短い笹と草との中を走つてゐる路跡を辿つて、三峰山の三角點に達したのは午後一時頃であつた。此防火線は尾根通を蛇々と續いて、鷲ヶ峯から鎌ヶ池の附近を通り、千八百七米突の三角點ある隆起までも達してゐる。場合

に依つては之を利用して樂な登山が出来やうと思ふ。

三峯山の眺望は實にすぐれたものであつた。南は富士山から始めて甲斐駒山脈の諸山、雪の白い北岳、間ノ岳、續いて仙丈岳、荒川岳（鹽見岳）惡澤、奥西河内（西河内及魚無河内）赤石、聖、大澤、兎などが見え、木曾駒山脈の半以南は雲に掩はれてゐたが、御岳はよく見えた。乗鞍岳の右前にはこゝより少し高い鉢伏山が尨大な山容を横へて、稍や展望を遮ぎる。其右に霞澤岳が現れ、南穂高、明神、奥穂高、涸澤、大截地（北穂高）南、大喰、槍ヶ岳と、北アルプス南半の大立物が岩骨稜々として、天空に大鋸の齒を刻んでゐる。蝶ヶ岳や常念岳は其前に稍や低いが、大天井の一群は流石に高い。野口五郎岳が蛙岩の上から頭を出してゐる。燕岳、臺原山の連脈が東澤乗越で一旦低下して更に餓鬼、唐澤の二山を崛起してゐるが、此處から見た餓鬼岳の姿は素派らしいものである。其右には低く南澤、不動堀澤、七倉の一群が續いて、其上に殆ど純白に化粧した立山本山及

龍王、鬼ヶ岳に至る連峯が望まれる。針木、蓮華、爺、鹿島槍、五龍、大黒、牛首、唐松、奥不歸、鏝、杓子、白馬、小蓮華と山稜の大波がうねつて、其右は王ヶ鼻に遮斷されてゐる。是だけでも壯觀である上に、東から北へかけて八ヶ岳蓼科の連山、妙義、破風（荒船山）淺間連峯、四阿、白根火山群からして、遠く奥上州の群山が一眸の裡に集る。大概山に渴してゐる人でも、此山頂に半時間も過せば満足を得るであらうと思ふ。頂上には多少岩などもあつて、米躑躅が叢生してゐた。

三峰山の北の千八百二十米突の峰から急に下りとなつて、地圖には表はしてないが西側から喰ひ込んだ危いガレが二つ許ある、其縁を辿ると下から吹き上げる風に、霉爛した粉のやうな黄色の細砂が舞ひ上つて目もあけず息もつけない、急いで通り過ぎて見ると體が黄粉をふり懸けられたやうになつてゐた。下りが急になつて笹も茅も人丈を没する程に伸びてゐる。今迄禿山であつたのが此邊から木立が現れて來た。殊に西側の方が繁つてゐる。下り切つて前の高みへ登るのかと思へばそ

うではなく、主脈は其西の低い所に通じてゐる。尾根の工合が如何にも南アルプスの上河内岳の附近に似てゐると思つた。此處からまた路がよく踏まれてゐるので注意して行くと、右手の山ひらに小屋があつて煙が洩れてゐる。立ち寄る必要もないので其儘峠の方へ前進を續けた。峠の道に出たのは二時少し過ぎてゐたらう。此道はポツ／＼と通行人が絶えないので、山道としては左程悪い方ではないらしい。折から一頭の犬が東から登つて來て小屋の方へ馳せて行つた。

暫く休みて再び程に上り、千七百八十米突の峰を踰えんとそれから小突起の連續で、地圖には草地の記號しか入れてないが、少許の藪があつて登りも長く、南からする三頭の登りを思ひ出させた。勿論進行を妨害する程ではない。峠から約一時間を費して三時二十分に茶白山の頂上に立つことを得た。此處の眺望は一層の闊大を加へて北方は北アルプスの箴岳迄視界が開ける、南アルプスや槍穂高の方面は漸く霞に罩められて、鋭い輪廓もうすれて來た。脚下の美ヶ原は枯草色の平坦な



茶白山よ見りたる美ヶ原

高原を斜に展開して、西寄りに鍋を伏せたやうな形をした隆起が即ち二千三十四米突と測られた地點である。南端は可なり高い絶崖に限られ、東の方は物見石山へ連る尾根が原の一部をなして、針葉樹が所々に散生してゐ

る。もう時間が遅いので豫定の行動は執れぬ、よし最高點に登つたとしても空が霞んでゐるから遠望はきかない。それで此處から下山することにし、苦桃の實に喉を潤し、それでもまだ氣懸りなので原の中央まで駆足で行き駆足で戻り、往復三十分を費して荷物を置いた場所迄來ると、直にそれを背負つて和田に通ずる道をかけ下りた。少し下ると美しい梅の林の抱き込まれる。暫くして清冷な水が湧き出してゐるので、半日の渴を癒すことを得た。足元の明るい中に人里まで出られな

いと困ると思つて急ぎに急いだが、案外路がよいので足も捗取り、六時二十分には和田に著くことを得た。この宿もすつかりさびれてしまつて、人通りの多かつた頃の面影はない、宿屋は殊に見すばらしくなつた、唯翠川といふのがよいらしく、翌日汽車の中で松本から前の日に原へ登つて和田へ下りて其家に泊つたといふ會員の渡君に遇つたら、果してよいといふ話であつた。

東京を夜汽車で出發して、自分のやうに尾根傳ひに原まで行き、更に最高點を極めて其日に和田

へ下るなり武石峠の茶屋へ行くなり、或は松本方面へ下山することも、春の日永の頃であつたならば不可能ではない、けれども秋から冬にかけてはむづかしいから、松本若くは和田に一泊して翌早朝登山し、異つた方面へ下るか、左もなければ南から尾根を辿つて屏鏡泉（設備の如何を知らないが）あたりに一泊し、明れば茶臼山、美ヶ原、武石峠を経て松本に出ることは困難ではない。兎に角三日あれば十二分に此山脈の主要部を跋渉することを得やうと思ふ（木暮）

○日本百富士考

日本の國に富士山があることは、世界周知の著名なる事實である。富士山が古來芙蓉峯と呼ばれ、或は白扇倒懸に譬へられて我國に於ける代表的名山として崇拜されてゐたことは今更喋々するまでもない。従つて山と云へば誰れも先づ聯想するのは富士山であつて、少しでも形態に於て類似點があれば、富士の名を借りて何々富士と呼ぶのが、殆ど慣例の様になつて居る。彼の火山特有の

秀麗なる圓錐狀をなした端巖なる姿が、本州最高の山岳であると云ふ事と合して、國民の心に深い感銘を與へ、いつか山とし云へば富士を思ひ、僻遠の地に於て尙且つ小丘を築いて淺間神社を祠り、是を富士と呼ぶが如き結果を生ずるに至つた。

元來富士山は噴火に依つて成形されたものであるから、日本許りでなく世界に散布した數多の火山の中に、此の富士型火山が隨分有る。日本人が之を見たらば、どれもこれも何々富士と呼びたいであらう。現に布哇にあるキラウエア山の如きは移住日本人に依つて布哇富士と呼ばれて居る位であるからして、日本國に散布した富士型類似的の山岳に何々富士の名を附するのも無理ならぬ事とは思はれる。

其等の多くの富士類似山岳の中には本物の富士山より其形態に於て優つた美しさを持つたものも少くない。秀麗なる其形態の類似からして、どうしても富士と呼ばずに居られない様な山もあるであらう。

また中には富士山と何等かの關係あるが爲め

に、富士の名を冠したのもある。例へば甲斐相摸に跨つてゐる大群山を「富士隠」と呼ぶが如きもので、此山あるが爲めに富士を望み見る事が出来ない地方のものが名付けた稱呼であらう。

以下私の折に觸れて手記して置いた富士名を冠せる山々を、次の如く分類して見た。

(一) 形態の類似に因るもの。

(二) 抽象的聯想に因るもの。

(三) 或關係を有するに因るもの。

(呼稱の起源を詳に知ることが困難なので、勿論分類に誤が多からうと思ふ。篤志の人の叱正を得れば幸である)

(一) 形態の類似に因るもの。

(括弧内の國名は、其屬國、山名は其本稱を示す)
大富士。(尾張國。二宮山) 標高九六六尺。

同國小富士山と並んで山姿富士に似たるを以つて呼ばれて居る。日本山嶽志の引用書に曰く「遠

望之若芙蓉、俗以此峰爲大富士」云々。

尾張富士。(尾張國。小富士山) 標高九一三尺。

「形容宛として富士に類するが故に其名あり」

「俗説に淡海の土を駿河にはこびて一夜に富士山を作り給ひし衆神、こゝに一簣をこぼし給ひしが此山なりと云傳へ、或は此山より東方富士山を見るゆえに名づけたりともしへり」(日本山嶽志)。

伊東富士。(伊豆國。小室山) 標高一〇五九尺。

伊東の東南に在る小火山であつて。端麗な姿を海に映して居る。

伊豆富士。(伊豆國。大室山) 標高一九一七尺。

伊東の南二里許に在る小火山、缺頂圓錐形の山で、里人は駿河富士山の妹であると云ふて居る。
八丈富士。(伊豆國八丈島。西山) 標高二千八百六十四尺。

十四尺。

完全なる富士形を呈する火山で、其形に依り八丈富士の稱がある。大永二年、慶長十年に噴火した記録を有する山である(「山形駿河富士山ニ彷彿タルヲ以て八丈富士トモ呼ブ」云々。(日本山嶽志)。

本山嶽志)。

近江富士。又は淡海富士。(近江國、三上山) 標高

一四一一尺。

餘り結構な富士形を備へては居ないが、古來近
江富士と呼び爲して名高いのは如何なる理由で
あるか。蓋し(二)の部類に屬する者か。

おもひ立富士の根遠き俤を

近く三上の山のはの雲 堯 孝

高井富士。(信濃國。高社山)標高四四五八尺。

日本山嶽志に曰、「云々、更級、埴科、水内の三
郡より望めば、駿河富士山に似たりとて高井富
士の稱あり」云々。

諏訪富士。(信濃國。立科山)標高八三四九尺。

此山は大圓顛形をなせる火山の上に更に小圓錐
峯を戴いて居て、此の小圓錐形の丘を諏訪富士
と呼んで居るのである。

信濃富士。(信濃國。有明山)標高七五八四尺。

詩に「又見芙蓉聲信州」云々(村田香谷)

北富士。(下野國。男體山)標高八一九七尺。

完全なる圓錐形を爲せる火山であつて、山頂に
圓に近き噴火口がある。近く中禪寺湖より眺め
る姿、遠く野州、武州の平野より望みし姿、何
れも富士を聯想せしめる。云ふ迄もよく有名な

る山である。

榛名富士。(上野國)標高四五八七尺。

榛名山頂榛名湖の東邊に聳ゆ。榛名山の中央火
口丘であつて。湖面上二百五十米に位し、完全
なる圓錐形を爲して居る。

南部富士。又は岩手富士。(陸中國。岩手山)標高

六七三三尺。

東方より望む時は富士山に似て居るが、然し半
面には二三の小峰が連つて居る爲め醜い姿を見
る處もある。之が爲め南部の片富士とも呼ばれ
て居る。盛岡市方面から見た姿が殊に山麓の小
岩井農場あたりから見た姿は、かなり端麗であ
る。

津輕富士。又は奥富士。(陸奥國。岩木山)標高五

三六二尺。

東方より見る時は美しき圓錐形を爲し、裾野の
發達著しく、山容富士山に似たるより此の名が
ある。然し山頂は富士山の如く單調でなく三峰
に分れて居て、其中央なるが岩木山である。複
雜なる火山であつて岩木山はその中央火口丘を

爲すものである。

秋田富士。(羽後國。鳥海山) 標高七三五八尺。

二個の二重式火山から成立した、ほゞ圓錐形の山で、奥羽第一の名山と呼ばれ、又鳥海富士の名もある。

角原富士。(越前國。文珠山) 標高一一五五尺。

日本山嶽志録して、「雪中角原より見るときは不二山に似たり」云々。

越に來て富士とやいはむ角原の

文珠がたけの雪の曙 西行

丹後富士。(丹後國。由良嶽) 標高二二五四尺。

形狀似たりと云ふ程でもないが、かなり名ある山である。

伯耆富士。又は出雲富士。(伯耆國。大山) 標高五

六七六尺。

中國第一の高山嶽で、火山特有の圓錐狀の姿は爲せど富士を思はするには少しく無理だ。古來神靈の寓所として崇敬せられた山である。呼様の起りは或は(二)の部に屬するものかも知れぬ。

伯耆不二白砂雪吹て夏もなし。

三千風

播磨富士。(播磨國。笠形山) 標高三一〇〇尺。

「山容富士山に似たるを以て呼んで播磨富士と云ふ」(日本山嶽志)

周防小富士。(周防國。巖嶽) 標高一六六三尺。

紀州富士。(紀伊國。龍門山) 標高二四九五尺。

「府下より之を望むに其形恰も富嶽に似たり」

(日本山嶽志) 又詩曰、紀水東頭八朶峰、關南爲

許小芙蓉、云々。(橘山散人)

讚岐富士。(讚岐國。飯山) 標高二四九五尺。

日本嶽志曰、其山容富士に酷肖せるを以て讚岐

富士の稱あり。讚岐鐵道阪出驛に到れば南方に倒

扇狀を作して屹立せり、云々。

讚岐にはこれをや富士といひの山

朝げの煙たゝぬ日もなし。

西行

西行

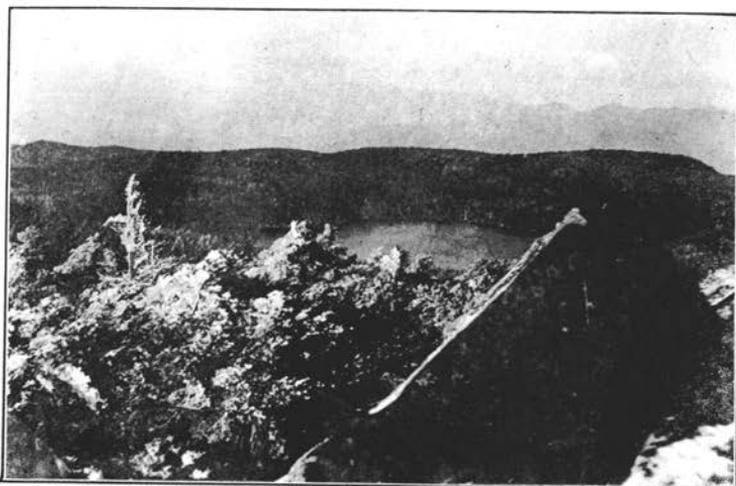
筑紫富士。(筑前國。肥前國。浮嶽) 標高二六五七

尺。

「其山容圓錐形を爲せり」(地名辭典) 然し筑紫の

上 高見石より白駒ノ池

武田久吉氏撮影



下 新雪の賽ノ河原

武田久吉氏撮影



富士として有名なるは由布嶽又は開聞嶽の方ではあるまいか。

筑紫富士。又は豊後富士。(豊後國。由布嶽) 標高五六六三尺。

山形圓錐を爲せる熄火山。日本山嶽志曰「山巔の白雪四時消ゆることなし、其狀恰も芙蓉に似たるを以て豊後富士と云ふ」云々。之に依れば山形が直接富士山に似て居ると云ふのではなく、芙蓉(花の芙蓉?) に似て居るから、間接に富士の名を取つたとも思へる。

薩摩富士。又は筑紫富士。小富士。(薩摩國。開聞嶽) 標高三〇四九尺。

「開門海角より峭然と突立し、秀絶なる富士山をなす」(日本山嶽志)

富士寫嶽。又は小富士。(加賀國) 標高三一八八尺。歌に曰「富士の根に似たるを見れば越路の、常なる雪もめつらしきかな」(三浦千春)

加賀には有名なる白山があつて、此山を呼んで芙蓉峰と云つて居る。富士山の白雪常に消えず夏尙八朶の翠麗を天空に聳えるを呼んで芙蓉峰

と云ふのと同じ意味であらうと思ふ。されば白山と富士との間に關係を見出すことが出来るが、少し主題を脱した形があるから止める。

越ノ富士。(越後國。鷲巢山) 標高四〇一二尺。

「形似ヲ以テ里人越ノ富士ト稱ス」(日本山嶽志) 越後富士。(越後國。妙高山) 標高八〇九八尺。

山勢雄大なる二重式火山で、頂上は凸凹甚しいが、ほゞ圓錐形を爲せる富士式山形を爲して居る。「日本山嶽志」に詳しく記してある。「土俗此山ヲ呼ンデ越後富士トイフ、形似ヲ以テナリ、式按ズルニ、岩船郡鷲巢山モ亦越ノ富士ト稱セラル、然レドモ鷲巢山ハ形似ノミ、地質ハ大ニ異レリ、此山ニ至リテハ形容地質全ク富嶽ニ異ナルコトナク、且ツ山勢雄渾到底鷲巢山ノ比ニアラズ、以後此山ヲ越後富士ト名ヅケ、鷲巢山ヲ越後小富士ト改稱スル方可ナルニ似タリ」と。有馬富士。(攝津國、角山) 有馬温泉の近くにある小岳で倒扇狀の奇峰である。

渡島富士。(渡島國。駒ヶ岳) 標高三六二七尺。

山容怪異な火山で裾野を擴げる工合等は富士山

を思はせないことはないが、「山容富士山ニ似タルヲ以テ渡島富士ノ稱アリ」と北海道名勝案内等に麗々しく記してあるのは少し當らないと思ふ。

蝦夷富士（膽振國。マクカリヌブリ）標高六四一
二尺。

形狀完備せる富士式標式的火山である。頂上に一大噴火口を有し、南側中腹に「小富士」と呼ぶ圓錐丘がある。古來著名なる北海道有數の高山で秀麗なる山容の所有者である。

千島富士。（千島國後島、チャ／＼ヌブリ）標高
約六〇四八尺。

二重式火山で缺頂圓錐峯上更に中央火口丘の圓錐峯を戴く。

千島富士と稱して、擇捉島の「鷄冠嶽」或は得撫島の「雪光山」を指すものもある。何れを正しとするか知らず、そのまゝを集録して置く。

「鷄冠嶽」は標高四〇五九尺の二重式火山で、秀絶なる山姿を備へて居ると云ふ。

「雪光山」は標高四一四八尺、圓錐形を爲し最も

秀麗なる富士式火山であると云ふ。

阿寒富士。（釧路國。ポンヌブリ）阿寒火山群中最後に噴出したる鈍圓錐形火山で、雄阿寒嶽と呼ばれるものである。「標高約四千尺餘で富士式形姿を持つて居る。

(二) 抽象的聯想に因るもの。

都富士。（近江國山城國。比叡山）標高二七九九尺。此の山は何う見ても富士に似たりとは見えない。山岳としての雄偉な姿を指して富士の名を冠したと思はれる。日本山嶽志載するやうに、「嶽中最高峻なる四明峯より秋晴る、日富士を見る」と稱す、不審」と云ふやうな理由からとすれば(三)の部に入るべきもの、様にも思はれる。

頃富士。（常陸國。男體山）標高二二四四尺。

如何なる點から富士の名を冠したか不明であるが、或は岩手山を片富士と稱すると同じ様な意味からではないかとも思はれる。然し此の山の成生が富士式でない處から推して此處に録して置く。

富士山。（安房國）標高凡一一〇〇尺餘。

「全山第三紀層より成るもの、如し、」(日本山嶽志)然し房總地方では、駿河の富士山を朝夕の天空に美しく眺め得る處多く、此等の場所を富士見山又は富士見臺等と俗稱して居るものがある點より推して、或はそう云ふ意味を持つた山ではあるまいかとも思ふ。暫く疑問とする。

阿波富士。(阿波國。高越山)標高三七〇五尺。

「山勢特立し、近傍諸嶽概ね其下風に立つ」云々(大日本府縣史)。

伊豫富士山。(伊豫國)標高四五〇〇尺餘。

「全山結晶片岩より成るもの、如し」(日本山嶽志)。

(三)或關係を有するに因るもの。

富士隱(甲斐、相模國。大群山)標高五二四〇尺。

富士山を遮り隱す爲に呼ばれた名であらう。

以上の外其所在不明であつたり、又は詳かでない爲に記載しないものがある。例へば、吾妻富士。

綾里富士。讚岐小富士等の如きが夫である。

尙此他にも遺漏は勿論多くあらうと思ふ。其等は廣く同好諸君の御教示を仰いで他日補正した

と思つてゐる。(中村直男)

○十和田湖に遊びける時に

田口虎之助

鹿角山さか路を遠み馬草かる翁のうまを借りて越え來ぬ

里人の錢占をすと水海の浪間にすつるかすぞ知られぬ

このうみは神や守れる見わたせば木葉に似たる塵たにもなし

かゞみなす水を清みと八千尋のそこにひそめる魚も見えけり

やまさとの夕食の饗にひめますのあつもの有と思ひかけきや

ひめますの名もなつかしく炙り物あつものさへに味のよろしも

十和田湖より流れいづる奥入瀬川の

溪谷に沿ひて下りけるときに

天地のわかれし時ゆ斧入れぬみやまのもりはこけむしにけり

杣人の手をたにふれぬ此森はちとせののちも
かかれと思ふ

神の如轟きおつる瀧の音に人のもの云ふ聲も
きこえず

たきのへに庵しめなばみなつきのもちのあつ
さも知らずや有らむ

○高見石と白駒ノ池

八ヶ岳山彙中夏澤峠以南は盛に登山家に見舞は
るゝに反して、以北は只僅に二三の比較的古い登
山記を有するに過ぎず、又案内的記事としては第
十一年第三號(其の追加は第十二年第一號にあり)
に掲載された「八ヶ岳の北」なる一文以後別に何
物も見ない様である。

山彙中此の部分で多少共登山者のあるのは、北
端の立科山で、これは夏時祭禮があつて多數の村
民が登るといふ。その他一種の名所として浴客が
杖を牽くのは、丸山の東肩にある高見石で、これ
は澁ノ湯名所の一として、その繪葉書さへ出來て
居る程である。

丸山や中山がシラビソやヒメツガの密林で何等
の眺望がないに反し、高見岩は大岩塊の奇抜な累
積で、北々東から東南へかけた闊い展望と、西々
南の比較的狭い眺望が得られる。惜む可きことに
は丸山と中山とが随分邪魔な位置にあつて、この
兩山によつて大部眺矚が遮斷される。

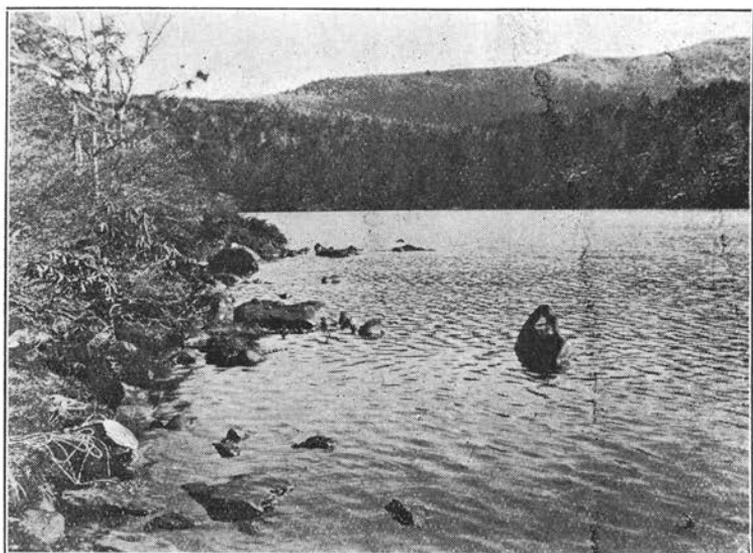
高見石に登るには何と言つても澁ノ湯を根據地
とするが一番良い。澁ノ湯に達するには、茅野か
ら笹原を経て行くのが本道で、車の通行出来る程
立派な道路が開かれて、夏冬を問はず集まる數百
の浴客の主要通路をなして居る。佐久方面からの
路としては、白駒ノ池と高見石を通過する小徑と、
稻子の澁ノ湯から細徑を辿り、中山と根石岳との
中間を乗越して達するの外、丸山の北の大石峠を
經るものがあつて、此の最後のものが一番よく踏
めて居る。

稻子の澁ノ湯から峠越しする路は、オホツツギ大月川の谷
を溯るもので、新開地附近迄は奥秩父の背面が可
なりによく望まれる外、峠(但し無名)の頂上迄は
林の中を行くのである。新開地の部落を後にして、

雜木(ヤシャブシ、ヤマハンノキ、ヤナギの類等)の生へた草原を、稻子岳を正面に仰ぎ乍ら行くと、大月川の支流を右岸に渡つてから間もなく上り路となつて、シラカンバが増して来る。稻子ノ湯に近づくと、植ゑられたカラマツやナ、カマドがシラカンバに交つて、景色は彌々高山的となつて来る。湯場迄は浴客の往來が多いのと、駄馬の通ふ爲め、道は山路としては至極よい方である。

稻子ノ湯からは彌々深山の氣分が横溢して来る。硫黄臭い樋の傍などを過ぎて上ると、足下にはゴゼンタチバナが地に敷いた様に生へて、初夏にはベニバナイチャクサウが美しい。大月川の本流を渡つて斜面を上ると、左手にヒルムシロに蔽はれた小池があつて、池畔はアブラガヤなどの繁つた野地で、向側にはビヤクナゲの大木が一株ある。路傍にはシラタマノキ、コケモ、ゴゼンタチバナが群生し、シラカンバの林には巨大なイチビだのコマツガが交つて、氣持のよい森林である。高距大約一八〇米も上ると、シラカンバは忽然として絶え、コマツガの密林となる。是から上はシ

シラカンバに代るにソウシカンバの大木が現はれ、



時折稻子岳の一角が覗はれる外晝猶暗い黒木立て

白駒ノ池北畔より西望 武田久吉氏撮影

ある。二二〇〇米の小園をこえてダラ／＼と下ると、里稱池の平で、此處に黒木に圍まれて神秘的な小池があつて、對岸に稻子岳の恐ろしい様な絶壁が仰がれる。此の池から十分も行くと左に本澤に行く路が分れるが、甚だ不明瞭で迷ひ易い。諏訪越の路は只眞直に三十分も爪先上りに進むと再び大月川上流の谷を右に下瞰し、時折左へからみ乍ら西へ／＼と上ることになる。此の邊から路は益々急になつて短かく之曲し乍ら、絶壁と絶壁との間の、唯一の乗越路をヒタ上りに上るのである。頂には巨石が二三散亂して、灌木等が生じ、如何様二四二〇米もある事が肯かれる。

西面は東面に比して全く反對な地形で、十數間黒木立を西北にぬけると平坦な茅戸の様になつて、所々に小凹地などが見られる。下るにつれてシラビンなどの間から西方の展望が廣闊でありそうだが、私は夜陰に通過したので詳細を述ぶる事は出来ない。

諏訪道は可なりよく踏め又修理されてあるから迷ふ虞は更にない。頂から一時間も下ると「左富士

見 右澁ノ湯ヲ經テ茅野」と大書した標木があつて、富士見への路は可なりよい様である。澁ノ湯路は右に急に谷に下つて、時には深い藪や谷の押出しなどで路が消失し、夏には到底通行出來そうにもない。其の爲め僅の距離に一時間近くかゝる。

澁ノ湯は山中の廣大な一軒屋で、座敷の數も多く而も中々整頓して居るには一驚を喫する程である。湯は微温を保ち、之を沸して入浴するのである。硫黄臭のある透明なもので、胃病に效があると云ふ。只割合に食物が粗悪であるのは、此の邊の湯場の通性であらうか。

澁ノ湯から高見石迄は澁川の源に沿うた小徑を辿るので、約一里半と稱する。シラビンの密林を上る路は感じがわるくない。一時間も上ると樹木は短矮となつて、石が散亂し、やがてバツト明るくなつて林から出抜けると其處は賽ノ河原の下部である。顧ると西には木曾の御岳から駒ヶ岳まで宮川の谷や釜無山脈の彼方に峙つのが一望の中に集つて来る。賽ノ河原は大小の亂石が散在して居る

間をハヒマツ、シロシヤクナゲ、コケモ、ガンカ
 ウラン等の點綴した斜面で、所々に短いシラピン
 等が孤立して居る。此の邊迄は豊平村と北山村と
 の境界を辿るのであるが、賽ノ河原の上部から稍
 左に折れて再び平らかな深林となつて、倒壊した
 巨木の間を小徑を辿るのである。間もなく東に少
 し上ると密林から出て前面に高見石が堆高く現れ
 て、右には密林に蔽はれた中山の平らかな斜面が
 見え、左稍後方にはその小基模の感を與へる丸山
 が、そして其の右には茶臼から立科に續く山稜が
 現はれ、縞枯の東麓には雨池がキラリと輝くのが
 見える。

白駒ノ池は高見石から目の下に見える。密林に
 取まかれた、略四角形の美しい池で、ヒッソリと
 静まり返つて居る。大抵の遊客は高見石で下瞰し
 て満足するらしいが、之に達する路は明瞭につい
 て居る。それは佐久から千代里牧場を経て諏訪に
 通ずる小徑の南に接して居るので、高見石からは
 容易に池畔に下ることが出来る。

高見石から十數間西に戻つて、北に向ふ小徑を

覓め、ダラ／＼上ると直に下り氣味となる。これ
 からシラピンやコマツガの密林の中を、北に走る
 明瞭な小徑を辿る、荒廢した箇所も殆んどなく、
 やがて東に向つて下り、前後三十分で右下に白
 駒ノ池が樹間にきらめくのが見える。

池畔にはビヤクナゲ、サラサダウダン等の高山
 性灌木が密生し、其の背後は直に黒木立に續いて
 居る、水は清冽で別に魚鱗も棲まぬらしい。

池の北畔から右には高見石が聳え、左には中山
 の東に續く二三二米の三角點の櫓が、白く光つ
 て居る。池には穢には來る者もあると見えて、空
 罐やら赤玉ポットワインの空壘が散亂して、此の
 清淨な山中の池畔を穢して居たのは實に不愉快の
 極である。

白駒ノ池から東に下ると、十五分許りで池水の
 流下する平らかな小溪、即ち大石川の源を横ぎる。
 夫から尙十分も黒木立を行くと大石峠からの道と
 分れ、尙十分程で急に密林から出離れて牧場に入
 るが、此處からの展望は慥に一遊の價値がある。右
 は金峰から左は荒船迄に至る廣い眺望と、近間に

は點在するカラマツやシラカンバが得も言はれぬ景趣をなして居る。牧場を通じて五箇の部落に下る迄常に廣々した眺望、美しいシラカンバの林に、山好の者は上氣してしまふ。漸く下れば左には淺間から籠ノ塔、湯ノ丸方面が、右には根石の一角、箕冠の恐ろしい爆裂口、横岳の一部に赤岳(?)も現はれ、又遙に富岳やら箱根火山群(?)も認められる。傾斜は緩てシラカンバが白い膚を山風に曝し、如何にも火山の裾野と言つた感じのよい草原である。

此方面に遊ぶには、今では佐久鐵道が小海迄延長して居るから、是によると終點から僅か戻つて千曲川を渡ると西馬流(シマナガシ)に達し、鎰掛(ハナ)、八那池(ヤナ)を経て松原に達しられるし(一時間餘)、終點から一つ手前の馬流で下車すれば其處は東馬流で、本間川(ホンマ)に遠くない。小海は停車場のある所で、附近に飲食店やら雜貨店やら、諸専用が足りるが、馬流の方は所謂停留場なるもので、怪し氣な板圍の腰掛けがある外何等の設備もなし、又附近には休憩や飲食の便ある家は見當らない。(武田久吉)

○甲斐駒ヶ嶽の新登路

駒ヶ岳山麓臺ヶ原村の住民には、竹宇の駒ヶ岳神社前より、尾白川に沿ふ新道を開鑿するの計畫ありて、途中尾白川の瀑布を見物し、黄蓮澤(?)を上りて屏風岩に達する豫定なりといふ。新道工事成るの曉には此の道によることとし、下山に際して前屏風、笹の平を経由するとせば、變化ありて面白きことなる可し。

因に記す、七丈瀑の小屋は廢止の噂ありしも、現今は臺ヶ原登山案内組合の處管に屬し、依然九月末又は十月初旬迄宿泊の便ありといふ。又登高行第三號(一四〇頁)によれば、信州戸臺よりする登路が駒ヶ岳の山稜に達する附近に、新らしき小屋の建設されたるものありといふ。此の小屋にて寝具食料を得ること果して可能なるや否や不明なるも、兎に角駒ヶ岳登山及山脈縦走等には便益少なからざる可し。

(H・T・)

雜 報

○淺間山の爆發

大正十年六月四日の大爆發後、暫く靜穩を保ちつゝありし淺間山も、六月廿一日以後左記の如く爆發を繰り返せり。

六月廿一日午後五時四十一分三十七秒 淺間山觀測所にては同時刻にドンと云ふ震動を感じ五秒を経てドンといふ大音響と共に黒煙の上騰するを見たり煙柱の中央には褪黄紫色の光輝ある電光殆んど垂直板狀となりて出現し、同時に左側より二條、右側より一條の電光外方に斜に發したり當時頂上は南東の強風なりしを以て黒煙は北西に靡き盛んに電光を放つて擴散せり。上田、屋代、須坂、長野市等に降灰ありたり。

六月廿九日午前八時三十一分廿三秒 噴煙北東に靡く。

八月十二日午後六時十分 約四十分間黒煙を噴出す。

八月廿一日午後六時半頃小爆發あり。

十月廿八日午後二時頃小爆發あり。

六月廿一日の破裂に就て

理學博士 大森房吉

淺間山湯平微動計觀測によるに六月廿一日の午後五時廿九分五

十三秒より既に微震の繼續あり、五時四十一分卅七秒に至り噴火となれるものなるが、此破裂は多量の砂灰を噴出して主として淺間山より西方に降下せしめ、上田長野兩市にも降灰せるは、明治四十二年の活動以來始めての事に屬し本邦各火山の噴火灰が上層の西氣流によりて東方に輸送せらるゝ原則に反する如くなるが之は自ら其事由の存するものありとす。東京大學構内の微動計觀測によるに噴火の地震即ち地震動が東京に達せるは午後五時四十二分十七秒にして總繼續時間は三分四十秒、主要部の繼續時間は一
分五十秒也、而して最大動は東西方向に〇、〇五二「ミリメートル」南北方向に〇、〇九「ミリメートル」に達して去六月四日の強爆發のときより二倍以上の大きさに及べるのみならず、地震動の大なるとは實に從來數多の淺間噴火中に其比を見ざる所なりとす之れ即ち強爆發には非ずして、大噴煙なるの特徴と認むべきものにして、實際に今回は淺間山湯平觀測所にも、爆音は著るしからず長野上田及び山麓各地にても、格別爆音を聞かざりしなり、且つ強爆發的に非常の勢を以て噴煙が上騰せるに非ざるを以て、比較的下層の山上風に支配せられ、灰を西方長野、上田方面に降下せしめたるなり要するに六月四日の爆發も稍々深き個所より起れるものにして今回廿一日の大噴煙は更に一層深き個所より起られるものなれば此等兩回の破裂が、一は非常に強き空振をともなひ、他は他量の降灰を伴ひたるは、去年十二月中旬に孔底淺き個所より噴火したるとは趣きを異にし、却つて活動中心が深所に退下したるものと解し得らるべきなり」淺間山の噴火には爆發的と非爆發的との別あり、爆發的なるはドゥーンと烈しき爆音と共に孔底の

一部を破壊し其の岩塊を抛射するものにて地響きを與へて地震動とならしむるは頗る輕微なり、之に反して非爆發的なるは格別著しき爆音を伴ふこと無きも、稍々長く繼續して灰小石を含める黒煙を極めて多量に噴出す、即ち寧ろ大噴煙と稱すべきものにして、其の地振動は却つて比較的著大なりとす、此等の差異を生ずるは孔底下に於ける噴火中心點の深さに關するものにして、大なる噴煙は深き個所より表面に通ずる裂罅に沿ひ黒煙灰砂を噴出する現象なるべきなり。(大正十年六月廿八日信濃毎日新聞)

○檜前山の大噴火

膽根國檜前山は一週前より間斷なく鳴動を續け噴煙盛であつたが、六日午後三時廿分に至り鳴動と共に大噴火を爲し、黒煙濛々として天日を覆ひ苫小牧方面は雨の如き降灰の爲外出來せず、今回の噴火は去る四十一年以來見ざる現象で人心恟々たり、作物の被害も亦多大であらうと。(七日、小樽發)(大正十年七月八日信濃毎日新聞)

○里漁山の爆發

臺灣打狗電報——臺灣打狗支廳東港郡里漁山は廿一日夜突然爆發し方二間餘りの大穴から盛に瓦斯及溶岩を噴出し、火柱天に沖し凄慘の光景を呈したが、廿二日午後四時に至りて噴出は一時熄だが鳴動は尙繼續してゐる。山麓の製糖會社の甘蔗畑は宛然泥海と化し被害甚大であるが、幸に人畜には異状がなかつた。(大正十年十月廿八日信濃毎日新聞)

○越中山岳會成る

日本の山岳國として駿甲飛信の中の孰れの國と較べても決して劣たりとは思はれない越中の國に今迄山岳會の生れなかつたのは寧ろ不思議といふ可きであつたが、今度之を遺憾として、日本山岳會員吉澤庄作、田近正貞、笹岡久彦、牧野孝七、石黒清藏の五氏主催となり、縣下同志を糾合して大正十年七月九日發起人會を開催し、越中山岳會を設立し、同月十五日富山市紀念俱樂部に於て、發會式を兼ねた講演會を催した。來會者は多いとはいへなかつたが、孰れも熱心な人許りで全部が直に會員となつた程である。午後四時田近正貞氏の挨拶に次いで小野隆義氏は登山雜話なる題で諸方面の山岳の模様、併に小林區署の仕事等に就て詳細に説かれた。次に内山數雄氏は今春笹川達雄君と行つたスキーにて白馬を踰えた時のことを氏一流の眞熱なる態度で話され、そゞろに聽衆を感動せしめた。休憩後北アルプス就中黒部方面の權威である吉澤庄作氏は、大約二時間に亘りて地理、地形、植物、人事等に就き概論されたる後、北アルプスと越中との關係に説き及ぼし、最後にわが越中山岳會の使命の重大なることを高唱されて、この日の會を終つた。今後は切に本會會員諸君の御助力を仰ぎたい。因に左の十二名が幹事として選ばれた。

- | | | |
|-------|-------|-------|
| 漆間 唯一 | 吉澤 庄作 | 筒井仙之助 |
| 田近 正貞 | 笹岡 久彦 | 石黒清藏 |
| 牧野 孝七 | 山田龜太郎 | 齋藤俊彦 |
| 吉田孫四郎 | 御旅屋太作 | (一名缺) |

越中山岳會會則

- 第一條 本會ヲ越中山岳會ト稱ス
 第二條 本會ハ山岳ニ關スル 研究並ニ一般登山者ノ便宜指導ヲ圖ルヲ目的トス
 第三條 本會ハ毎年一回總會ヲ開キ尙ホ必要ノ際ニハ臨時小會ヲ開ク
 第四條 本會ハ事務所ヲ富山市五番町石黒清藏氏方ニ置ク
 第五條 本會々員ヲ分チテ 正會員及ヒ名譽會員トス、正會員ハ本會ノ目的ヲ賛シ 規定ノ會費ヲ納メ、名譽會員ハ斯道ノ先輩及ヒ本會ノ爲メニ盡力セラルル篤志家ニシテ 本會幹事ノ推薦ニ依ルモノトス
 第六條 正會員ハ會費年金壹圓ヲ前納スヘキモノトス、名譽會員ハ會費ヲ要セス
 第七條 本會々員タラムト欲スル者ハ 現會員一名ノ紹介ヲ要シ入會ノ諾否ハ幹事會ノ決議ニ依ルモノトス
 第八條 本會ニ幹事若干名ヲ置ク、幹事ハ總會ニ於テ選任ス但シ任期ハ一ケ年トシ再選ヲ妨グ
 第九條 本會々則ヲ變更スルニハ總會ニ於テ之ヲ議定ス
 (富山市 石黒清藏寄)
 大正十年七月

新刊圖書紹介

○大和アルプス大臺ケ原山

大和山岳會編

假綴の四六版にして、奈良縣吉野郡役所内大和山岳會を發行所とすれども、發賣所併に定價とも、記載なければ、賣品なるや否を知らず。希望の向は同郡役所宛にて照會するが宜しかん。收むる所五篇、大和アルプス縦走記(大阪毎日新聞社)吉野群山(河東碧梧桐)大和名山の保護に就て(白井光太郎)大峰の花木(竹下英一)大和アルプス、大臺ケ原山植物目錄(岩本武助、鈴木靜穩)。他に附録として、十津川(坪谷水哉)吉野郡の山水美(吉野山人)吉野郡の森林植物帶(吉野山人)及多數の寫眞版を添ふ。吉野群峰を跋渉せんとする人には好個の參考書といふ可し。大正十年七月發行。紙數百三十二頁。

○山の幸

山本徳三郎著

前者と同じく假綴の四六版にして、百三十四頁、定價五十五錢、發行所は東京市神田區錦町一丁目十九番地小川誠文堂とす。内容は第一總説、第二登山記の二部に分れ、總説の部には一、山の幸。二、登山法私見。三、科學と詩。四、山中の傳説。五、雲に對する疑問。六、山岳の効用等あり。登山記の部には一、富士の雪滑。二、羽後富士鳥海山。三、津輕富士岩木山。四、羽後の森吉山。五、十和田湖。六、鋸山の運命。七、日光山岳雜談。八、霧島山

高千穂峰登山記等あり。著者山本氏が山岳に關する諸般の問題を捉へて、熱心研究せらるるは既に「山岳」誌上に發表されたる幾多の論文を讀みたる人の遍く知る所也。行文また直截簡明銜氣なきはよし、一本を座右にせんことを薦む。大正十年七月發行。(以上二項木暮)

○會員通信

△前略。山岳第十五号三號入手仕候。誌中六七頁支笏湖周回十七里は十一里(王子製紙電氣部調査に據る)の不用意なる誤記に有之何とも申譯無之候。次號に於て可然御訂正願上候。(竹内亮)

△大正十年一月七日午前越後赤倉温泉香雲館を發し、田口驛より鐵路豊野驛に向ふ、天氣晴朗上越信國境の連山雪に輝きて美し。豊野より自動車を飛ばし、澁温泉に到り津幡屋に投ず、我等一行三名、草津スキー俱樂部々員四名。同八日午前七時十五分出發、余等三名は平均約二貫五百目入りのリュックサックを背負ひ、クリエソフエルト式スキー及藁杖を携ふ、約一時間程にして、波坂にかゝりスキーを穿つ、時に粉雪霏々として降り來りたれども二基米を透視し得るに安んじ發行を始め、午前九時二十五分杳打茶屋著、此附近積雪凡三尺、北西方より風あり十五分休憩の後縣道に從ひて飽くまで進む琵琶池附近雪深く、風亦漸く強くなる、草津スキークラブ部員は六日遊に向ふの時平床ノ原より天狗岩上の一山を越え危險を避けたりと雖も此日一行は道路を直ちに進みしに雪崩の時期ならざれば可及的安心して通過し得らるべきを知りたりき、天狗岩を過ぎ平床ノ原に上りたる處、角間川に近付けば無慮二百

羽の鴨水邊より群れ立つを見たり、やがて熊野湯の小屋に對するに至れば降雪稍々止み、南西に笠ヶ岳聳立するを望む、なほ進めば硯川の小屋あり、南東の空は黒き横手山に遮らる、小屋に入りしは午後零時半、火を焚き中食を濟まし正一時再び結束して立つ、之より氷雪美しき針葉樹林の間を縫ひて登り漸く横手に來れば風は益々烈しく吹雪の感あり、眺望皆無なりしを甚だ遺憾とす、横手通りに一二ヶ所通過に注意を要する箇所あり、斯くて澁峠頂上海拔二千百七十二米の地に立ちたるは午後三時三十分、休息の暇あらせず直ちに下山、本年は積雪少く灌木所々に現れてステミング意の如くならざりしも間も無く芳ヶ平に下り、一溪を越えて再び滑降に移れば、時しも殺到し來れる烈風の爲、表面の積雪は悉く飛散し頗る危險となる一行相呼應し漸く常布瀧道の邊に來れども天候益々險惡、アリノトヲタリ通過の際には殊に不安を感じたりき、谷澤ノ原にて日暮れ、丸木橋を渡れば、草津町より出迎ひの人々追々に集り來り一行の無事なるを喜ぶ、スキーは谷澤の手前より脱して歩行し、午後六時卅分に到りて草津望雲館に安着せり、此行芳ヶ平より以下は氣温頓に低下して馬油を塗布せる靴皮總て固結するを見たり。此行によりスキーによる冬の澁峠越えは時間の餘裕を十分に見積置けば適當にして且愉快なるものと認む、但澁温泉よりするは上り長ければ、草津よりする方可ならんか、或は又之を二日行程に分かち、硯川の小屋又は熊ノ湯に一泊すれば頗る容易なるべし、然れども信州側に平原的地貌少からず又上州側に芳ヶ平附近の如く天候激變の際安心すべからざる吹き通しの地あるはスキーランナーに取りて面白からざる所也、危險の簡

所は芳ヶ附近を第一とし、上記アリノトタリ、天狗岩、及横手通

りの小部分なるも、概して憂ふる程の事なし、又濫峠が二千米を出づる事二百米に近きにも拘らず、アイスクリーパーを用ふるの煩はしきもなく、又新雪ならば滑り止め用海豹の皮を強いて用ふるの要なかりしは意外とすべし、以上只一回の通過によりて臆断するの愚は重々避くべきものなりとはいへ、從來此種の登山の記録絶無なりしにより、多少の參考迄私見を述べて有識者並に經驗家の批評を乞ふ次第也(大正十年一月九日上州草津にて沼井鏡太郎) △とうとうシヤモニーに來たした、二週の暇を貰つたのです。一人て昨朝着いたのですが、素敵な天氣にモン・ブランを目の前に仰いで喜んでおります。丸で氷の塊です。今日はメール・ド・クラスを見ました、氷河も此邊は未だ一向六ヶ敷くもありませんでした、少し足ならしをしてから山登りをしたいと思つてゐます。先づ上高地が素敵に開けた所の様なものです。(一九二一・七・二九、シヤモニー、サヴオイホテルにて日高信六郎)

△二日がムリでモン・ブランに登りました。ガイド二人の間にくゝりつけられて。途中で一泊、昨朝一時半出發、九時に頂上着。えらい風で吹き飛ばされさうでした。下りは別の途を取つて午後六時過り着きました。萬事頗る簡單です、用意もいらず、食料は小舎(ホテル)で得られ、其他の道具はすつかりシヤモニーにありました。

金さへあれば、そして天氣さへ好ければ何でもありません。頂上の近くでは流石に息苦しく、少し上ると休み度になりました。寫眞を撮りましたから出來たらお目に懸けます。(一九二一・八・八、

シヤモニーにて日高信六郎)

△拜啓小生社用にて去る二月中旬以來北見國宗谷郡中鬼志別市街地に滞在致し居り今度所要の爲種内方面へ小旅行の途中増幌原(マシポイ)小字イチャナイより此小信を差上げ候。中鬼志別は現今宗谷線の終點鬼志別驛の所在地にてオコツク海岸の鬼志別の舊市街地を西に距る一里弱、丘端の湿地オヌシユベツ川をはさめる昨年來の新興地にて旅客の來往少なからざるも市況沈滞氣の毒の狀況に有之候、該地に參り候頃は海岸は一帶に流水に閉され居り景觀實に荒涼たるもの有之候が今や流水全く去つて雪猶深きも春は訪づれ來り候。やがてこゝ半月もたてばせゝらぎには水芭蕉の水々しい若芽を見らるべく樂み居り候が雪を踏み固めた道路は暖氣に融け初め湿地の滯水と混じり行歩時には膝を潤すには閉口に有之候。此邊一帶の平坦なる低丘にて何等の景奇なく鈍色の針葉樹林は丘と濕原の一部に褐色の潤葉樹林は谷に續きその間半里に一月一里に三戸位の人烟を見るのみ寥々たる驚くの外無之候、森の彼方には宗谷の脊梁をなす一〇〇四〇〇米の低丘雪白の装ひ嚴かに連亘し「森の彼方の白い山」は小生の憧憬の對照に有之候。

四月七日稚内、増幌方面用件のため中鬼志別を發し建設中の鐵道線路を辿り宗谷脊梁山脈を通過して行程六里上登間最奥の部落曲木に一泊致し翌八日平凡極まりなき丘陵と濕原との雪路を更に六里増幌原野に出てイチャナイ澤の奥一里の農家淺野氏の宅に辿りつき候途中融雪甚しく時に下半身を雪水に侵したること有之候此行程は實に「森の彼方の白い山」の鞍部通過の最初のスプー

線路は百分の一勾配を以て極少許の切割を以て此鞍部を通過し居り此の間一帯に兩側の地形森林は貧弱なるも峠の兩側に聳立つ森林帯を抜けた高山——高度から云へば實に低丘に過ぎざるもその感じは頗る高山的なり云はゞ比較の見地に立つての感興的高山——は頂部假松の群叢點々双眼鏡裡に手に取る如く入り來り下部はがんび、ならの疎林よりエゾマツ、トドマツの領域に移行し居り候、峠に立てば南に新月の凸弧の如き平穩なる實感の山と北に山座の狭い尖峰とを最近距離に望み候小生のノートには「唯登り度くて登り度くて後髪引かるゝ思ひ……」と偶感を記しあり候。上登間の原野は肥沃、はあらざる由なるも平坦なる低丘と廣闊なる谷多く現今大いに開墾の業進み居り丘より丘に續くがんびの森は惜氣もなく伐り倒ほされ居り候それは大抵、墜閑、稚内方面の新炭料に仕向けらるゝを以て偉大なる天然の藝術的作品は薪としては一敷（五尺に六尺に三尺）山元で一圓五十錢位炭十貫俵として一俵山元にて五〇錢位なる相場にて人類は自己の生存のための新たなる創作に努力致し居り候。その滅び行く森の木の間木の間に雪の利尻の尖峰隱見し居り何となしに小生は此の山に Mt. Channing の名稱を奉り置き候。九日快晴。今春最初の葉晴し。雪の上をイチヤンナイ澤とケナシボロ澤との間の丘陵を跋涉致候この邊は宗谷脊梁山脈の支脈の錯雜せる處にて最高部は二〇〇—二六〇米内外最高峰モイマ山には假松、チシマザクラ等を見他もいづれも林木成林限界線の内外に達しその最上部喬木林は Betula かならずんば Quercus に有之後者の如何なる種類なりやにつき大いに興味を引き居り候。（四月十日増幌イチヤンナイ澤

にて 竹内亮）

△十三日快晴。増幌イチヤンナイを立ち、稚内へ参り候。途中ルエラニ山道の峠迄往復二里の寄道をして斷崖の直下に貧しい漁村を見下ろす雪消えのこけもゝの密生したスロープに座して小一時間利尻山に眺め入り候。ほんとうに春らしい静かな海面に遠く右手にレブンシリを従へた利尻の島が銀色に映えて浮び居り候。只今雪消にて村落は雪水に湖水の如く、町は鳥糞と塵と泥との海、不快甚し候。（大正十年四月十四日稚内にて竹内亮）

△拜啓。四月十六日北東の強風を正面に受けて寒雨の中を稚内より宗谷岬の突端を迂廻して尻白に一泊致し候途中稚内より三里の邊より約三里に亘り海岸に砂丘上に奥をトドマツの純林に限られたるナラガシハの壯大なる純林有之人烟全く絶えたる處ながら非常の興味を感じつゝ通過致し候宗谷岬邊の海岸段丘のスロープは雪殆んど消えフクジュソウの黄花散點致し居り候。

十七日尻白灣直ちに段丘上に上り臺地を一直線に横過し澤に下り又臺地を上り約一時間半を費やして半島部の秀峯マイマ山（一八六米）に登り候山上片狀の岩片露出し笹短く枯れほうけたるウシノケグサ・エゾオホバコ等には昨日の雨水結して水晶細工の如く三等三角點の樽殿然と寒風にさらされて立ち居り候雨雲に三六〇度の眺望は絶望下山時前知來別を経て鬼志別停車場へ歸着致し候。（鬼志別停車場にて竹内亮）

△拜啓。六月十三日は北大の平井、並河、武田、枅内諸氏の驥尾に附してシシヤモナイから樽前に登り覺生空澤を下り錦多布に出で多年の宿志の一端を達し候。

十五日北見遠輕方面出張の途サハロ岳の英姿にたまり兼ね新内驛に下車登山致し候午後二時四十五分驛を發し石切場(花崗岩)を経て四時廿六分山頂に達し候一等三角點あり。

コケモ、ミツバアウン、ツマトリサウ、チシマフウロ等多く實に心地よき山に候眺望は豫期の通り壯大に候もオプタシケ大雪山一帯は雷雲の爲め残雪のスロープのみ見えしに過ぎざりしは残念に候。下山は六時十五分に山頂を發し七時五分停車場に着し申候。とにかくこの山は高山觀望地として登降極めて容易かつ植物も面白く候へば一遊の價値有之候。(六月十五日十勝新内驛に於て竹内亮)

△今度三峠山登山を思立ち一昨夜々行にて大月驛に下車直ちに馬車鐵道にて小沼に至り少憩の後本道より登山致し候が途中新緑滴らんとし所々に紅紫の躑躅入り亂れ見事に思ひ候、頂上にては雲の往來あり遠望はなく甚だ残念に思ひ候歸途は西側の尾根縱走船平に下り吉田より山中に至り福野の景を賞しつゝ須走を通り御殿場に出て今朝歸宅仕り候「山岳」にて達磨石より二十分程にて百地巖尊ありとはあの本道に沿ふて登ればいくら健脚家にて少しは時間を要すと思ひ候。(五月廿三日岩永信雄)

△去る九日夜上野驛出發、翌朝未明輕井澤下車、峠に至り、權現社殿の背後より尾根傳ひに鼻曲山に登り申候、鼻曲山は中々面白き山相の山にて眺望も廣闊に候、日光群山、奥上州の尤物は殆んど全部望み得べく、小生の參りし時も四阿、岩菅、赤石、白砂等を初め遠く平ヶ岳至佛附近迄手にとる如く眺められ大いに満足致候、頂上附近に「小天狗」と大書したる小石祠存し寛永二乙酉の

文字を認め申候、天狗の鼻の曲れる如き形より山名を得たるものと存せられ候、最初は淺間隱山迄行くつもりなりしも雨の至るを恐れ一四一一米の峠の一つ南の峰より二度上げに下り例の悠長極まる輕便鐵道の御厄介になり、輕井澤三時發の列車にて歸京仕候、峠よりの山稜傳ひは道もあり眺望もよし、一日の山あるきに適せる様存じ候。(大正十年七月藤島敏男)

△謹啓。小熊博士夫妻の驥尾に附し荆妻を伴ひてマクカリマブリの登山を試み候。七月十四日午前九時三十四分發の列車にて札幌を出發、午後一時半比羅夫驛に下車。暑い道約一里を辿りて山麓の蝦夷富士登山會事務所に到着したるは三時頃と覺え候。荷を置くもそこへにして半月湖に下れば、高山万次郎老人は新造の家形船に客二名を乗せて湖心にあり、一行の姿を見て船を岸に寄せて乗船を奨められ候へば直に船中の人となり候。半月湖は火口湖の由にて周圍は急峻なる斜面に圍まれ、瀾葉落葉樹密生致し居り候へば秋期は紅葉甚美しく候。蝦夷富士登山會は之を養魚場となし鯉鮒の類を放養致し候へ共、面積狭小なると餌料の十分ならざる故に候にか、結果はあまり好良ならざる様に候。湖中にはエビモの一種 *Panageton prelongus* 繁茂し之が枯死する時は水中の酸素は殆んど絶無に近き迄減少致す由に候。湖畔にて淡水産海綿の一種を採集し、之を撮影など致す内幕色漸く迫り、メンドロロン(即ちミヤマセウビン)林間に奇聲を發して飛翔するを見るに及んで屋内に入り候。十五日早朝出發の筈の處、高山氏湖上に船を浮べて洗面に便せらるゝ等ありたる爲め、時刻意外に移りて七時頃發程致すことゝなり候。一行は北海大學豫科生を交へて五名、各自に

行厨やら燗詰の麥湯などを背負ひ、小生は其上に重き寫眞器と金
 應製の三脚、乾板三ダースとを携へたれば、可なりの重荷なりしも
 勿論平常の旅行キットよりは輕裝に候。坦道を行くこと半時許り
 にして駒返し鳥居に至り、これより急に山腹を之曲して上り、
 遂に山頂より比羅夫に向つて牽く長大なる尾根上に出で候。此の
 邊より樹叢を透して下界の眺望可なれ共、概して平原を下瞰致す
 なれば左までは美はしからず候。登山路は此の山脊を眞直に頂上
 目がけて上るなれば、甚しく無趣味にて加之ネマガリザ、の下を
 這ひ、赤土の急阪を攀づるなど婦人連には中々の難事らしく見受
 けられ候。漸く上りて瀧木帯に達し鳥居ガンビなどと銘打つたる
 エゾノタケカンバの幡風せるものなど見行く中、濃霧起りて眺望
 絶え、只路傍のハヒマツツヤイハツツジなどを奥深く見るとな
 り候。やがて五十三曲りとやらにかゝり草本帯に推移する頃とな
 れば、谷を埋むるシラネアフヒの殘花、チシマフウロ、クルマユ
 リの愛らしき姿に目を慰めつゝ、いよゝゝ御花畑にかゝり、強風
 に戦ぐミヤマオダマキ、紅紫のエゾノツガザクラ等に夾まれたる
 小徑を辿りて、午頃小屋に到着致し候。此處は蝦夷富士登山會の
 休憩所にて、初は其模可なり廣大なりしも、修理耐久等に意を注
 がざるが爲め、年々積雪に壞倒破損して『一文吾み』の實例を示し
 居候。本年は六十四才の老翁と六十一才の老媼とが小屋番を致し
 居り、小生等の登山の爲め修理を急ぎ居る處に候。一行は風と霧
 とに震へつゝキバナシヤクナゲの間に立ちて記念撮影を試み候
 も、濃霧にレンズ曇りたる爲めか乍遺憾不結果に終り候。勿々小
 屋に戻りて燗詰、漬物、孔雀の卵等山海の珍味に中食し、霧を冒

して山嶺に向ひ候。路傍先づ人目を牽くは枯死せるハヒマツツの狼
 籍たるにて、こは山火の爲め熱く焼きつくされたるものゝ由實に
 悲惨の極に候。此の山にて美しきはキバナシヤクナゲ、エゾノツ
 ガザクラ、ミヤマヲダマキの群落にて、其量極めて豊富に候。又葉
 に紫斑點々たるハクサンチドリも珍らしく候。頂上に近づくに及
 んでメアカンキンバイの黃花美しく砂礫の間に咲き居り候も強風
 の爲め寫眞も出來ず残念致し候。山頂の小祠に名刺を残し、濃霧
 淡々たる大噴火口を割愛して小屋に戻れば、今日の山開きの式を
 行はんとて、山麓より來れる神官と之に附隨せる小樽新聞記者及
 び小學校訓導某の三名ありて、今宵は此の小屋に一泊致す豫定の
 由。小生等は倉嶽下山の準備をなし小屋を後にせるは三時十分
 に候。先づ星ヶ池を訪はんと左折して小徑を辿りしも濃霧激しく
 して徒に時間を空費せんことを怖れて引返し、登路を下り初候處、
 小熊若夫妻と豫科生とは急に豫定を變じて山頂に一泊することゝ
 なり、小生等兩名は時日に餘裕ありしも設備なき山上に宿泊する
 の苦痛を思ひて下山に決し、急行二時間と十分にて山麓の事務所
 に達し、小憩して荷を整理し、六時此處を發して比羅夫に向ひ、
 同五十三分發の列車にて小樽に赴き、北海屋ホテルにて夜食の上
 十一時半歸札仕り候。要するに蝦夷富士は登降に便利と申す丈け
 にて趣味少き山に有之候、登山會は登山料を徴收するに反して山
 上の小屋の設備など少しも留意せず、道路の修復にも意を注がざ
 れば、登路は荒廢するが儘なるは遺憾に候。加之夜間の登山を奨勵
 して提燈を賣りつくる爲め、山頂にて山火事を起す患無しとせず、
 其の爲めハヒマツツ初め高山植物の滅滅を招くは痛嘆す可きことに

候。而も之を天然紀念物保護地として指定し乍ら、何等の施設を試みざる御役人共の愚も亦嘯ふ可きものに候。(大正十年七月 札 幌にて 武田久吉)

△今年は始めから手違ひのみ多く日程捗どらず閉口致し候。七月十六日の夜行で甲府着、十七日朝飯澤に居る筈の宗平を捜し候へ共見當ず(手紙延着の爲)正午近くになつて出發、この日は西山峠デツ頂の茶屋泊り翌朝漸く宗平に遭ひ、十八日は西山温泉にて人夫其他の仕度などを爲し十九日發デツ峠から大井川へ下る豫定を變更し、雨畑へ出て泊り。二十日沢ヶ岳の途中で夜營し。二十一日沢ヶ岳へ登り、伐材小舎へ泊り。二十二日倉澤の尾根を大井川へ下り、聖澤の支流日影澤の小舎に着き、夕立にて暫く休み、四時頃から聖澤へ入り、最下の小瀧の上に夜營。二十三日は聖の大垂直下二十數丈を見て、その約二丁程下にて大雨に遭ひ、前進することを得ず、午前中なりしも滞在。二十四日午前十時に到つて雨歇み候間、午出發、大垂附近險惡の爲尾根を廻り大垂の七八町上へ下りそれから大垂の少し上まで下つて見、又引返して上流に到り、上の瀧十數丈を見てその下の澤の曲り目の處の河原に夜營致し候。こゝには大きな岩屋あり十數年前獵師が夜營せし形跡有之候。廿五日夜來の雨歇まず、一日滞在を餘儀なくせられ候。廿六日は又右岸の尾根を絡み、最上部にある瀧二十丈位のものをロープに縋つて見に行き、それから又澤や尾根を絡み、源流に出て候處上流の出合附近惡しき爲、左方の澤に道を取つて正午聖岳の絶頂を極め二時頃に聖平(?)にある小舎に歸り、國境の鞍部を越して遠山川の源流東澤へ下り候處、日正に暮れんとして大

雨到り、崩岩奔川の狭谷に僅かなる岩間の平地を選び、濡れたるまゝ谷川の飛沫を浴びて悲酸なる夜營を致し候。天候が心配なると寒さ甚だしき爲一夜碌々寝られず。幸に廿七日小降りなりし爲谷の中をのみ前進し、漸く西澤渡に出て、それから重に右岸を降り、正午深き徒渉を四五回にて易老渡に着き候。易老渡から兎洞迄の道は惡絶險絶と云ふも大言にあらず。二十年前伐採に入りし時の道今は全く廢類して用を爲さず、急峻なる崖側へづりに危險を感ぜしこと屢々にて候。兎洞から北又澤のドまで降り、遠山川の最奥の寒村大野へ出て泊り。翌二十八日は山路十二里程を強行し信州飯田へ出て二十九日辰野から歸京致し候。

此行最も感じ候ものは聖澤の立派なることに候。南方獨特の大森林の中を高聳せる岩壁の間から進り出でる聖の大垂は勿論其上にも廿丈近く大瀑布二ツあり其他無數の小瀧かゝり居り候。岩壁壯大にしてガレ殆ど無かりしは望外の見物にて候ひし。

聖澤の右岸の尾根上が緩やかなりしこと。源流地山懐に國境に連らなる二十町四方位の平ありしこと。遠山川の道が意外に險惡なりしこと。それから最も感興をそゝりしものは遠山川最奥の部落大野附近の景趣に候遠山川は上流谷皆甚だ長大なる爲對岸を繞る國境の連山を頗る遠大に悠美に望み見ることを得候。朝霧の間から仰ぐ聖岳、上河内岳から加々森山附近に到る大岳が、遠く遮るものなく、高く悠々たる姿態を望みしとき、小生は遠山の里と云ふことの故なきにあらずとこそ存じ候。(大正十年七月三十一日 冠松次郎)

△七月十六日夜上野發、十七日柄尾又温泉泊り。案内人夫を交渉

せしも懸ずる者なく、十八日輕からぬ荷を背負つて一行三人枝折峠に登り駒ヶ岳に向ひ候、十九日正午頂上に達し大湯より登られし附屬中學の一行に出會ひ申候、その日は中ノ岳北方の鞍部泊、二十日中ノ岳頂上にて炊事に手間取り午後一時發、霧の中を兎に向ひ候、昨年兎より中途二時間位ならんとのお話なりしも、例の厄介極まる俣橋、根曲竹等の所々盤居するありて、可成奮闘したるも思ふ様に拂らず四時間半を費し兎岳頂上直下の鞍部に達し幕營、二十一日早朝兎岳頂上に達し美晴に乘じ南方昨夏の山旅の跡を一眸の下に收め申候、豫定は兎岳より灰又山を経て荒澤山を極め荒澤と蛇子澤との間の尾根を下る筈なりしも、尾根傳ひに倦きたる爲め北又川を下り、シツカイ澤より荒澤山に登ること、し谷に下りたるに豫想外に險惡にして殊に本流に出で、よりは小規模ながら廊下の如きもの連續し、石抱橋附近に出づる迄に溪谷中に二泊するの餘儀なきに立至り残念乍ら荒澤を斷念し、二十三日午後二時折柄の夕立ちに濡鼠となりて栃尾又温泉に歸着、二十四日東小千谷に出て夜行にて歸京任候、駒、中の豪壯なる山容、豊富なる殘雪、兎岳より見たる利根川水源地方の複雑せる山雲、北又川の險相など深き深き印象を受け申候。(十年八月藤島敏男)

△七月末兩日の休みを利用し木曾駒を上松より登り、伊那に下り申候、頂上よりの眺望は無類にて、殊に白峯赤石兩山脈は極めて近く北は駒ヶ岳より南は光岳附近迄ズラリと立並び中々壯觀に候、秩父の西平、八ヶ岳、淺間、美ヶ原、常念山塊、槍、穂高、笠ヶ岳、乗鞍、御岳など手に取る如くに候、名山だけに道のよきこと驚く程にて極めて呑氣に歩き申候、中腹附近の森林頂上附近の高

山相、農ヶ池など氣に入り申候へども頂上にて車座になり赤玉ポトワインを抜いて騒ぐ連中に會したるは聊か興醒めたる心地致候(八月六日藤島敏男)

△大正十年七月十四日午後十一時新宿發。十五日甲府―鵜澤―西山。十六日人夫雇用の爲滞在。十七日午前九時西山發―奈良田―大門澤下流丸十小屋泊り。十八日午前七時三十分發、澤に沿ひ其儘直に農島ノ尾根―農島岳を超えて鞍部凹地に野營。夜中寒氣強十九日午前七時、天幕其他を其儘、間岳―北岳―間ノ岳―野營地。二十日凹地より直下東俣に下り澤傳ひに小廣河原―一泊。二十一日小廣河原―北荒川岳―鹽見―北荒川―小廣河原。二十二日小廣河原―東俣下り―笹山―奈良田―西山。二十三日西山―青柳―甲府―東京。

以上の如くにて案内者は奈良田の獵師深澤正重、外人夫二名を引連れ候農島の尾根にては後より來りし人夫二名土地不案内にも拘らず不注意をせし爲約四時間程行方知れずお蔭にて夕暗の農島尾根にてマラソン競争をさせられ閉口致候天候は終始快晴遠く北アルプス方面迄指點し得られ候案内者深澤正重は此の邊の山は可成り明く案内者としては良好に候も健脚に任せて我々を置去りにするには閉口致候東俣下りの際の如きは再三進退谷まり候。(大正十年八月前川滿壽雄)

△申しおくれましたが私事、八月七日伯耆大山驛より尾高を經、大山寺に一宿いたし、八月八日朝三時、阿彌陀堂のわきから大山のぼりました。七時ごろ頂上につきました。頂上へゆく少し手まへの途を右へいつた所に新に小な石室が出来てゐました。尾根

はまだありませんでしたが、そこで露管も出来さうです。隠岐も出雲も、よく見えました。かへりには十丁めといふ所からちがつた路をおり、河原において寺にかへりました。

十月の十二日に那須の湯本にゆき、松川屋にとまり、十三日、雨中を茶臼にのぼりました。數年前いつた時より硫黄とる事が盛んになつておりました。そのころより硫黄も多く出るのでせう。紅葉がようございました。三本槍へとおもつたのですけれども、雨でそれどころでありませんでした。でも山は立派でした。(十月二十三日別所梅之助)

△拜啓。小生去る八月十五日會員織田信大氏其他同行二名と共に八ヶ岳へ佐久方面より登山可仕、午後十一時三十分上野發、翌朝小諸にて佐久鐵道に乘換、午前八時二十五分小海着、佐久甲州街道を行く途中、釜掛邊にて驟雨に出遭申候、松原湖へ急ぎ、稻子に至りて暫時休憩致候。當今は佐久鐵道も小海まで延長され又稻子には、タバタ礦泉と申す旅舎開業致居八ヶ岳登山者の爲め案内及人夫の世話等の勞を執る由、共に此方面に於ける登山者には便利と相成候。稻子にて晝食の後山麓の路を爪先上りに登れば、雨中の情調一入に有之候。纏て針葉樹林に入る頃降雨烈しく相成、殊に小生の大禁物なるブトの襲來には一層辟易致懸命にて本澤温泉へ着候。翌十七日も天候不良にて豫定を變へ午後より夏澤峠より硫黄岳へ散策致し夕暮本澤へ戻候。本澤には登山期中(三ヶ月間)臼田小林區署囑託の山番、出張致居投宿者に別紙印刷物(高山植物採取を嚴禁せるもの)を配付申候。又毎日或は數日毎に岳へ登り山草の採取者を巡視し、許可證無き採取者を告發なす等、中

々嚴重に取締居候。翌日も天氣恢復の見込無之候へ共、露間を伺ひ午前八時過本澤を出發、宿の前なる澤を涉りて、硫黄岳の北東を迂回する登路を辿り、午前九時四十分、此岳の東肩邊へ登攀致候。山頂に於ては雲霧のため四邊の眺望を閉され、東方に當り僅に雲間より富岳の頂と金峯方面の山頭を覗き得たるのみに御座候。大ダルミを経て横岳の山脊を傳ふ頃より刻々天候險惡と相成、驟雨も頻に襲ひ來り候へば下山申事と致候。尤も赤岳には割合完全したる石室の設備も御座候へ共、小生等山頂宿泊の準備を缺き居り不得已、午後一時三十分赤岳に到着く鞍部の邊よりミノト澤へと下り行者小屋へ着したるは、午後三時に有之候。それより粗原へ出て、美しき草花に彩られたる裾野を過ぎて泉野村を經、茅野驛に至りたる頃は全く夜に入り申候、十九日午前九時廿六分發飯田町行にて歸宅致候。(八月廿六日星野光之助)

△今夏は沼井鐵太郎君等と共に長次郎をつれ稱名川より大日連山を通り鯉尾根縦走三窓迄到りこれより黒部別山内藏助平を通りて大汝に出て室堂より順路針の木峠を越え大町に到着し候處天氣も割合に好都合にて愉快なる旅を續け得て満足に思ひ居り候殊に黒部別山より内藏助平附近は神秘的なる感に打たれ印象を深く致しこれより又大町を出で矢澤を經て爺ヶ岳に登り鹿島槍の方迄赴かんと思ひしが天候思はしからず扇澤を下り大町に出て候が扇澤の合流點よりの道は朝香宮殿下御通過の後にて殊更に氣樂に候。

(大正十年七月 岩永信雄)

會報

○第十五回小集會記事

本小集會は大正十年九月十八日開催の旨前號の誌上に豫告せしも、會場の都合に依り、九月廿五日麴町區清水谷皆香園に於て、午後一時より開催、左の講演ありたり。

一、赤石山系横斷聖澤より遠山川迄 冠 松次郎氏

本年夏の旅行に於て氏は雨畑より笹ヶ岳に登り、大井川の谷に下りて其支流の中最も險阻なりと稱せらるゝ聖澤を遡り、遂に其水源を究めて聖岳の頂上に立ち、更に遠山川の一流流に沿ひて西に下り、西澤渡、易老渡を経て大野に出てられたるが、其間雨の爲に苦しめらるゝこと一再に止まらず、意外に多くの日子を費されたりといへり、本講演は即ち當時の旅行談にして、聖澤は勿論殊に遠山川方面の叙述は來會者を益すること大なりき。

二、中ノ岳 藤島敏男氏

今夏氏が枝折峠より駒ヶ岳に登り、尾根傳ひに中の岳を経て兔ヶ岳に至り、北又川の源流を下りて再び枝折峠より栃尾又に歸著したる旅行に就て、詳細に述べられ、それに據れば駒ヶ岳より中ノ岳に至る間は思ひしより樂なるも、中ノ岳と兔岳との間は、氏が昨夏兔岳の頂上より見て大略二時間餘の行程と想像せしに、藪甚しき爲四五時間を要し、北又川の上流も懸崖瀑布多く、可なりの困難に遭遇したりといへり。尙ほ氏は此地方に於ける山岳の特色に關する自己の觀察と感想とを語られ、六時講演を終る。

當日の來會者は辻本滿丸、高橋鑑三郎、吉岡八二郎、神谷恭、今村巳之助、伊藤新三、小柳半二、松井幹雄、中戸川秀一、藤島敏男、村越匡次、久野政雄、六鶴保、小林修明、高田達也、青木軍二郎、伊藤朝太郎、黒田孝雄、前川滿壽雄、岩瀬勝治、井染道夫、郷郁三郎、志村寛、岩永信雄、沼井鐵太郎、冠松次郎、武田久吉、高頭式、木暮理太郎の二十九氏にして、他に三名の會員外來會者

ありたり。

○第十六回小集會記事

大正十年十一月六日麴町區清水谷皆香園に於て午後一時半、武田幹事司會者として開會、左の講演があつた。

一、黒部別山と内藏助平 沼井鐵太郎氏
先づ稱名川の畔より大日岳の連嶺に登られたことから説き起して、尾根傳ひに劔岳への縦走、劔澤の支流梯子谷から黒部別山の登攀、それから内藏助平に下り、内藏助澤を上りて立山の富士ノ折立に出て、針木峠を踰えて信州大町到着といふ順に詳しく話された。就中黒部別山の眺望の一段に至つては氏の鼻高きこと劔岳の頂上と孰れどと思はせたが、恐らく普通の登山家は誰れも二の足を踏んでゐた此山に登つたのは氏が始めてであらうから夫も無理はあるまいと思はれた。和田村の宮本金作は以前獵師をしてゐた時分には、能く内藏助平へ來て一週間十日と狩り暮したさうだが、其處には昔佐々成政が隠れてゐたとか言ひ傳へのあ

る、内藏助の岩窟といふ二十人も泊れる洞穴があることを話した。同人を案内者として連れならば一層面白かつた事であらうと思はれる。

二、那須山と鏡沼 武田久吉氏

會員藤島松本の二君及他に二三の同志と共に那須の茶臼岳に登り、山稜を北に縦走して途中一泊、翌日甲子温泉に下り其日に歸京しやうといふ計畫であつたさうであるが、雇つた人夫が人夫の用をなさず、且つ三本槍岳以北の山稜が偃松其他のひどい藪なので、鏡沼まで辿り着くに非常な時間を要した爲、流石猛者揃ひの一行も此藪に避易して、鏡沼から大峠の路に出て、氏と松本君とは藤島君其他に別れて三斗小屋温泉に一泊、明れば沼原より板室に出て歸京されたといふのが氏の講演の大意である。鏡沼の主が盲の龍であつて、其の盲になつた説明も一寸人の意表に出てゐるのはおもしろい。例に依つて四十餘枚の寫眞を陳列されたのは、一段の興味を添えた所以である。

當日の來會者は、別宮貞俊、沼井鐵太郎、石井鶴三、岩永信雄、加山龍之助、松本善二、高田達

也、伊藤新三、黒田孝雄、伊藤朝太郎、井染道夫、神谷恭、松井幹雄、石川孟範、木村鑛畝、冠松次郎、惠澤福三、志村寛、六鶴保、久野政雄、武田久吉、梅澤親光、木暮理太郎の廿三氏で、他に五名の會員外出席者があつた。

○會務報告

大正十年九月二十五日清水谷皆香園に於て評議員會を開き本會事務所及び事務擔任者に關する件を協議し、尙規則の一部修正を議定す。

同日同所にて開きたる幹事會に於て會員志村寛氏に書記を囑託することを議定し、終りて入會申込の詮衡を行ひ十五名入會許可さる。

(出席者) 木暮、近藤、高野(委任)、高頭、武田、辻本、辻村、梅澤。

十一月六日同所に於て入會申込者詮衡あり、五名入會許可されたり。

(出席者) 木暮、武田、梅澤。

○本會規則改訂

大正十年九月本會規則第九條を左の如く改訂す。

本會ハ事務ヲ助クル爲メ書記ヲ囑託シ又一地方ニ關スル特別ノ事務ヲ處理セシムル爲メ地方委員を囑託スル事アルベシ書記及び地方委員ノ任命及び解任ハ幹事會ノ決議ニヨルモノトス。

○交換及び寄贈圖書

地學雜誌 第三百九十一、九十二、九十三、九十四、九十五號

ツリースト 第九年第四、五、六號

山とスキー 第一年第三、四、五、六、七、八、九號

史蹟名勝天然記念物 第四卷第六、七、八、九、十、十一號

アルカウ趣味 第八年第七、八號

日本婦人アルカウ趣味 第三十號

神戸櫻風會々報 第八、九、十、十一回

地質學雜誌 第三百三十三、三十四、三十五、三十六、三十七號

歴史地理 第三十八卷第一、二、三、四、五號

飛騨史壇 八月號

大橋圖書館第十九年報

(厥文圖書は英文附録に掲載せり)

○本會員名簿

本號には會員名簿を附して全會員に頒布した
り。

○本會規則 (大正十年九月改正)

- 第一條 本會ヲ日本山岳會 (Japanese Alpine Club) ト名ク
 第二條 本會ハ山岳ニ關スル研究ヲナスヲ以テ目的トス
 第三條 本會ハ第二條ノ主旨ニ基キ機關雜誌『山岳』ヲ發行ス、又
 時宜ニヨリ別ニ臨時又ハ定時ノ出版物ヲ發刊スルコトアルベシ
 第四條 本會ハ每年大會及ビ小集會ヲ開ク
 第五條 本會ハ會長ヲ裁カズ幹事若干名ヲ置キテ一切ノ會務ヲ處
 理セシム
 第六條 本會ハ別ニ評議員ヲ置キ重要ナル會務ニ參與セシム
 第七條 幹事ハ會員ノ選舉ニヨリ評議員之ヲ決定シ其ノ任期ハ三
 箇年トス 但シ再選ヲ妨ゲズ
 第八條 評議員ハ本會發起人、幹事及ビ元幹事ニシテ現ニ會員タ
 ル者ヲ以テ之ニ充ツ
 第九條 本會ハ事務ヲ助クル爲メ書記ヲ囑託シ又一地方ニ關スル
 特別ノ事務ヲ處理セシムル爲メ地方委員ヲ囑託スル事アルベシ
 書記及ビ地方委員ノ任命及ビ解任ハ幹事會ノ決議ニヨルモノト
 ス
 第十條 本會員ヲ別チテ正會員及ビ名譽會員トス、名譽會員ハ幹
 事會ノ決議ニヨリテ推薦セラルルモノトス
 第十一條 正會員タラント欲スル者ハ會員三名ノ紹介ヲ以テ住所

姓名、年齢及ビ職業ヲ記シタル申込書ヲ事務所ニ送附スベシ、
 但シ紹介者ノ一名ハ本會評議員タルヲ要ス (入會申込用紙ハ事
 務所ニ備付ケアリ)

- 第十二條 入會ノ許否ハ幹事會ノ決議ニヨルモノトス
 第十三條 入會許可ノ通知ニ接シタル者ハ直ニ入會金五圓ニ會費
 ヲ添ヘ拂込マルベシ
 第十四條 正會員ハ會費年金參圓ヲ毎年二月末日迄ニ納付スベキ
 モノトス、三月一日以後ニ納付スル者ハ特別取扱手数料トシテ
 金五拾錢ヲ附加スベク、尙三月三十一日迄ニ納付セザル者ハ之
 ヲ除名スベシ
 第十五條 正會員ニシテ一時ニ金百圓以上ヲ納付シタル者ハ爾後
 會員籍ヲ有スル間ハ會費納付ノ義務ナキモノトス
 第十六條 本會ハ會員ニ別ニ定ムル處ノ會員章ヲ貸與ス
 第十七條 本會員ニハ『山岳』每號一部ヲ頒布ス
 第十八條 本會員ハ幹事ノ承認ヲ經テ本會所藏ノ圖書ヲ閱覽スル
 コトヲ得
 第十九條 本會ハ會員ノ資格ナシト認メタル者ニハ退會ヲ命ズベ
 シ
 第二十條 會員ニシテ退會ヲ欲スル時ハ其旨事務所ニ書面ヲ以テ
 申出ツベシ
 第二十一條 會員退會ノ際ニハ本會ニ會員章ヲ返納スベシ
 第二十二條 本會會員ニシテ住所、姓名、職業ヲ變更シタル時ハ
 其都度必ズ之ヲ事務所ニ通知スベシ
 第二十三條 本會ハ既納ノ金品ヲ一切返付セズ

第二十四條 本會規則ノ變更ハ評議員會ノ決議ニヨルモノトス

現任幹事（七名）

木暮理太郎 中村清太郎 高野鷹藏
 高頭仁兵衛 武田久吉 田部重治
 梅澤親光

評議員（十四名）

城 數 馬（在朝鮮）小島久太（在桑港）近藤茂吉
 三枝守博 辻本滿丸 辻村伊助
 山川 黙 及ビ現任幹事七名

○投稿規定

- 一、會員は勿論會員以外の何人も投稿隨意のこと。
 - 一、用紙は大體半紙大又は半紙半枚大、天地左右をあげ、每紙片面のみに字體明瞭に認め、各行二十二字詰とし、每紙同一行數のこと。
 - 一、〃、〇、「」（ ）等は各一字劃宛とし、行を更むる時は一字下げのこと。
 - 一、地名には片假名を振り、漢字不明にして宛字をなす時は、其旨を括弧内に明記す可きこと。
 - 一、原稿は必ず左記宛て送付のこと。
- 東京市本郷區駒込蓬萊町三十一木暮方「山岳」編輯所
 編輯に關する用件は總て前記宛御照會のこと、殊に挿圖寫眞等

のある原稿は、其調製方印刷方に 就き一應御相談あらば幸也
 （スケッチは複製の際誤記脱漏等の憂あるを以て、豫め本誌面に
 適當せる大きに調製あらんことを望む。但し寫眞製版の目的を
 以て作製したるものは必ずしも此限りに非ず）。

會 告

一、御送金に對しては振替傳票着後遅くとも一週間以内には受領證差出すことに相成居候へば、必要の時日を經過するも受領證を入手せられざる向は念の爲必ず御照會有之度候。

一、返信を要せらるゝ本會宛の御照會は必ず返信料を添えて申越され度候。

一、宿所變更の節は速かに事務所宛御通知相成度候。

一、會員にして不幸死亡せらるゝことあるも其家族等よりして通知せられざる向も有之候に付御心付きの方より御一報被下ば幸甚に存じ候。

一、事務所移轉に際し混雜に紛れ會務に手落無之を保し難く候へば御氣付の點に關しては御照會を賜はり度候。

大正九年度會計報告

收入之部

會 費	一二九四・五八五
會 金	二六七六・〇三〇
入 會 金	一八五・〇〇〇

雜誌賣上代	六二三・七三〇
雜誌收入	二九九・九四〇
寄附金	一一二七・六〇〇
計	六二〇六・八八五

支出之部

基本金へ繰込	七〇五・〇〇〇
雜誌製作費	二六四八・八六〇
會員章製作費	五二六・〇〇〇
集會費	一七八・五八〇
事務費	六〇〇・三三〇
計	四六五八・九七〇

差引十二月卅一日現在高 一五四七・九一五

右は大正十年度會計に繰込む事とす

但雜收入は小集會々費、會員章再貸與手数料其他諸手數及預金子を含むものにして、事務費中には事務所費、編輯費、原稿料、郵税、集金費用等を含むものとす

右之通

會計 梅澤親光
 庶務 高頭仁兵衛

以上を帳簿と照して正しき事を承認す

大正十年十二月二十二日印刷
大正十年十二月二十五日發行

【定價金壹圓貳拾錢】

發行兼編輯者
新潟縣三島郡深才村深澤
高頭仁兵衛

印刷者
東京市神田區美土代町二丁目一番地
島連太郎

印刷所
東京市神田區美土代町二丁目一番地
三秀舍

發行所
東京市外下目黒六百五十四番地
日本山岳會
振替口座東京四八二九番



發賣所

東京市神田區表神保町
東京堂

THE SIXTEENTH ORDINARY MEETING

The Sixteenth Ordinary Meeting was held at the Kaikôen, Kôjimachi, on November 6th, 1921, presided by Dr. H. Takeda. The Following lectures were given:—

A Trip to Kurobe-Bessan and Kuranosuke-daira.....Mr. T. Numai.

A Trip to Nasuzan and Kagamiganuma....Dr. H. Takeda.

Twenty three members and five guests were present.

THE JAPANESE PART OF THE JOURNAL.

The principal articles in the current number of the Sangaku are:—

Climbing on Ski,	by Mr. K. Mushika,
An Ascent of Shiragayama, Shikoku,	by Mr. T. Yoshinaga,
To Mt. Akagi in Winter,	by Mr. T. Kuroda,
On the Guides in the Tamagawa Valley,	by Mr. T. Numai,
A Study on the Hyakufuji,	by Mr. N. Nakamura,
Utsukushigahara,	by Mr. R. Kogure,
Takami-ishi and Shirakomanoike,	by Dr. H. Takeda.
On a New Route of Mt. Komagatake, Kôshû,	by Dr. H. Takeda.

PLATES IN THE JAPANESE PART.

Facing page

- (121) Starting for an ascent of Nakayamatôge.
 (137) Upper—The snow-covered road from Kurohashi to Nakayama.
 Lower—Winter view near Nakayamatôge.
 (153) View North-west from Takamiishi. Beginning on the left,
 the peaks seen here are Tateshina, Cha-usu, Shimagare and
 Ôtake. Photo. by Dr. H. Takeda.
 (169) Above—Shirakomanoike seen from Takami-ishi.
 Below—Sainokawara visited by fresh snow.
 Both photo. by Dr. H. Takeda.

exhibited. The lectures were commenced at 6 P. M. in the large room on the second floor, on

The Ascent of Mt. Morrison, Formosa Mr. H. Shimura.

The Mountains where the River Toné rise from . Mr. R. Kogure.

Mr. Kogure's lecture was illustrated with numerous beautiful lantern slides. There were over 200 members and guests were present.

THE THIRTEENTH ORDINARY MEETING.

The Thirteenth Ordinary Meeting was held at the Kaikôen, Kôjimachiku, on April 17th, 1921, presided by Mr. Takano. The following lectures were given:—

On the Mountains and Japanese people . . . Prof. U. Bessho.

On the Establishment of the Japanese Alpine

Club Mr. T. Takano.

On the Mountains and Meteorology Dr. S. Nakamura.

Twenty members and three guests were present.

THE FOURTEENTH ORDINARY MEETING.

The Fourteenth Ordinary Meeting was held at the Kaikôen, Kôjimachi, on June 5th, 1921, presided by Mr. R. Kogure. The following lectures were given:—

Switzerland revisited Dr. I. Tsujimura.

The Mountains and Savages of Formosa . . Mr. H. Shimura.

Ôkatayama and the piano of Fujisan Mr. Z. Matsumoto.

Twenty-six members and four guests were present.

THE FIFTEENTH ORDINARY MEETING.

The Fifteenth Ordinary Meeting was held at the Kaikôen, Kôjimachi, on September 25th, 1921, presided by Mr. N. Takatô. The following lectures were given:—

An Ascent of Nakanotake, Echigo Mr. T. Fujishima.

From the Hijirizawa to the Tôyamagawa . . Mr. M. Kamuri.

Twenty-nine members and Three guests were present.

CLUB LIBRARY.

The following publications have been added to the Club Library since July, 1921 :—

- Natural History, Vol. XXI, No. 2, 3 and 4, 1921.
 Trail and Timberline, Nos. 33-38, 1921.
 Colorado Chautauqua Bulletin Vol. X, No. 7, 1921.
 L'Echo des Alpes, 57me Année, no. 5-8, 1921.
 Geographical Journal, Vol. LVII, No. 6, Vol. LVIII, Nos. 1-4, 1921.
 Bird-Lore, Vol. XXIII, Nos. 3-5, 1921.
 Mountaineer, Vol. XIII, Nos. 8, 10, 11, 12, 1921.
 Mid-Pacific Magazine, Vol. XXI, No. 6, Vol. XXIII, Nos. 1-5, 1921.
 Club Alpino Italiano, Rivista Mensile, Vol. XL, Num. 4-5-6, 1921.
 Alpina, Jahrg. 29, Nr. 4-7, 1921.
 Revue Alpine, Vol. XXII, No. 1-4, 1921.
 La Montagne, 17e année, No. 145-147, 1921.
 Bulletin of the Associated Mountaineering Clubs of North America, 1921.
 Butlleti del Centre Excursionista de Catalunya, Any XXX, Núm. 303, 304-311, Any XXXI, Núm. 312, 313, 314, 315, 316, 317, 318, 1920-1921.
 Bolletino della Sezione Fiorentina del C. A. I., Anno XII, N. 2-3, 1921.
 Svenska Turistiföreningens Årsskrift, 1921.
 Prairie Club Bulletin, Nos. 107-110, 1921.
 The Small Mammals of Colorado, publ. by the Colorado Mountain Club, 1921.
 Appalachia, Vol. XV, No. 2, 1921.
 Xalets refugis VII de Ter la Renclosa, publ. by Centre Excursionista de Catalunya, 1921.
 Butlleti de l'Esbart Folk-lore de Catalunya, Any 1, Núm. 2, 1921.

THE FOURTEENTH ANNUAL MEETING.

The Fourteenth Annual Meeting of the Club was held in the Tokyo Geographical Society's Hall, Nishi-Koñyacho, Kyôbashi, May 8th, 1921. The Exhibition room was opened at 10 A. M., and many interesting maps, books, pictures, and living alpine plants were

Geological maps are issued by the Imperial Geological Survey, at the scale of 1/200,000 and 1/1,000,000.

APPENDIX:

A List of the Peaks over 3,000 metres

In Hoshû (Main Island):

1. Fuji-san—3,778.
2. Kita-dake, of the Shirane Mountains—3,192.
3. Ainotake, of the same group—3,189.
4. Nôdori-san, of the same group—3,025.
5. Yarigatake—3,180.
6. Warusawa-dake—3,146.
7. Nishigôchi-dake—3,083.
8. Akaishi-dake—3,120.
9. Oku-Hodake-dake—3,150 approximately.
10. Ontake—3,063.
11. Arakawa-dake (or Shiomi-dake)—3,047.
12. Senjô-dake (or Mae-dake)—3,032.
13. Norikura-dake—3,026.
14. Hijiri-dake—3,011.
15. Tate-yama—3,010 approx.

In Formosa: (all in the Japanese “shaku,” approximately the English ft.)

1. Niitaka-yama—13,075.
2. Sessan or Silvia—12,829.
3. Shûkoran-zan—12,650.
4. Daisuikutsu-san—12,650.
5. Nankotai-zan—12,430.
6. Chûôsen-zan—12,174.
7. Kwan-zan—12,100.
8. Daisuikutsu-zan—12,028
9. Taisetsu-san—11,900. (the northern peak)
10. Kirai-shu-san—11,895.
11. Kirai-shu-san—11,625.
12. Daihasen-zan—11,499.

the other part of this System from the new volcanic tract. Besides there are groups of mountains extending from south of the Ôyodogawa to the southern extremity of the province of Ôsumi, then forming the Islands of Tanegashima and Yakushima, and further southwards the Loochoos which consist of paleozoic and mesozoic rocks and granite. The well-known peaks of the Kyûshû System are Ichfusa-yama, Shiraga-yama, Wanidzuka-yama, Yayegatake, the majority of which do not exceed a height of 6,000 ft.

The Tsukushi System covers the northern part of Kyûshû, and consists of a number of mountain groups, which are very much complicated in topography. Generally speaking the Imagawa, Kikuchigawa, and Matsuuragawa separate the volcanic tract from the other. The principal peaks of this System are Kamado-yama, Takara-san, Sefuri-yama, only a few of which reach an elevation of 3,000 ft.

The Aso-Tara Volcanic Zone occupies the area lying between the Kyûshû and Tsukushi systems and extends as far as Hizen Peninsula. The old caldera of Aso-san measures not far short of 17 miles in diameter and contains therein the Five peaks of Aso, which constantly emit enormous volumes of smokes. In this caldera basin inhabit nearly 50,000 souls. Other more famous peaks belonging to this Volcanic Zone are Tsurumigatake (an active volcano), Hiko-san, Bungo-fuji, Kujû-san, Sobo-san, Unzen-dake, Tara-dake, etc., none of which exceeds 6,000 ft. in height.

The Kirishima Volcanic Zone extends from the Kirishima mountains right down to the Daiton Volcanic Group in Formosa and the Pescadores touching on the way a part of the Loochoos. The principal peaks of this Zone are Higashi-Kirishimayama, Hinamori-dake, Shiratori-yama, Takakuma-yama, Sakurajima-dake, etc., the first two and the last named are active volcanoes.

The Formosa System forms the main axis of the Island of Formosa and runs from north to south. It consists of gneis, paleozoic and mesozoic formations, and granite, and contains numerous high peaks, over 40 of which are more than 10,000 ft. in altitude. The highest peak of this System is Niitaka-yama (or Mt. Morrison), which towers up to an elevation of about 13,000 ft. The next highest is said to be Sessan, the height of which has been estimated about 12,800 ft.

The above is a summary of the mountain-ranges of Japan. Detailed accounts of mountains of this country (and of some of abroad) appear in the "Sangaku," Organ of the Japanese Alpine Club. Scientific investigations of volcanoes are published from time to time in the "Bulletin of the Earthquake Investigation Committee." The most reliable maps are published by the Imperial Military Survey in the scale of 1/50,000 and 1/200,000.

springs in these districts, which greatly mitigate the fatigue of mountaineers. In recent years climbers have greatly increased in number, which has unluckily resulted in the deprivation of alpine flowers, the destruction of forests, the paucity of ptarmigan, thus greatly altering the primeval features of these mountains. However, electric lights or cars have, to our great relief, not so far found their way above 3,000 ft. level.

The Kii System traverses Kii Peninsula nearly transversely from east to west, and consists of paleozoic and mesozoic formations, and granite. Principal mountains are Ôdaigaharayama, the Yoshino mountains, Otônomine, Nachi-san, etc., of which a few rise above 6,000 ft. in height.

The Tamba Plateau is cut off from the Chûgoku System by the Yuragawa and Kakogawa, and consists chiefly of paleozoic formations, and in places granite and new volcanic rocks. It runs from north-west to south-west, and includes Hira-yama, Hiei-zan, Atago-yama, Mûko-yama, Maya-san, Yuragatake, etc., none of which exceeds 4,000 ft. in height.

The Shikoku System constitutes the main axis of the Island of Shikoku, running from east to west on the south of the Yoshinogawa and Shigenobugawa. The rocks are of crystalline schists, paleozoic and mesozoic formations, and a small amount of granite is also found. The principal mountains are Shôzan-ji-san, Tsurugizan, Ishidzuchiyama, etc., a few of which exceed 6,000 ft. from sea-level. North of the Shikoku System there are on the same island two groups of mountains. Geologists are of opinion that they originally belonged to the Chûgoku System, from which they were cut off by the Inland Sea. They are of mesozoic formations, granite, and new volcanic rocks, and run from east to west. The principal peaks of these groups are Goken-zan, Zôdzusan, Umpanji-yama, Takanawa-yama, etc., which rise to a height of about 3,000 ft.

The Chûgoku System occupies nearly the whole of Chûgoku, running on the whole from east to west. The rocks are chiefly granite, but gneis, mesozoic formations, new volcanic rocks are found also. Although its geography presents very complex features, only few peaks tower up beyond 3,000 ft. in high, the highest being the volcano Dai-sen, the altitude of which is over 5,000 ft. The well-known peaks of less height are Shosha-san, Ogi-yama, Senjô-sen, Sentsû-san, Sambeyama, Hôben-zan, etc.

The Kyûshû System runs from north-east to south-west, thereby forming the main axis of the Island of Kyûshû. Owing to violent eruptions of numerous volcanoes the original features of this System have been very much altered in places. The Onogawa, Midorigawa, Ôyodogawa, and the Hitoyoshi plain separate

down into the sea. It forms the highset district in Japan, and consists chiefly of paleozoic formations, also of gneis, mesozoic formations, and granite. The principal mountains of this System are Kôshû-Komagatake, Hôwôzan, Senjôgatake, the triple peaks of the Shirane mountains, Arakawadake, Akaishi-dake, Warusawadake, Hijiri-dake, etc., the majority of which rise to an elevation of well over 10,000 ft.

The Kiso System is cut off on one side from the Akaishi System by the upper course of the Tenryûgawa and of the Toyokawa, and on the other side from the Hida Plateau by the Kiso-gawa. It is chiefly of granite, and has in places gneis. The principal peaks are Kiso-Komagatake, which nearly reaches 10,000 ft., and Enasan, which exceeds 7,000 ft. in altitude.

The Hida Plateau occupies the district west of the Fuji Volcanic Zone, and is cut off from the Tamba Plateau and the Kii System by the railways running from Tsuruga to Maibara, Lake Biwa, and the rivers Yodogawa, Suzukagawa, and Kiigawa. The geological structure is of dissimilar character, consisting, as it does, of gneis, paleozoic and mesozoic formations, granite and volcanic rocks. The well-known peaks are Shiroumagatake, Washiha-dake, Kuro-dake, Yakushi-dake, Tateyama, Tsurugi-dake, Yarigatake, Hodaka-dake, Norikura-dake, Ontake, Ôtenjô-dake, Jônen-dake, etc., all of which reach an altitude about 10,000 ft.; among these peaks the most difficult to climb is Tsurugi-dake. Mt. Haku-san is very well-known, next to Fuji and Tateyama, but its altitude scarcely reaches 9,000 ft. Yake-dake is an active Volcano of about 8,000 ft. Where the Hida Plateau begins to drop its height on the east of Lake Biwa there are a few small groups of mountains, which include Ibuki-yama, Jubu-sen, Ikoma-yama, Kongô-sen, etc., none of which exceeds very much more than 3,000 ft. above sea-level. To the north of this Plateau stretches out Noto Peninsula, where mountains of a small altitude, hardly reaching 3,000 ft., and of new volcanic rocks, are found.

Now we have to consider the Japanese Alps. This name was proposed by prof. W. Gowland some 40 years ago to the range bounding Hida, Etchû, and Shinano, and has recently been extended to denote the high mountains of the Akaishi System, Kiso System and Hida Plateau. They are no match for the European Alps as regards altitude, contain but slight traces of glaciers belonging to an earlier period, and hardly reveal the presence of lime stone. Yet the beauty of mountain torrents, the unexcelled magnificence of luxuriant vegetation, and the purity of ever-lasting snow is really unsurpassed. The abundance of moisture in the air brings about frequent change in the weather, thus making the scenery very much diversified. In addition there gush out many hot

ness of trustworthy guides. The better-known peaks of this System are Gwassan, Asahi-dake, Iide-san, Ninôji-dake, Hiragatake, Awagatake, Sumon-dake, Nakanotake, Komagatake, Hakkaisan, Ushigatake, Shimidzutôge, Mikunitôge, etc., which seldom exceed 7,000 ft. above the level of the sea.

Before entering into account of the Southern Arc the Fuji Volcanic Zone should be dealt with. This Zone is of great importance, as it divides, while traversing the Main Island transversely, the Archipelago into the Northern and Southern Arcs. It occupies the area lying between the upper course of the Tonegawa, the Shinanogawa and its tributary Uonogawa, the Echigo System, the Kwantô System, the Sakawagawa in Sagami, the upper course of the Saikawa in Shinano, the Himekawa in Echigo, and the Fujikawa. This Zone intersects the main land of Japan transversely and its southern part has formed the Seven Isles of Idzu, and the Bonin Islands, and finally joins Polynesia.

Fuji-san, which was the highest in Japan before the Sinico-Japanese war and is the most beautiful in form, stands in the central portion of this Zone. It measures just 3,778 metres in altitude, and is regarded as sacred by most Japanese people, and it has the largest number of climbers. One of the chief mountains belonging to this Zone is the Yatsugatake group, which is situated to the north of Fuji, and its highest point reaches nearly 10,000 ft. Other more renowned peaks of this Zone are Tateshina-yama, Izuna-san, Kurohime-yama, Togakushi-yama, Myôkô-zan, Naebasan, Iwasugo-yama, Asama-yama, Shirane-san, etc., the majority of which reach 8,000 ft. in height, and are comparatively easy to climb. Besides these belong to this Zone such famous mountains as Myôgis-san Haruna-san, Usuitôge, Yoneyama, Yahiko-yama, (all situated to the north of Fuji), Ashitaka-yama, the Hakone mountains, the Amagi mountains, Mihara-yama (all to the south of Fuji-san), most of which are not much more than 3,000 ft. in height. Mts. Asama and Mihara are well-known active volcanoes, and continuously emit a great deal of smokes. Mt. Shirane is another but less active volcano.

The Southern Arc retains in many places more of the original features of the folded systems compared with the Northern Arc, and its Outer and Inner Zones are more readily discernible. The ranges belonging to the Outer Zone are the Akaishi, Kiso, Kii, Shikoku, and Kyûshû Systems, and those representing the Inner Zone are the Hida Plateau, Tamba Plateau, Chûgoku System, and Tsukushi System. Besides we have the Formosa System, the Aso-Tara and Kirishima Volcanic Zones.

The Akaishi System runs west of the upper course of the Fujikawa, southwards down to Atsumi Peninsula where it dips

The Chôkai Volcanic Zone occupies the land extending from south of Hirosaki to Chôkai-san, where a small amount of paleozoic rocks and granite can be seen besides new volcanic rocks. The principal peaks of this Zone are Tsugaru-fuji, Moriyoshi-san, Taihei-zan, Chôkai-san, etc., and their height is less than 7,500 ft.

The Kitakami System occupies the area limited between the Kitakamigawa and Umabuchigawa, and runs southwards as far as Kinkwa-zan. The rocks are mainly of paleozoic formations and granite, whereas in the southern extremity of this System belongs to mesozoic formations. The chief peaks are Himegami-dake, Kabuto-gami-dake, Hayachineyama, Kinkwazan, etc., and their altitude does not exceed 6,500 ft.

The Nasu Volcanic Zone covers over the district extending from south of the Narusegawa to the upper course of the Tonegawa. The rocks are chiefly volcanic in nature, with scattered occurrence of gneis, mesozoic formations, and granite. The principal mountains are Adzumayama, Bandai-san, Nasu-zan (an active volcano), Taishaku-yama, Komagatake, the Nikkô mountains, Hiuch-dake, Hodakayama, Kôshin-zan, Akagi-san, etc., a few of which are more than 8,000 ft. in altitude.

The Abukuma System is limited between the Abukumagawa and the Kujigawa. The rocks are chiefly gneis, but paleozoic and mesozoic formations, and granite crop out in places. The principal peaks of this System are Ryô-zan, Akai-dake, Kaba-san, Tsukuba-san, etc., a few of which exceed 3,000 ft. in height.

The Kwantô System occupies the south-western part of the Kwantô, the largest of plains in Japan. The rocks are gneis, paleozoic and mesozoic formations, and granite. The principal peaks are Kimpu-zan, Kokushi-dake, Kobushi-dake, Karisaka-yama, Mitsumine-san, Bukô-zan, Daibosatsu-dake, Takao-san, Jûnigatake, Mitsutôge-yama, Mishôdai-san, Hirugatake, Tanzawa-yama, Ôyama, Nokogiri-yama, Kanô-zan, etc., the higher ones of which reach 8,500 ft. in altitude.

The group of mountains denominated Echigo System occupies part of the provinces of Echigo, Kôtsuke, Shimotsuke, Iwashiro, and Uzen. Amid the folded mountains there have taken place abundant eruptions in the tertiary period, thus making volcanic rocks found amidst gneis, paleozoic and mesozoic formations. The characteristic features of this System are the flat nature of summits, the large quantity of ever-lasting snow which is unsoiled and bright particularly in the Echigo side of mountains, and the virginity of mountains. However, the very circumstances of the large quantity of perpetual snow and the small number of climbers, which lead to extinction of tracks and trails, make ascent of these mountains very irksome, and this is redoubled by the scar-

and runs from its northern end (Cape Sôya) to its southern point (Cape Erimo), hereby forming the principal watershed. The rocks found in this System are of paleozoic and mesozoic formations, and granite also reveals itself. The principal peak of this System is Kamui-dake which attains a height of nearly 5,000 ft. above sea-level.

The Kurile Volcanic Zone consists chiefly of new volcanic rocks, and its activity has given rise to the Kuriles, which number three dozens of larger and smaller islands. The Zone runs south-westwards into Yezo where it has given forth numerous volcanoes, and after having intersected the Yezo System, it reaches the Iburi Peninsula. The southwestern part of this point originally belonged to the Outer Zone, and contains a small amount of paleozoic rocks and granite. The principal peaks belonging to this Zone are Alaid-fuji, Chachanupuri, O-akan-dake, Me-akan-dake, Taisetsu-zan, Ishikari-dake, Yezo-fuji, etc. which have the altitude of less than 8,000 ft. On account of their geographical position and under the influence of the cold currents, the mountains of Hokkaidô (Yezo and the Kuriles) are encircled at their foot by vegetation of the cold temperate, subarctic, and even arctic regions. In Yezo the forests in the lowland consist of large deciduous trees, such as for instance elm (*Ulmus japonica*), wychelm (*Ulmus montana* var. *laciniata*), beech (*Fagus Sieboldii*), birches (*Betula* Ermanni and *B. Maximowicziana*), oaks (*Quercus dentata* and *Q. grosseserrata*). Higher up on mountains we usually find very dense coniferous forests of *Abies sachalinensis*, *Picea ajanensis*, and *P. Glehni*. In the Kuriles the creeping pine (*Pinus pumila*) is found near the sea shore. Mountaineers are warned against attack of the brown bear with which the mountains of Hokkaidô are said to be infested.

In Honshû or the Main Island the Kitakami and Abukuma Systems, both of which belong to the Inner Zone, and the Kwantô System run almost end to end, facing the Pacific Ocean, while the Echigo System stretches along the Sea of Japan, and the northern end of this System ajoins the southern extremity of the Chôkai Volcanic Zone. In parallel to and between the above mentioned two sets of ranges run the Ôwu and Nasu Volcanic Zones, and they form two basins on both sides, in which the two railways leading from Aomori to Tôkyô are laid.

The Ôwu Volcanic Zone covers over the district from south of Aomori to east of the Yonezawa Plain. Although the higher peaks of this Zone are of new Volcanic rocks, gneis and granite also occur to some extent. The principal peaks belonging to this Zone are Hakkôdasan, Nambu-fuji, Komagatake, etc., none of which exceeds 7,000 ft. in altitude.

SKETCH OF THE MOUNTAIN-RANGES OF JAPAN.

(Specially written by Mr. N. Takatô for the International Congress of Alpinists, and rendered into English by Prof. J. Tanabe and Dr. H. Takeda.)

The present Empire of Japan consists of the Archipelago of Japan, Korean Peninsula, and a few other small islands. As the topographical survey of mountain regions in Korea and the southern half of Sakhalin has not yet sufficiently been made, since the annexation thereof took place not very long ago, we shall for the present confine ourselves to the consideration of the group of islands consisting of the Kuriles, Yezo, Honshû, Shikoku, Kyûshû, the Loochoos, and Formosa alone.

The chief mountain ranges which shape the Japanese Archipelago were formed as secondary effects, when the formation of the Continents took place at the creation of the world. It appears probable that there were in the prehistoric age two large systems of folded mountains confronting to each other. But the north-eastern part of these systems, which most likely were at the beginning nearly straight, became curved by the action of some forces, as we see them at present.

In order to give a clear idea of the mountain ranges we divide the Japanese Archipelago into two arcs: the Northern and Southern. Each of these are again subdivided into an Outer and an Inner Zones. Each of these Zones is composed of one or more systems consisting mainly of folded mountains, with occasional intrusion and eruption of volcanoes. Making Fujisan as the cardinal point, the land north of this point is called the Northern Arc or North Japan, and that south thereof the Southern Arc or South Japan. This contradistinction was brought about by the extensive and violent eruptions of both Kurile and Fuji Volcanic Zones. The terms Outer and Inner Zones were named by geologists, the former to represent those ranges of the existent folded mountains located in the south, and the latter those in the north.

In the Northern Arc the Outer Zone has been greatly obliterated by the above mentioned cause, and is now represented by the Yezo and Kwantô Systems alone, while the Inner Zone includes the Kitakami, Abukuma, and Echigo Systems. In addition there are in this Arc the Kurile, Ôwu, and Chôkai Volcanic Zones.

The Yezo System forms the main axis of the Island of Yezo,

Fujimichō IV: 6, Kōjimachi-ku, Tōkyō.
Postal Transfer Account: No. 4829 Tōkyō.

List of the Officers (Honorary).
Elected Nov. 26th, 1919.

General Secretary.

N. Takatō, Esq.

Recording Secretary.

S. Nakamura, Esq.

Treasurer.

Prof. C. Umezawa.

Librarian.

T. Takano, Esq.

Editors.

R. Kogure, Esq.

Dr. H. Takeda.

Prof. J. Tanabe.

Council.

Hon. K. Jō.

M. Saigusa, Esq.

Dr. M. Tsujimoto.

R. Kogure, Esq.

T. Takano, Esq.

I. Tsujimura, Esq.

K. Kojima, Esq.

N. Takatō, Esq.

Prof. C. Umezawa.

S. Koudō, Esq.

Dr. H. Takeda.

S. Yamakawa, Esq.

S. Nakamura, Esq.

Prof. J. Tanabe.

The object of the Club being promotion and diffusion of the knowledge of mountains, and everything concerning mountains, it always welcomes to its membership those anxious to further this object by their interest and support.

An applicant for admission into the Club must be proposed and seconded by three of the members, one of whom must be a Member of the Council, and it is necessary that he should fill up an official form with particulars of ascents made or nature of the work accomplished by himself, and send it in to the Club. The admission will be decided at a Meeting of the Officers.

Any ordinary member, on payment of the amount not less than 100 yen at a time, shall be exempted thereafter from the annual subscription, so long as he remains enrolled as a member.

Members are required, on their admission into the Club, to pay 5 yen as entrance fee. They ought to pay an annual subscription of 3 yen by the end of February. Members who fails to do so must pay an additional sum of 50 sen as special charge. Any member who does not pay his dues even in this way by the end of March is to be expelled. Payments to the Club are to be made through Postal Transfer Account or by P.O.O. Neither cash nor cheques are accepted.

Members are entitled to receive the Club's Periodical Publications. They may also attend the Ordinary Meetings of the Club and have access to the books and maps in the Club Library.

Every member shall receive a Club Badge on loan, which must be returned, on his resignation of membership.

Members who are away more than twelve months may, at their request, apply to be registered as "Absent Members" on payment of Yen 2 for fee. Absent Members may keep Club Badge; need not pay subscription; shall not get any of the Club's Publications; are not privileged to be present at any of the Club's Meetings; nor are they entitled to vote. When returned they should pay the arrears for the period of absence, and then shall receive the Club's Publications issued during their absence. In case their absence be prolonged more than three years, they have to resign membership, and return the Club Badge. If, however, they wish to rejoin the Club hereafter, they have the privilege of being admitted through an introduction by a Member of the Council only.

All communications should be addressed to the General Secretary. Enquiries equiring a reply should enclose return postage.

SANGAKU

Vol. XVI

December 1921

No. 2

(English Supplement)

CONTENTS

	PAGE
SKETCH OF THE MOUNTAIN-RANGES OF JAPAN.—N. TAKATÔ	1
LIBRARY	9
THE FOURTEENTH ANNUAL MEETING	9
THE THIRTEENTH ORDINARY MEETING	10
THE FOURTEENTH ORDINARY MEETING	10
THE FIFTEENTH ORDINARY MEETING	10
THE SIXTEENTH ORDINARY MEETING	11
THE JAPANESE PART OF THE JOURNAL	11
PLATES IN THE JAPANESE PART	11

Tôkyô
Nippon Sangaku Kwai

The Journal of the Japanese Alpine Club

SANGAKU

Vol. XVI

1921

No. 2